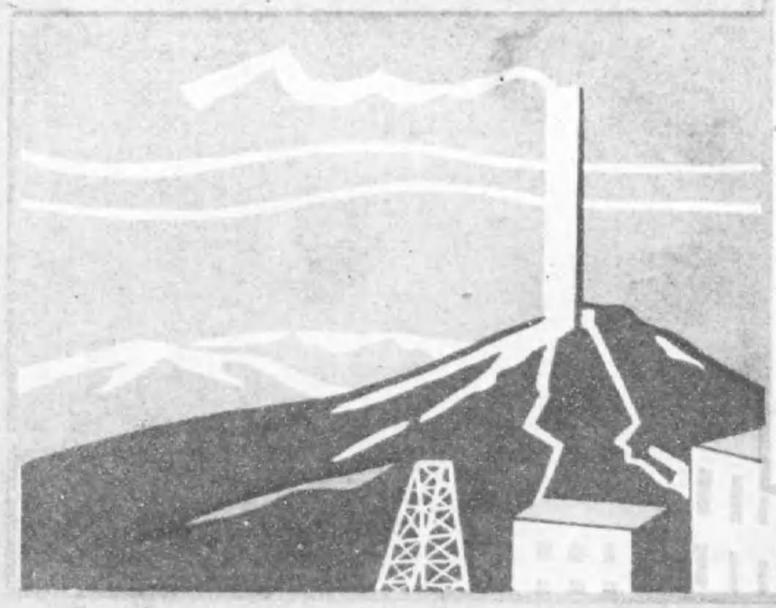
茨城大觀



茨城縣教育會編纂

312
1235

始

營業所々在地

（市内）
本一丁目支店
馬口勞町支店

（縣下）
磯小石笠岩湊平瓜
濱川塚間瀬町連
支支支支支支支
店店店店店店店

大長太大久高助磯大鉾鹿麻玉潮
宮倉田子慈萩川原津島生造來
支支支支支支支支支支支
店店店店店店店店店店店

龍ヶ崎支店
江戸崎支店
土浦支店
眞鍋支店
石岡支店
柿岡支店
北條支店
谷田部支店
上郷支店
下館支店
下妻支店
眞壁支店
關本支店
黑子支店

水海道支店
石下支店
結城支店
境支店
古河支店
岩井支店
幸島支店
取手支店
藤代支店
守谷支店
布川支店

（他縣）
眞岡支店

久下田支店
益子支店
福島支店
梁川支店
桑折支店
平來支店
勿田支店
植本支店
湯町支店
原臺支店
仙

資本金　壹千百五拾六萬六千九百圓

株式會社

常陽銀行

水戸市南町　電話（七七三六六）（一四一三）　國一三三　九四〇

低利長期で

便利な年賦貸出

田畑抵當　年六分八厘

（日歩一錢八厘六毛）

本店　水戸市仲町

株式會社

茨城農工銀行

電話（二一〇二七番）（一四五二番）

支店　土浦、下館、水海道、太田

特217
508

常磐無盡株式會社
水戸市
電話 四二八 六八三 一、二二三 番
常務取締役 北山勇之助

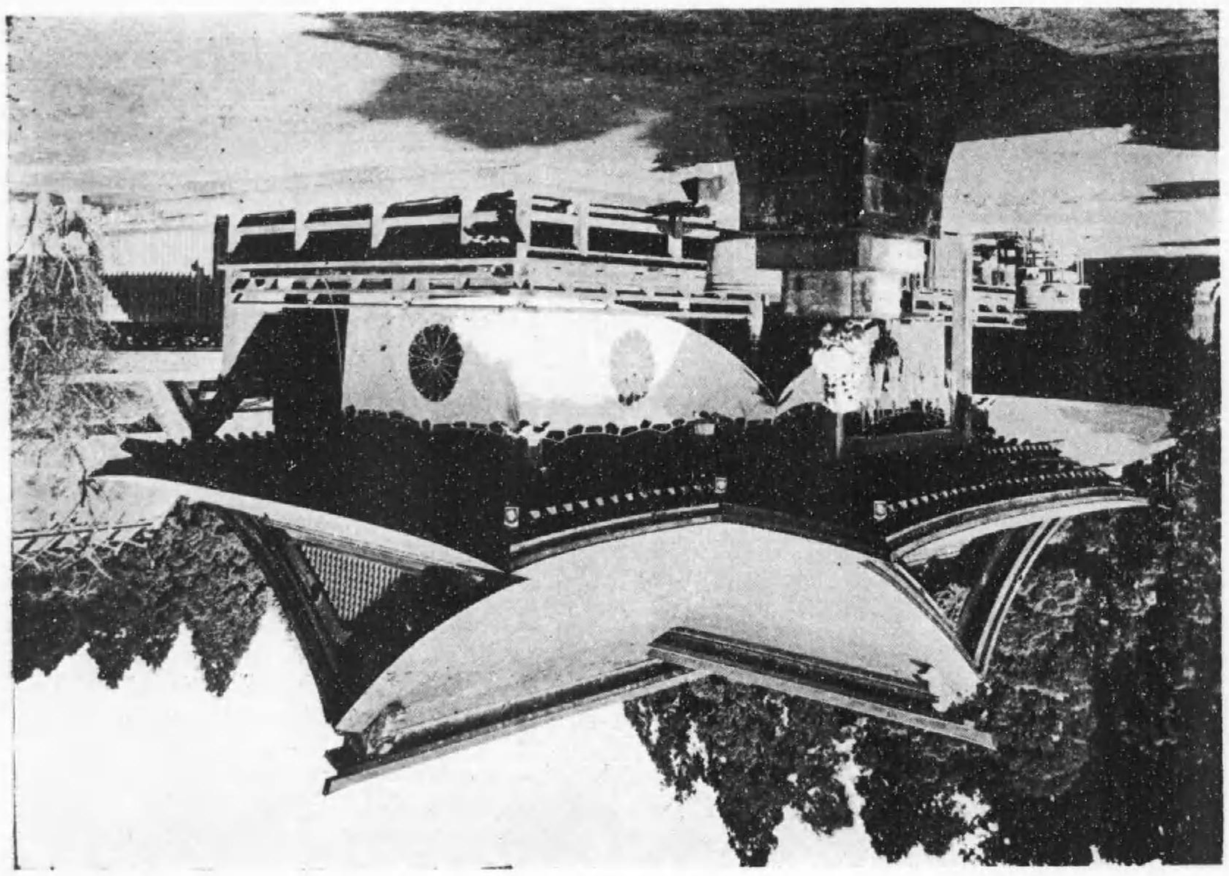
茨城縣教育會編纂

增補改訂

茨城大觀

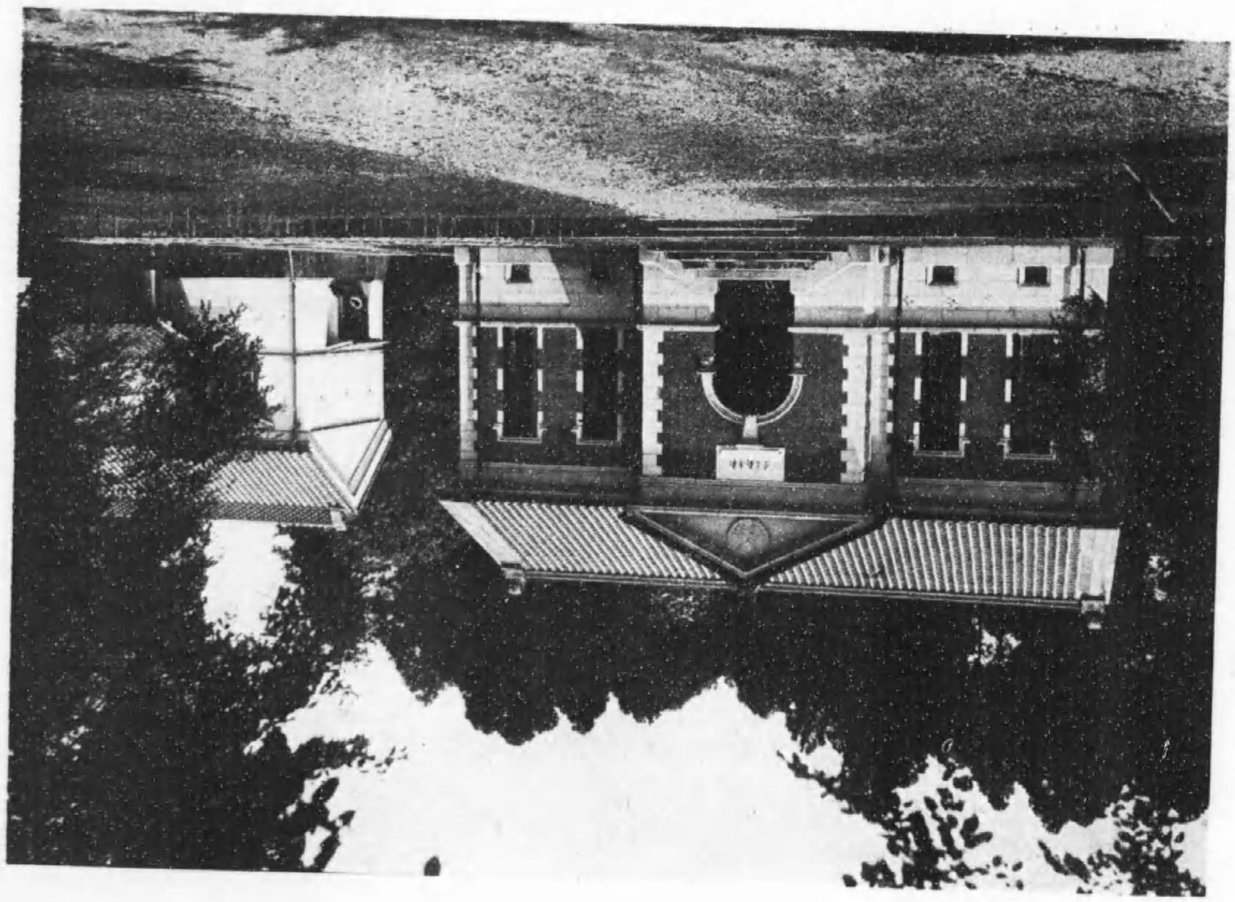
協文社

水戸市立圖書館

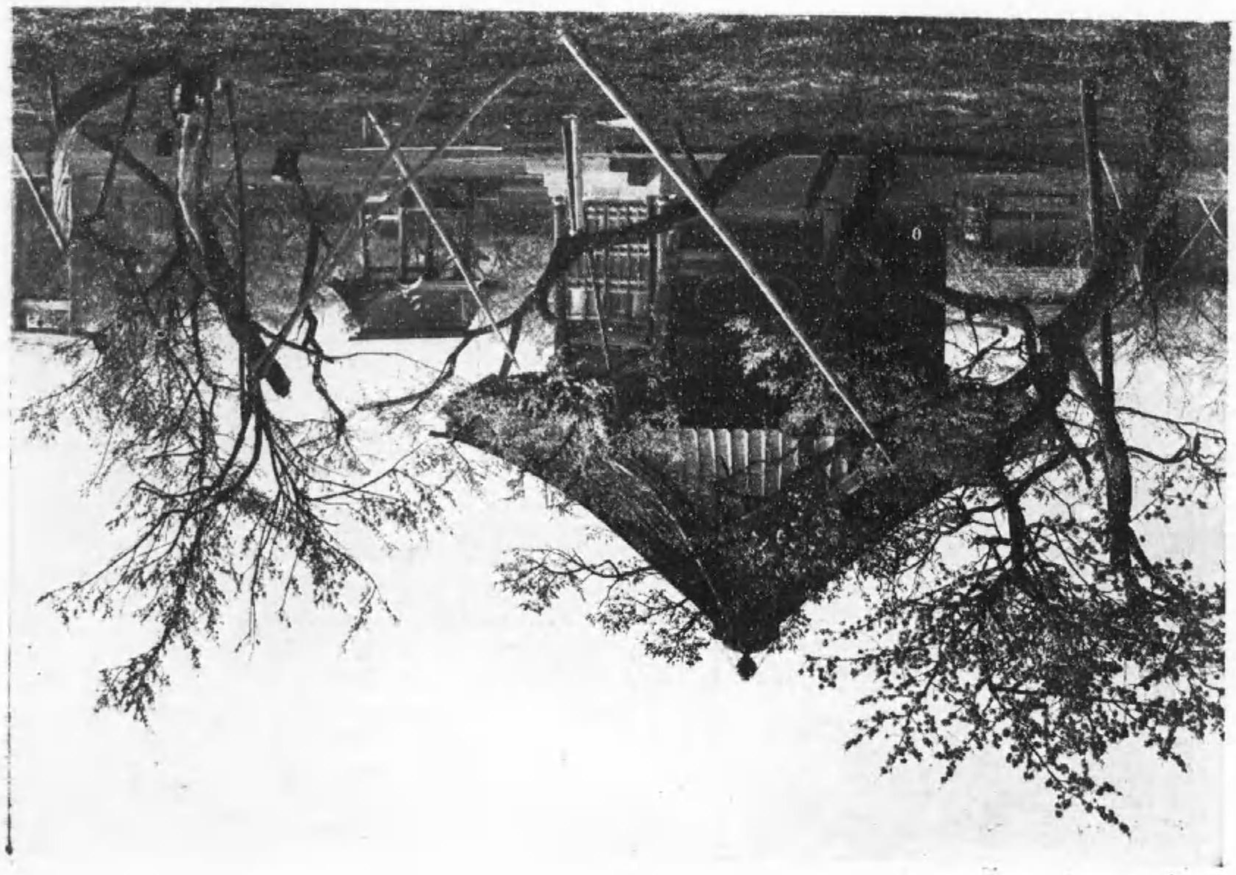


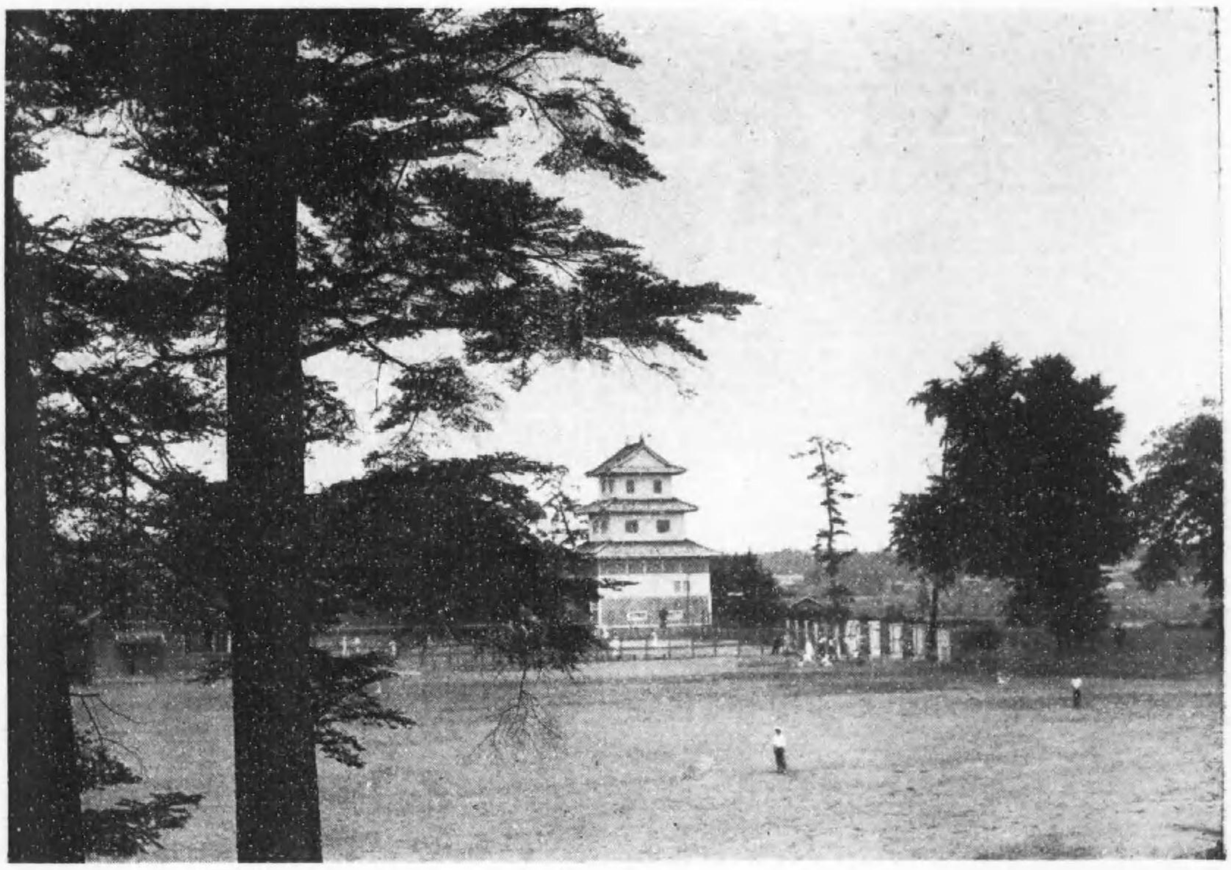
常磐神社

偕樂園梅林

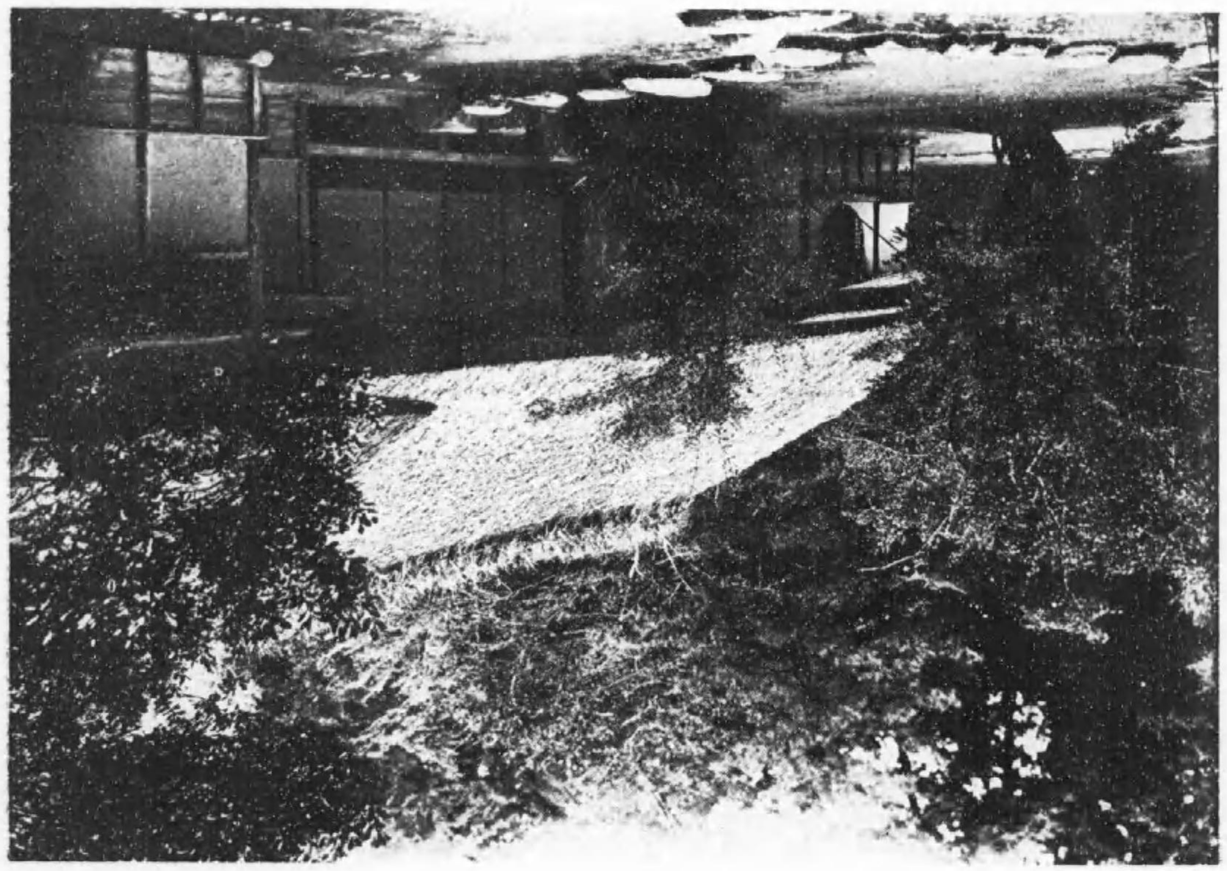


總 參 廳

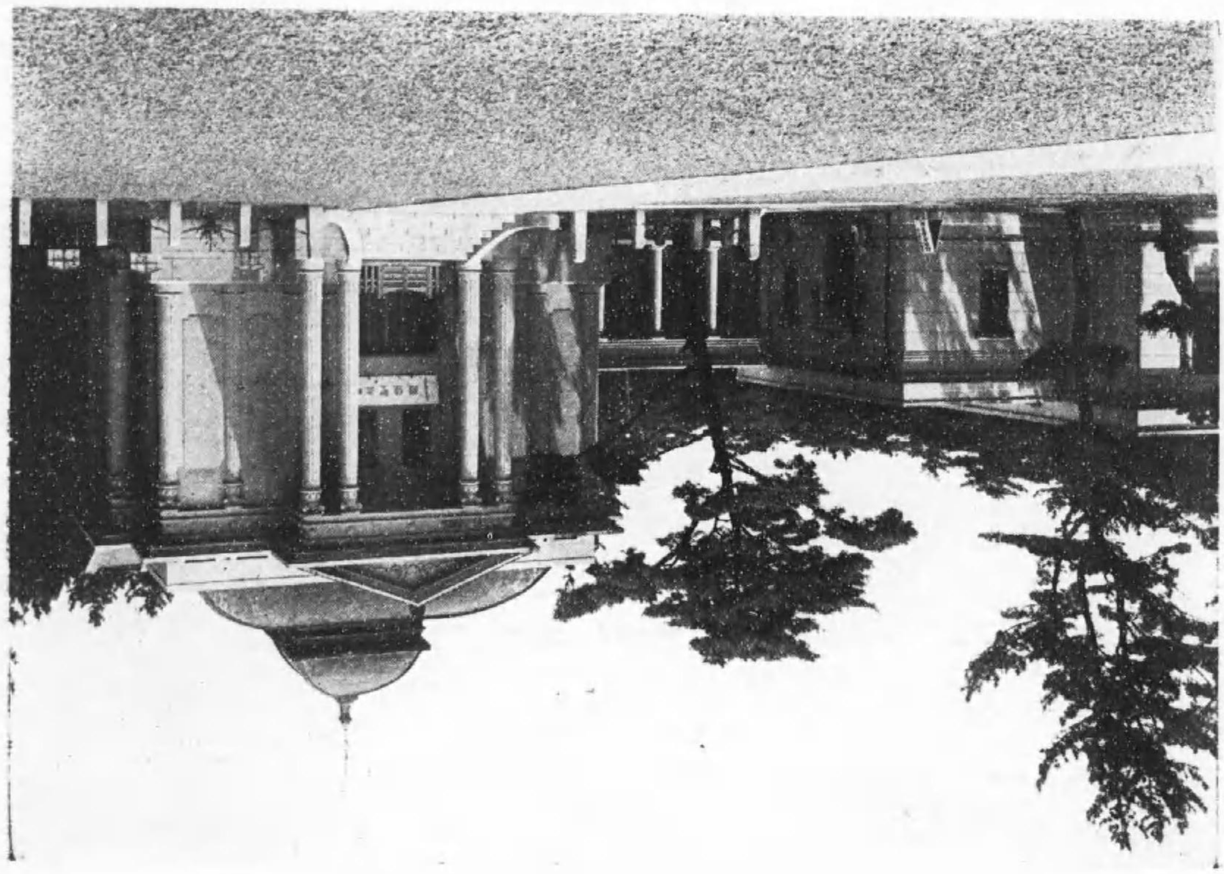




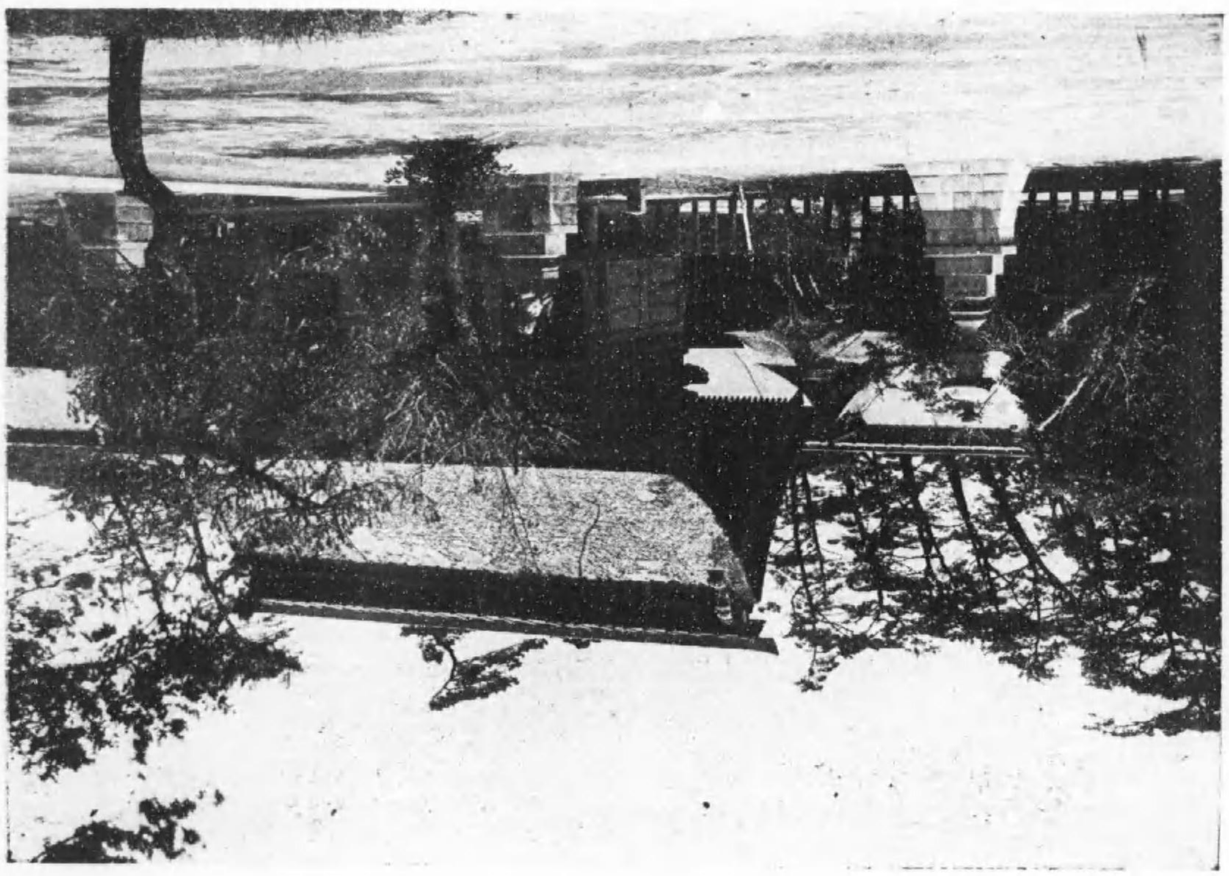
水　　戸　　城



西　山　莊

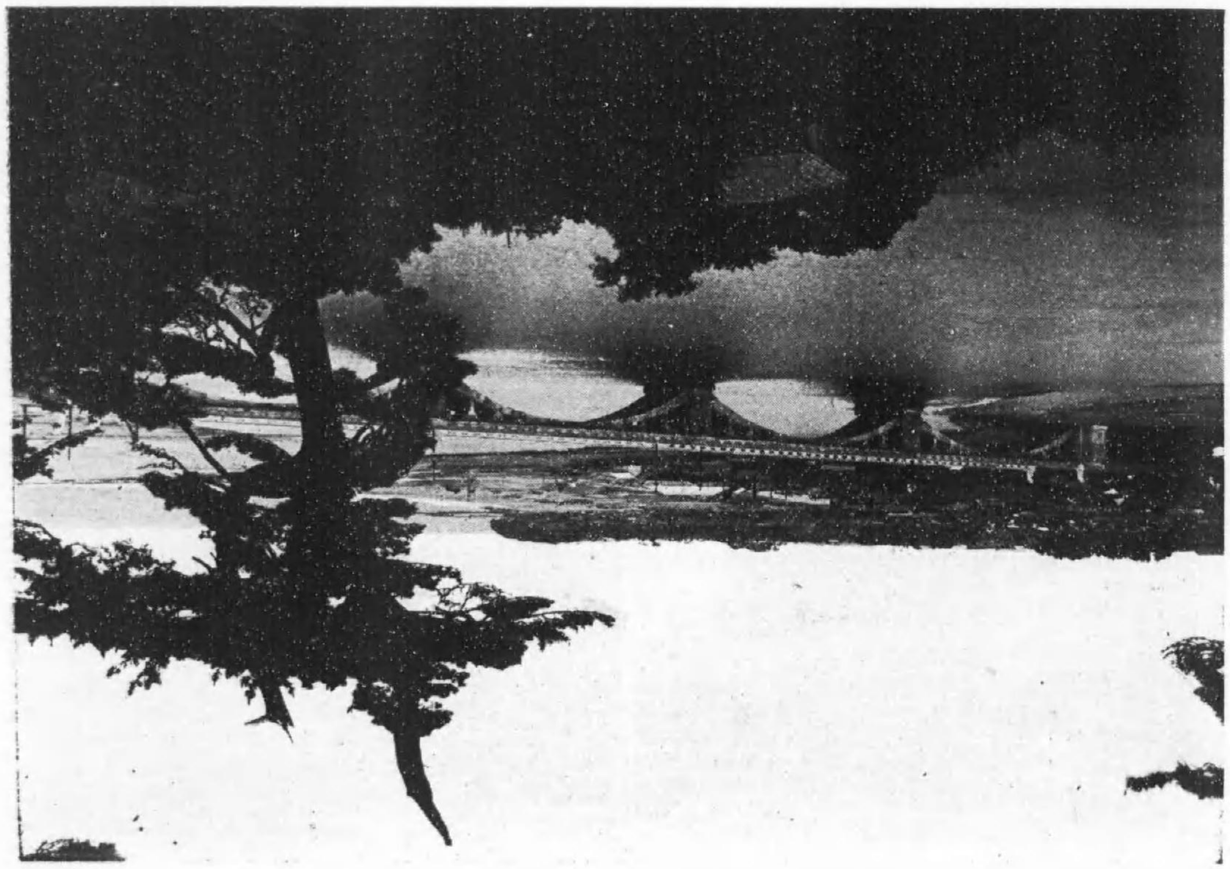


明治記念館

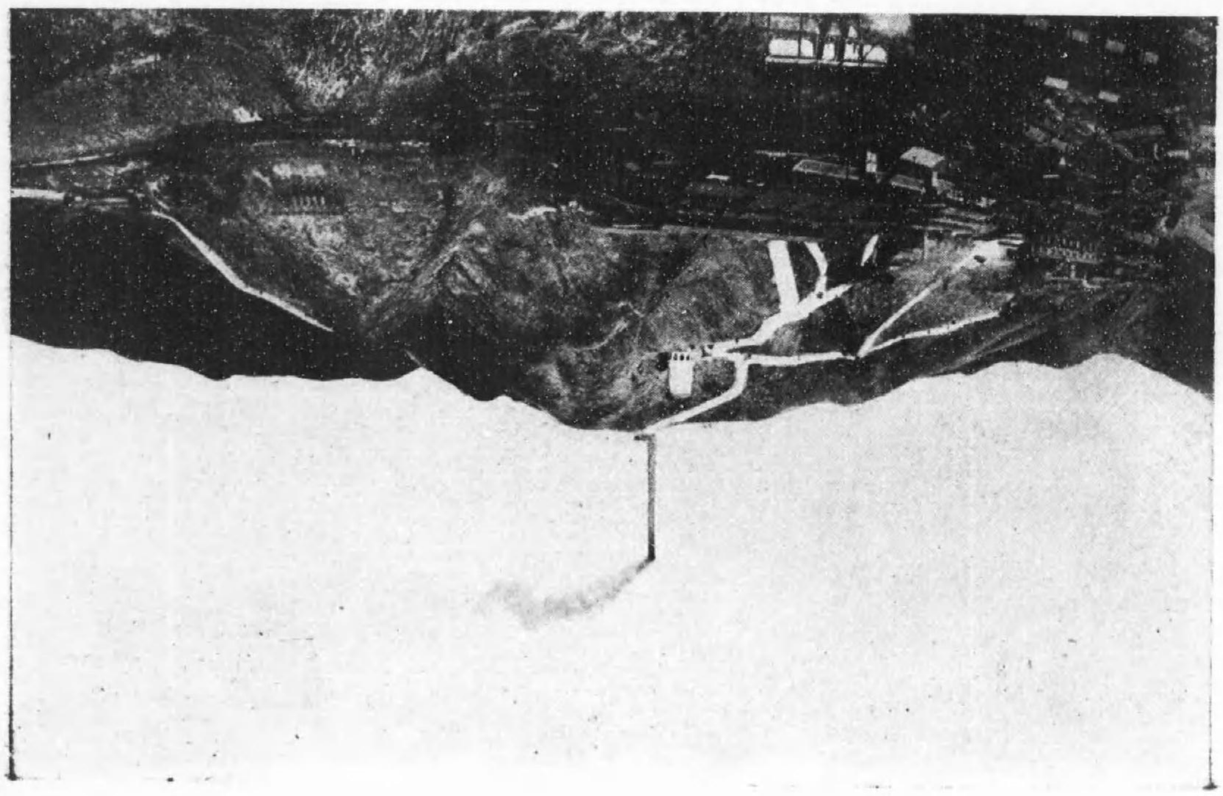


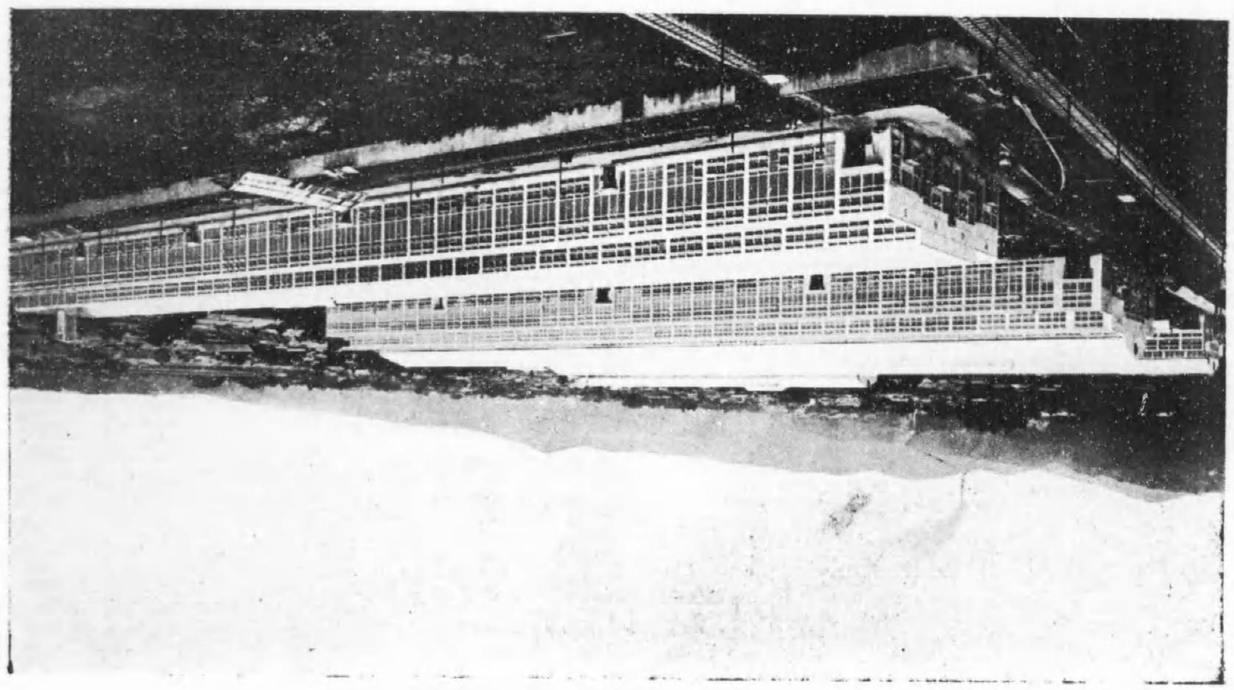
大　沈　神　社

海　門　橋

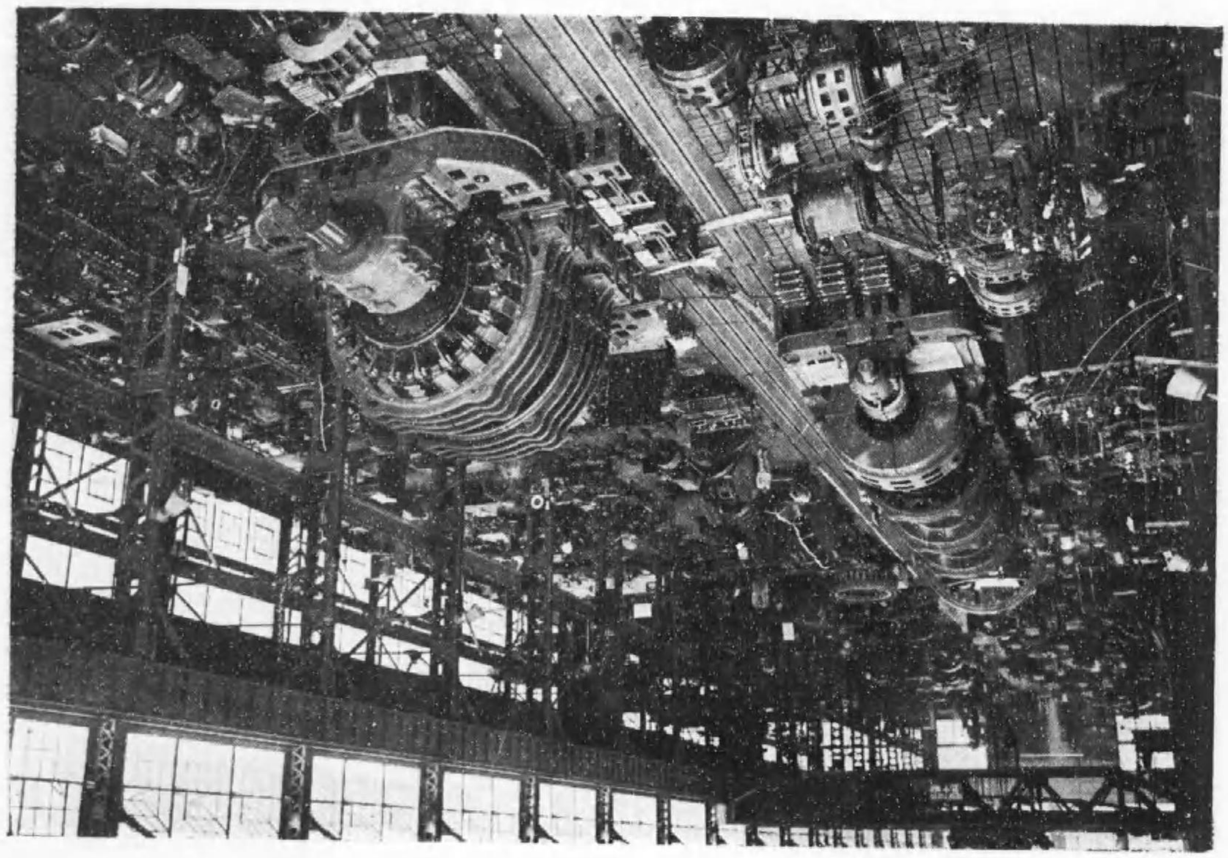


日　立　鑛　山



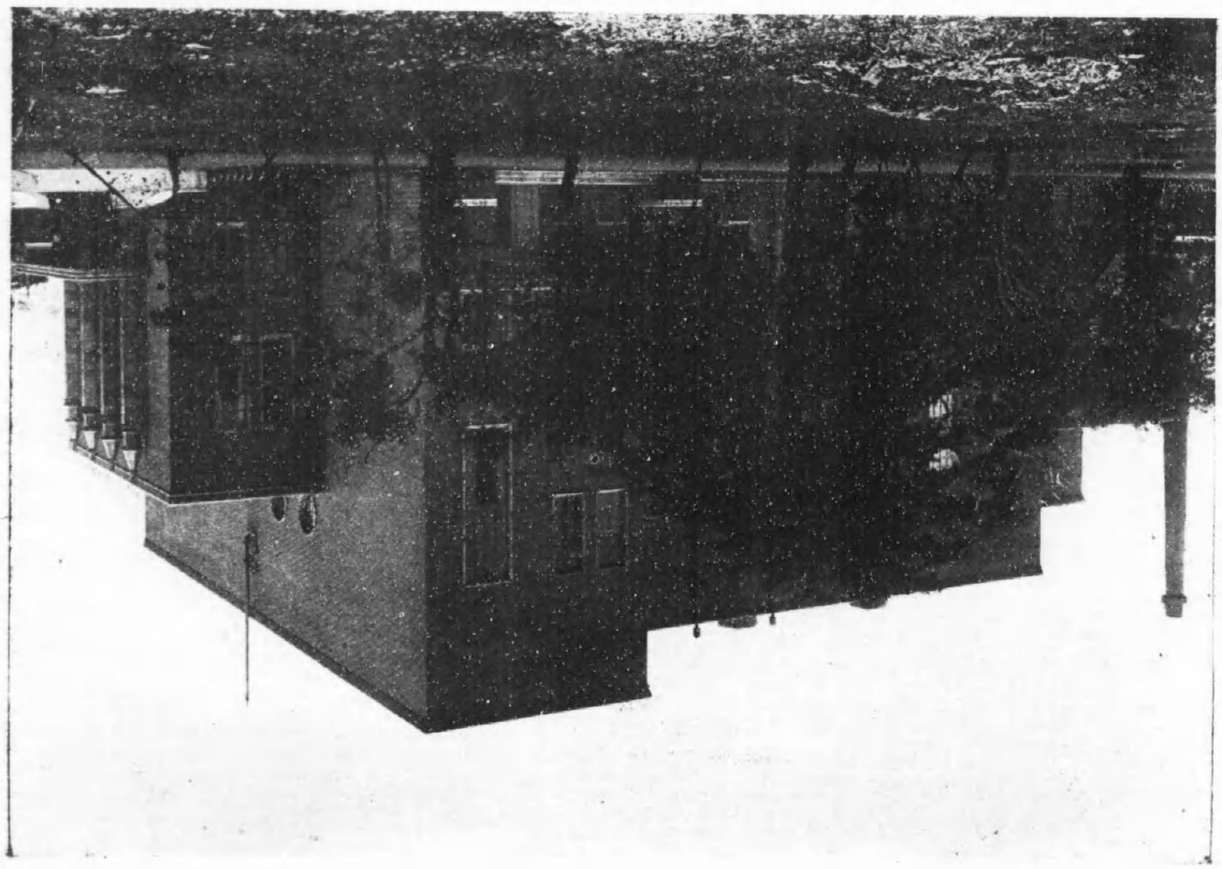


日立製作所瀧井工場



日立製作所廻轉工場の一部

袋田瀧



浴 槽 會 館

目次

一、茨城縣……一
二、水戸市……二三
三、東茨城郡……四四
四、西茨城郡……七六
五、那珂郡……九五
六、久慈郡……一一〇
七、多賀郡……一二六
八、鹿島郡……一四二
九、行方郡……一六三
一〇、稲敷郡……一七五
一一、新治郡……一八六
一二、筑波郡……二一三
一三、眞壁郡……二三一
一四、結城郡……二四七
一五、猿島郡……二六〇
一六、北相馬郡……二六六

改訂

茨城大觀

茨城縣

概說

位置・境域　本縣は關東平野の東北隅に位し、東經一三九度四一分五秒に起つて同一四〇度五〇分四九秒に盡き、北緯三五度四四分二八秒に始つて同三六度五五分四五秒に終る。而して東は太平洋に面し、北は福島、西は栃木、南は埼玉、千葉の諸縣に接し、廣袤東西約一〇五・五粁、南北約一三三・八粁、周圍約五四二・三粁、面積約六〇九二・二五六方粁あり、之を一市十四郡に分ち、縣廳を水戸市に置いて管轄して居る。十四郡の中常陸國に屬するは東茨城・西茨城・那珂・久慈・多賀・鹿島・行方・稻敷・新治・筑波・眞壁の十一郡で、下總國に屬するは結城・猿島・北相馬の三郡である。

地勢・氣象　本縣は北部は阿武隈山脈の餘勢を受け、八溝・久慈・多賀の諸山脈が連亙して居る。而して八溝山脈は南走して尺丈山・鷲子山等栃木縣との境に起伏し、一たび那珂川に中斷されて餘脈

尙西南に延び、加波・筑穂・筑波等の諸山となる。又八溝の東、久慈川を隔てゝ太平洋との間には久慈多賀の諸山脈卽ち男體山・東西金砂山・堅割山・高鈴山・眞弓山等重疊盤踞し、平地は極めて少いが東海に近つくに從ひ田圃漸く開け、其の間久慈川・里川等貫流して灌漑の便をなして居る。西南部地方は次第に廣闊となつて關東平野を形成し、田園林野遠く相連り、其の間を縫つて繼瀨川・櫻川及び小貝・鬼怒・利根等の諸川が流れ、或は霞ヶ浦に入り或は合流して海に注ぐ。又此平野は土地が一般に低濕で、湖沼が隨處に存し、霞ヶ浦は其の最大なるもので、之に次いで北浦・牛久沼・菅生沼・鵠戸沼等がある。縣の東方一帶は太平洋に臨んで居るが、其の沿岸は屈曲極めて少なく、殊に鹿島灘沿岸は砂濱の延長七二粁、その間些の出入が無い。那珂川口附近から北方にかけて多少の出入も見られないでは無いが、概ね單調で良港灣たる要素を缺いて居る。

本縣の氣象は位置に依つて幾分の相違がある。卽ち久慈・多賀の北部福島縣に接續せる地方に於ける初霜の時季は、十月中旬であるのに、南方千葉縣に接觸する稻敷・行方・鹿島等の地方は約半月遲く、北部の氣溫は縣の中央なる水戸に比し約一度低溫であるが、南部のそれは却て一度程高溫を示す。又東方海岸地方一帶の氣候は、海水の調和作用に依つて、夏季冷涼冬季溫暖なる現象を呈する。

土地　本縣土地は總反別四十九萬六千七百五十一町九反歩、で內御料地二百五十七町六反歩、國有地六萬千二百五町五反歩、民有地四十三萬五千二百八十八町八反歩である。而して地類別に之を細別せば、耕地二十一萬八千五十一町七反歩、山林二十二萬六千七百九十九町七反歩、原野二萬千六百九十六町一反歩、宅地一萬八千七百三十三町七反歩、池沼三千五町九反歩、其の他八千四百六十四町八反歩となる。

人口　昭和八年十月一日現在に於ける本縣戶口の總數は、本籍人口百七十九萬七百十七人、內男八十九萬七千八百四十六人、女八十九萬二千八百七十一人、現住人口百五十四萬九千七百八十三人、內男七十六萬六千九百十二人、女七十八萬二千八百七十一人、現住戶數二十八萬二百七十六戶で、一方粁平約二百五十四人、一戶平均五・五三人に當る。

沿革　常總の地は神代の昔經津主(香取)武甕槌(鹿島)の兩神之を經略し給ひ、人皇の代に及び、神武の朝天富命東方に膏腴の地を求めて結城の地方を開き、崇神の朝建借間命・毘奈良珠命・筑箪命等常陸地方の兇賊を平げて皇化を布き、次いで景行の朝日本武尊東征の途次更に此地方の人民を撫育し給ひ、常總の形勢茲に全く定まつたので、次代成務の朝、新治・筑波・那賀・久自の四國造を

置かれ、後應神の朝茨城・多珂二國造を加へて六國造となり、是等國造は子孫相承けて地方を治めた。尙北總の地は結城の縣(あがた)として縣主が置かれたもの丶樣である。

大化改新國郡の制が布かる丶に及び、舊來の六國造を廢して其の地に常陸國を立て、國府を茨城(今の石岡町)に置き、國司を派して之を統治せしめ、國の下に郡を置き、新治から白壁(後眞壁)郡を、筑波から河內・信太二郡を、茨城から行方郡を、那珂から鹿島郡を分ち、久慈・多賀は其ま丶郡とし、併せて十一郡となり、北總の地は結城・岡田・相馬・猿島の四郡となつて下總國に隷し、郡には各郡司を置いて之を治めさせた。然るに平安朝の末國郡の制頽れ、權門勢家の庄園所々に興り、源平並に藤原諸族の武人が其庄司となつて勢力を扶植するに及び、國司の勢衰へて武人を制する能はず、常總地方の形勢は一變した。卽ち平將門が族平貞盛と爭つて屢丶常陸を侵し、平忠常兵を兩總に用ゐて源賴信の追討を受け、東國は屢丶戰亂の巷となり、爾來常總の武族は源氏の幕下に歸し、或は奧羽に京都に轉戰して、大に其武力を練つた。後源賴朝が興るに及び、常總武士の大部が其旗下に屬したのは、累代の厚い關係に基くもので、かくして彼等は鎌倉將軍の臣下となり、「國司郡司の公家政治に代つて、守護地頭の武家政治が布かる丶にとになつた。

鎌倉幕府の初期以來、常總の地には結城・小田・大掾・佐竹の四氏各一方に雄視し、那珂・笠間關・下妻・相馬等の小族其間に介在したが、北條氏滅び、建武中興を經て吉野朝の騷亂時代に入るや、常總の形勢二分して、佐竹貞義・結城朝祐は足利に應じ、小田治久・大掾高幹・那珂通辰等は吉野朝に從ひ、かくて通辰治久高幹は楠木正家と共に瓜連に據つて佐竹と戰ひ、「通辰は壯烈なる戰死を遂げ、正家は陸奥に去り、高幹後賊に降つた。其後北畠親房卿の常陸に漂著するや、小田治久之を其の城に迎へ、關宗祐・下妻政泰等と力を協せ、賊將高師冬・佐竹貞義・大掾高幹等と戰ひ、力盡きて師冬に降つた爲、親房卿は關城に移り、尙奮戰を續け、宗祐は賊將結城直朝を斃したが外援來らず、宗祐・政泰等亦戰死し、親房卿は吉野に還つて、常陸は全く賊の手に沒したのであつた。神皇正統記・職原鈔の二書は親房卿が小田籠城中の著述である。

室町時代に入つてからは、常總の地屢々戰亂の巷となつた。大掾の族小栗滿重は關東管領に叛して亡ぼされ、大掾滿幹は其本據水戸城を江戸通房に奪はれて勢力を失ひ、結城氏朝は前管領足利持氏の遺孤を奉じて將軍義教に抗し、結城に籠城して日本半國十萬の兵を引受けて奮鬪玉碎し、更に足利成氏が古河城に據り、常總野の諸將を率ゐて上杉氏と連年の抗爭を續けてからは、關東一帶は兵

亂の渦中に捲き込まれ、諸將各其城に據つて互に侵略を事とした。此間に佐竹氏次第に勢力を張り、義重に至つて頻に小田領を攻めて終に之を屈服せしめ、子義宣は常野諸將と兵を聯ねて小田原の北條氏政と覇を爭ふに至つた。かくて天正十八年には、佐竹義宣・結城晴朝等豐臣秀吉に屬して小田原を滅ぼし、且義宣は勢に乘じて江戸大掾兩氏を攻めて水戸・石岡兩城を奪取し、鹿島行方に割據せる大掾諸族を平げて常陸を一統した。然るに關ヶ原の役に佐竹氏は上杉氏と結んだ爲、水戸五十四萬石を削られて秋田二十萬石に移され、又結城晴朝の養子秀康は、徳川家康の庶子であつたので、福井六十七萬石に移封となり、かくして常總の形勢は再び大變動を蒙つたのである。

江戸時代に於て常總の地は諸侯領地・幕府直轄地・旗本采邑の三者に分れ、特にその初期の間は諸侯の移封が屢〻行はれたのであつたが、中期以後は殆んど固定して了つた。今幕末に於ける列藩配置の狀況を擧げると、

水戸藩(徳川氏、三十五萬石)。**土浦藩**(土屋氏、九萬五千石)。**笠間藩**(牧野氏、八萬石)。**下館藩**(石川氏、二萬石)。**石岡藩**(松平氏、二萬石)。**谷田部藩**(細川氏、一萬六千三十九石)。**牛久藩**(山口氏、一萬十七石)。**宍戸藩**(松平氏、一萬石)。**下妻藩**(井上氏、一萬石)。**麻生藩**

(新莊氏、一萬石)。**古河藩**(土井氏、八萬石)。**結城藩**(水野氏、一萬八千石)。等で、この外明治二年に**松岡藩**(中山氏、二萬五千石)。**志筑藩**(本堂氏、一萬百十石)。が藩となつた。又本領が縣の地域以外にあつて領地を此處に有する諸藩は

川越(松平氏)。守山(松平氏)仙臺(伊達氏)。關宿(久世氏)。佐倉(堀田氏)。壬生(鳥居氏)。前橋(松平氏)。淀(稲葉氏)。峰山(牧野氏)。長瀞(米津氏)。小田原(大久保氏)。一ノ宮(加納氏)。飯野(保科氏)。一橋家田安家。山内家。(高知藩主分家)。

等であつた。

本縣地域内に散在した幕府直轄地と旗本采邑とは、常陸の若森・下總の葛飾・上總の宮谷の三縣に分屬せられ、明治四年七月藩を廢して其まゝ之を縣に改め、尋いで十一月これら諸縣を統合して茨城・新治・印旛の三縣に屬せしめ、茨城縣は常陸國多賀・久慈・那珂・茨城・眞壁諸郡を、新治縣は同國新治・筑波・河内・信太・行方・鹿島諸郡を管し、下總國猿島、結城・岡田・豐田並に利根川以北の葛飾・相馬郡は印旛縣に屬せしめたが、同六年六月印旛縣を千葉縣と改稱し、八年五月新治縣を廢し且利根以北の下總の諸郡を併せて之を茨城縣の管下に移したのであつた。

其後明治十一年茨城郡を東西に分け、相馬郡を北相馬郡、葛飾郡を西葛飾郡と改稱し、同二十二年四月市町村制の實施に伴ひ、東茨城郡の內を割いて水戸市を置き、同二十九年四月結城・岡田・豐田三郡の地域を併せて新に結城郡を、西葛飾・猿島二郡を併せて新に猿島郡を置き、信太・河內二郡を廢し其區域の大部を以て新に稻敷郡を置き、一部を新治・筑波二郡に編入した。其他二十八年四月及三十二年四月の二回に亙り、本縣と千葉縣との間に境域を交換變更した小異動があつて今日に及んで居る。

教育及兵事

小學教育 學齡兒童就學督勵に就ては縣市町村を擧げて最も注意を加へ、熱心奬勵の結果就學の步合は九九・四九(昭和八年度)を算するに至つた。小學校數は六五〇校に上り、教員數は本科正教員男三、二九五人、女一、〇五二人、專科正教員男二二二人、女二九八人、准教員男三二〇人、女八四人、代用教員男三一一人、女二三五人で、學級數百に對する本科正教員の數は八二・三三人である。

補習教育 は明治三十二年に創設實行せられ、三十七年以後の國際競爭に連れて大に勃興し、四十一年以後大正年代にかけて漸次著實の進步を見たが、昭和以後は其革新期ともいふべく、施設全縣下に普及し大に面目を改めて來た。昭和九年三月一日現在に於ける實業補習學校の數は四八六校、教員數二三〇人、生徒數三七、八五四人を算する。教員數が學校數に比して過少なのは、學校の大部分が尙季節制を採り、小學教員から兼務させ、通年制として專任の教員を置く學校が少い爲である。

中等諸學校 本縣昭和九年三月一日現在中等諸學校總數は九六校を算し、內 **師範學校** 二(男子一(茨城中、水戸)。**中學校** 縣立一〇(水戸・土浦・下妻・太田・龍ヶ崎・水海道・鉾田・日立・境・麻生)私立一(茨城中、水戸)。**高等女學校** 縣立七(水戸二・土浦・下館・水海道・龍ヶ崎・太田)市立一(水戸)私立二。**實科高等女學校** 町立組合立私立併せて九。**農學校** 縣立九(水戸・石岡・笠間・眞壁・鹿島・江戸崎・大子・取手・結城)其他二。**工業學校** 縣立一(吉田村)。**商業學校** 縣立四(水戸・下館・湊・古河)。**女子技藝學校** 町立三。**聾啞學校** 縣立一。**盲學校** 縣立一、私立一。其の他學校三九となつて居る。而して以上九十六校の教員數は九一一人、生徒數實に一九、四四四人に達する

社會教育 本縣昭和九年三月一日現在に於ける **青年訓練所**の總數は三百九十八、內公立三百九十六、私立二で生徒數一八七五六人、年度內の終了者數三、〇八三人に達する。又縣下の

青年團 數七六三、內男三八〇團で、團員五五、二九一人、女三八三團で、團員三六、七二五人に上る而して男子青年團は毎年秋季に於て縣聯合大會を水戸に開き、辯論・陸上競技・撃劍・柔道・相撲等各種の技能につき、郡市聯合團對抗の優勝戰を行ひ、女子青年團に於ては、毎年二、三月の候を期し數郡市聯合の大會を縣下要所に開いて居る。**圖書館** には水戸に縣立圖書館あり、龍ヶ崎に同中學校附屬圖書館あり、以上二館の外縣內には公立五一、私立三九の小圖書館があつて、全体を通じ圖書數十六萬三千餘、閲覽人員三十三萬三千百餘人に上る。其他縣立の **大禮記念教育參考館** を水戸に置く。

教育會 本縣教育會は約五十年前の創立で、其後郡教育會、町村教育會を設けて漸次系統的に一大團體を組織し、從來の機關雜誌『茨城教育協會雜誌』を『茨城教育』と改題して引續き發行し、其事業としては、教員の學力を補修する爲の講習會、教員養成を目的とする講習會等を開き、補習學校用教科書、小學校兒童用練習帳並夏季練習帳等の編纂出版、夜間中學茨城弘道學院の經營及各種の研究調査等をなし、縣教育の實際に當つて貢献して居る。

兵事 本縣昭和八年度に於ける壯丁の受檢者總數は一萬五千九百四十三人、內甲種合格は四千十一人で約二割五分を占め乙種合格は四千八百三十九人で三割弱に當り國民兵及兵役免除となれるものは四割五分强に當つて居る。

次に海軍志願兵は二千九十九人を算し、內合格者は三百六十三人で一割七分弱に當り、右の內採用せられたるもの二百二十四人であつた。

警備及衛生

警察官署 昭和八年末に於ける警察官署は、警察部一、警察署二六、派出所及駐在所四〇二で、同職員の數は警察部長一人、警視四人、警部及警部補七九人、巡査八二六人で、巡査配置の狀況は、一方粁〇、一四人、一人當人口は市部七一六人、郡部八〇二人である。

犯罪 昭和八年の犯罪件數は一四、七三九件、檢擧件數は一六、一〇三件で、人口千に付發生十件に當り、其の主なる犯罪を擧ぐれば、殺人六九件、傷害六八九件、强盜三一件、窃盜六、三七二件、詐欺恐喝二、七四一件、横領二、〇八八件等である。

消防 昭和八年中に於ける火災度數は五九〇度で、前年に比し五六度を減じ、燒失戸數住家二九五

戸、非住家四二七棟、この損害額二四二、五五三圓に上る。又同年末の消防施設は組數四〇三、公設三五二、私設五一で、消防員數は九七、三一二人、主要器具はガソリンポンプ一九九臺、腕用ポンプ一、九一三臺である。

衛生 昭和八年末に於ける病院數(全部私立)は四一で、人口三七、七九九人に對し一に當り、醫師は七五七人で人口二、〇四七人に對して一人、齒科醫は二九五人で、人口五、二五三人に對し一人、藥劑師は一七六人で人口八、八〇五人に對し一人の割合に當り、其の他産婆八四五人である。又同年中に於ける十種傳染病患者は二、五一八人、內死亡者六一〇人に及び、約二四%を占めて居る。赤痢病最も多く患者八二六人、內死亡者三七八人、腸窒扶斯患者之につぎ八九八人、內死亡者一二三人、實布垤里亞患者三二三人內死亡者九五人を數へ、パラチブス患者三八八人內死亡者一一人等之に亞ぐ、其の他は著しく低下し、痘瘡の如きは大正十二、十三兩年に發生を見たゞけで、其の後患者を見ない。

交通

本縣の道路は昭和八年十二月末日現在 **國道** 二路線一五二粁八、**縣道** 二八五路線二、六六六粁一、**市道** 一三六粁二、**町村道** 三九、三八五粁八、合計四二、三四一粁六の路線延長を有し、一方粁平均六粁九五に當り、主要路線上には乘合自動車の運轉を見て居る。

次に昭和八年末に於ける本縣內鐵道は、國有鐵道常磐・東北本線等五線、及地方鐵道九線を有しこの線路延長四九〇粁六、軌道二線延長二五粁八あり、交通の便大に開けて居る。

		停車場數	粁數
國有鐵道	常磐線	二七	一四三、七
	東北本線	一	七、三
	水戸線	一〇	五二、〇
	水郡南線	一八	七四、四
	眞岡線	一	七、六
	計	五七	二八五、〇
軌道	水濱電車		二二、一
	常南電氣		三、七
	計		二五、八

	停車場數	粁數
龍ヶ崎線	四	四、五
常總線	一六	五七、四
總線	六	一四、六
湊線	一一	四〇、一
筑波線	八	一六、九
鹿島參宮線	一二	二五、一
茨城鐵道線	二	一〇、三
水戸電氣鐵道線	一〇	三四、四
常北電氣鐵道線	二	二、三
筑波山綱索鐵道線	七一	二〇五、六
計		

昭和九年四月一日現在 **諸車** 狀況は自動車乘用一、〇三六臺、貨物六七二臺、荷積牛馬車二一、〇六一臺、荷積車五四、七七三臺、人力車六三二臺、自轉車自動二六〇臺、通常一五九、二一九臺、合計二三七、一九五臺に上る。又昭和八年末現在 **船舶** は、五噸以上のもの三七三艘、この噸數、八、四八三噸、五噸未滿の汽船及日本形五十石未滿の小船は一〇、五五六艘である。利根・渡良瀬・鬼怒・小貝・那珂・久慈等の諸川・いづれも舟楫の便多く、特に北浦・霞浦には發動機船高瀬船等往來して、縣南地方と千葉縣方面との連絡に便して居る。

産　業

生産總額　昭和八年の本縣總生産價額は一七五、五〇一、六二三圓で、全國の第二十四位を占め、内、**農産** は九四、五九七、三六一圓で總額の五割四分を占め、**工産** 之に亞ぎ五〇、五三二、三四八圓でその二割九分に當り、**鑛産** 之に亞ぎ、一四、一三九、三五七圓でその八分に當り、その他は下つて **水産** の六、二八一、五五二圓で四分、**林産** の五、五八九、五八四圓で三分、**畜産** は最も少く四、三六一、四二七圓で二分である。而して以上生産額を現住戸數人口に對比すれば、一戸當約九七三圓一人當約一一三圓である。

農産　本縣生産總額の約五割四分を占むる農産物中、第一位を占むるは **米** で、昭和八年收穫高水稲一、八六一、四一〇石、陸稲二〇四、一三九石で、價額合計四一、〇五九、五二五圓、農産總額の四割三分四厘を占め、之に亞ぐは **麥** で、一、五二七、五八一石、價額一五、九八三、九七〇圓、一割六分九厘である。この他重要なるものを擧げると次の通りである。

大豆	九四、八七三石	一、二三一、六五三圓	
甘藷	三三、四六一、四八六貫	二、三五〇、〇二九圓	
葉煙草	二、〇一七、〇五七貫	四、一六三、一三二圓	
繭	四、一三九、五三一貫	一九、三五八、六九二圓	
製茶	二二〇、八四三貫	五八四、五八一圓	

農事の改良については、**縣立農事試驗場** 之が中心となり種々奬勵誘導の施設と、一般農事思想の發達と相俟つて年々進歩の趨勢を示し、牛馬耕の應用・耕地の整理・肥料の改良・害虫の驅除等著々實行されて居る。農産物檢査は明治四十四年以來産米につき、大正三年以來麥を加へ之を實施し

大にその聲價を高め、産額の增加を見るに到つた、**農産物檢査所**は水戸に置き、縣内三十ヶ所に出張所を置いてある。又蠶業については縣は**蠶業取締所**及び**蠶業試驗場**を水戸に置き、民間、亦同業組合等を設け、相應じて斯業の進歩改良を圖り、近時著しくその産額を增加した。

畜産 縣の事業として種畜場を設けて奬勵の結果、逐年生産を向上し、昭和八年末には、**牛** 一九、七五五頭、**馬** 四六、九九二頭、**緬羊** 一一四頭、**山羊** 一、〇四九頭、**豚** 五二、四九三頭を算し、その品種も亦著しく改良せられた。就中馬は主に久慈・多賀・稻敷諸郡に産する。家禽では鷄の飼養が年々增加して居る。昭和八年に於ける畜産の生産總價額は四、三六一、四二一圓に上り、其の内主なるものは **家禽及鷄卵** の二、五五六、三三〇圓を最高とし **屠豚** の九二一、八八三圓之に次ぎ、**仔豚** の二八九、七六八圓、**牛乳** の二八四、六六七圓、**屠牛** の二一四、二〇三圓等の順になつて居る。

林産 縣の事業として苗圃を設けて種苗を配布し、模範林並模範竹林を設け、造林造炭等の指導をなし、其産額も年々增加して來て居る。昭和八年中の林産物價額は、一五、五八七、五八四圓に上り、内 **木炭** の一、七六〇、六〇六圓、**薪炭材** の一、二三〇、〇一五圓、**用材** の一、〇九八、四三四圓、**石材** の六四八、六五九圓等がその主なるものである。石材は晩近西茨城及眞壁地方から花崗岩の産出多く、殊に筑波鐵道の開通によつて眞壁地方の花崗岩は急に其産額を增すことゝなつた。尙久慈・多賀二郡からは大理石・斑石等を産する。

鑛産 縣の鑛業は殆んど多賀一郡に限られ、金・銀・銅は日立鑛山から、石炭は同郡の數炭坑から産される。其の他東茨城・那珂・久慈等の諸郡に少許の金・銅鑛あるに過ぎない。昭和八年の總産額は一四、一三九、三五七圓で、内 **銅** の五、九一三、五一四圓、**金** の五、二七五、六五三圓、**石炭** の一、三一八、〇三七圓**銀** の八六六、二八八圓等であつた。

水産 本縣は太平洋岸の延長百六十餘粁、霞浦・北浦・利根川等湖川の多い關係から、漁場の區域頗る廣く、從つて水産物も豐富である。昭和八年中の水産物價額は六、二八一、五五二圓で、内 **沿岸漁獲物** 二、五六二、八五九圓、**遠洋漁獲物** 一、一八四、三三八圓、**水産養殖** 三、〇一七圓、**水産製造物** 二、五〇二、三三八圓であつて、尙漁獲物中の主要なものには

イワシ	一、五六一、三八〇圓	マグロ	一九〇、五九一圓
サンマ	四七三、〇八九圓	カツヲ	一七七、一八六圓
タヒ	二八〇、四二〇圓	ワカサギ	一〇九、八七七圓

ウナギ	一〇四、四八五圓	カレイ、ヒラメ	三六、七八七圓
アワビ	七八、一七二圓	タコ	三四、一〇四圓
コヒ	六八、五九三圓	フカ	二一、八四五圓
エビ	六三、二五九圓	サバ	二〇、七六〇圓

等があり、水産物製造中の主なものには

イワシ粕	一、一一九、七五七圓	鹽藏サンマ	七〇、〇七四圓
煮乾イワシ	三四六、六五六圓	ツクダニ	五一、一六四圓
カツヲ節	一二八、八七一圓	ゴマメ	四八、〇四一圓
鹽乾イワシ	一一六、四六七圓	イワシ節	四〇、三〇五圓
鹽藏イワシ	一〇三、九六八圓	カマボコ	三七、三五五圓
ミリンボシ	九二、八六五圓	チクワ	

などがある。

工産 本縣昭和八年中の工産物價額は五〇、五三二、三四八圓で總産額の二割九分に當り、全國の凡三十五位にある。其の主なるものは **器械類** の一〇、一四二、七九六圓、**蠶糸類** の八、三七六、九七〇圓、**清酒** の四、五四六、七八三圓、**紙卷煙草** の四、〇八七、五一六圓、**製粉** の三、六九〇、一五四圓等で尙三百萬圓以下のものでは、**刻煙草** の二、六九二、四〇一圓、**醬油** の二、四八〇、四〇二圓、**木製品** の二、一五二、六七八圓、**菓子及麪麭類** の一、九四三、九六一圓、**織物** の一五六七、五三二圓、**履物類** の一、三五七、二九六圓、**セメント** の九二七、四七二圓、**蒲團蚊帳及被服品** の八二九、九七二圓等があり、ずつと下つては、**麪類** の五四四、四三六圓、**藁製品** の四三七、〇五五圓、**瓦** の二二二、六一九圓、**竹製品** の一八〇、四九五圓、**鑛製品** の一四五、一〇一圓、**蒟蒻** の一〇一、一〇八圓、**紙類** の九五、七七六圓、などがある。右の中特に織物については大正十一年以來、結城町に **縣立工業試驗場** を設けて斯道發達に資して居る。

商業 一般生産の發達に伴ひ、商業に於ても徐々進歩の狀況を呈し、水戸市及土浦・下館の兩町がそれ〴〵の地方の中心市場として取引が行ばれて居る。金融の重要機關たる **銀行** は一時四五行の多數に上つたのが、近年續々合同を行つて昭和八年には七行となり、而して資本は約五百萬圓を增加して合計二八、一一〇、〇〇〇圓となつた。其他 **産業組合** の數三九四、組合員九六、八六八人

出資總額四、七五〇、九一三圓、內拂込濟出資額三、七九三、三八一圓で、貸付・貯金・販賣・購買等各般に利用されて居る。水戸市にはこの他に **商工會議所** がある。

社會事業

本縣に於ける社會事業の趨勢は逐年勃興して來たのであるが、大正十五年方面委員制度を實施し縣下樞要なる市町村に委員八十名を設置して活動機關の充實を圖つてから急速に進展の運に向ひ、昭和七年一月救護法の實施と共に普ねく救護委員を設置して方面委員を兼ねしめ、更に各種社會事業等の連絡統一上、社會事業協會創立を必要とし、愈〻設立を見るに到つた。而して昭和九年度の縣市町村費中、社會事業費の總額は四七七、四〇一圓に上り、尙昭和八年度末現在に於ける各種事業施設の概要を擧ぐれば、**職業紹介所** 七、**公營住宅** 八三戸、**公益質屋** 一七、**共濟組合事業** 一三團體、**社會教化事業** 四三團體、**住宅組合** 四四組合三六一戸、**救護委員** 四六六人といふ成績を示して居る。

財政

昭和七年度決算による縣の財政は左の通りで、之を約十一年前の大正十年度決算、歳入六、〇二六、一八四圓、歳出五、二三三、五八〇圓に比すれば、歳入一〇、五七二、九二七圓、歳出九、八二七、九六二圓で、歳入七割五分歳出八割八分の增加を示して居る。而して歳入の主要部分を占むるは稅收入で、總額の五割七分に當り、歳出では土木費最も多くてその三割二分、之に亞ぐは教育費の二割七分、警察費の一割四分、產業費の一割三分等が主なるものである。

歳入（昭和七年度決算額）

地租附加稅	二、一八三、四八六圓	家屋稅	六三六、五二九圓
特別地稅	二一三、五九二圓	營業稅	一三五、三八六圓
營業收益稅附加稅	一七八、五七二圓	雜種稅	一、〇〇七、一八四圓
所得稅附加稅	一六五、八一九圓	都市計畫特別稅	五、四五〇圓
鑛業稅附加稅	五、二一五圓	財產收入	二三、〇六四圓

使用料及手數料	五五六、四四九圓
國庫下渡金	一七九、四四三圓
國庫交付金	一六、九四〇圓
雜收入	八五一、三〇九圓

歳出（昭和七年度決算額）

神社費	三、七六七圓
教育費	一、八三四、二六一圓
史蹟名勝天然記念物保存費	三三八圓
社會事業費	一二、〇三一圓
警察費	一、〇二三、四二〇圓
衛生及病院費	八六、七五九圓
土木費	五〇三、六二〇圓
都市計畫費	九、八九二圓
產業費	七六三、九一九圓
統計費	五、七七二圓
計	六、一六〇、四三八圓
臨時部計	四、四一二、四八九圓
總計	一〇、五七二、九二七圓
地方改良費	五一三圓
公園費	六、七一三圓
選擧費	二、九三四圓
會議費	三八、二四二圓
縣廳費	三九三、五一〇圓
財產費	三、三六三圓
縣費取扱費	一五七、三四〇圓
計	四、八四六、四〇四圓
臨時部計	四、九八一、五五八圓
總計	九、八二七、九六二圓

水戸市

概說

沿革 水戸の地は上古那珂郡吉田・常石兩郷に屬し、大掾氏の占據した頃から **水戸** の稱に改つた。城の側に民家が集後應永年間江戸氏が大掾氏を追うて此處に居城した頃から中してやゝ宿驛の體裁をなすやうになつたのは、江戸氏以後のことで、其れが天正の末佐竹氏が江戸氏を滅して此地に引移つて後、五十四萬石の治所として、文祿年間城の規模を擴張すると共に城下街を營み、城の西方一帶の臺地が市街の形をなすに至つた。然るに佐竹氏は間もなく封を秋田に移され、後幾變遷があつて慶長十四年德川家康の第十一子賴房が此地に封ぜられて、水戸の地位全く定まり、所謂副將軍二十五萬石（後三十五萬石に加增）の城下として經營せられ、寛永二年以來工を起し、城の東方低窪の地を埋めて新に街衢を開き、且笠原の涌泉を疏して上水道を通じ、寛文三年完成した。それは第二代光圀の時であつた。現在の水戸市の規模は當時に比して大なる相違が

ないのである。水戸歴代の藩主中、前に義公光圀あり後に烈公齊昭あり、或は修史に或は國防に率先國體の大義を明かにし、所謂水戸學は天下を動かし、國論の歸趨を定めて維新の大業を翼賛した事は、餘りに著名な事で、當時の水戸は正しく天下の水戸であつた。明治維新後藩を廢して水戸縣を置かれ、明治四年茨城縣と改まり、爾來水戸は茨城郡及東茨城郡に屬したが、明治二十二年市制施行に際し、上市・下市の外接續地常磐・細谷・吉田・濱田四村の一部を併せて水戸市を置き、其後引續き諸官衙學校の設置、鐵道の開通、兵營の新設其他一般文化の發展に伴ひ市勢漸次向上し、昭和八年常磐村を併合して今日に及んで居る。

地勢・戸口　北は那珂川を以て那珂郡に境し、他三面は東茨城郡に包まれ、舊下市・細谷・濱田は東の低地にあり、舊上市・常磐は西の高地を占め、吉田は南の臺地に延びて居る。東西七、五二〇米、南北二、六八〇米、總面積一三平方粁三九八、周圍二六、五〇〇米で、東京日本橋元標へ一一七粁一一六ある。昭和八年十月一日現在戸數一二、九五〇、人口男三二、六六三　女三二、一〇八　計六四、七七一であつた。

教育　尋常小學校四校、尋常高等小學校二校、他に男女兩師範附屬小學校がある。實業補習學校五

青年訓練所五、幼稚園公立四、私立三あり。市内及附近にある公立學校は水戸高等學校・師範學校・女子師範學校・水戸中學校・縣立水戸高等女學校・同第二高等女學校・水戸市立高等女學校・水戸商業學校・水戸農學校・工業學校・盲學校及聾唖學校等で、私立學校には茨城中學校・大成女學校・常磐女學校・森田女學校・茨城商業女學校・茨城弘道學院（夜間中學）、其他産婆看護婦學校二等があり、各種の學校を網羅して居る。

交通　水戸驛は常磐線の大停車場で、且最近全通した水郡線の起點でもあるから、常に乘降客と貨物で雜閙を極めて居る。驛前には定期乘合自動車の發著あり、湊平磯方面・磯濱鉾田方面・石岡方面・笠間岩瀬方面・石塚野口方面・大宮方面・太田方面・久慈濱助川方面等と聯絡し、又市内乘合は東は細谷地先の壽橋畔から、西は步兵第二聯隊營舍の前まで、舊上下兩市を縱貫して頻繁に往來し、水濱電車は西袴塚から上下市目貫の街を通つて東海岸の磯濱及湊町との間を聯ね、水戸電鐵は柵町から臭の谷まで、茨城鐵道は上水戸驛から御前山までを聯ね、四通八達の利便を與へて居る。

産業　工業不振の地といはれて居るだけに、大煙突などは殆んど見られぬ。唯專賣局の煙草工場、

日清製粉の製粉工場を最大のものとして、之に續くものには製菓會社の工場や、製材會社の工場などがあるに過ぎない。水戸土産の茨城納豆・梅羊羹・水戸の梅・吉原殿中、さては水戸金彫や和雲塗、各種梅細工・大理石器具・偕樂燒など色々あるが、烈公や東湖筆の摺物に水戸の精神を味はゞ更に妙であらう。

案内順序　水戸の市街は東西に細長く、而して停車場の位置が略ほ其中央にあるので、先づ停車場直前の舊水戸城内を一巡の後、東に進んで舊下市並に附近の名所に及び、更に柵町通を西方舊上市へ引返して偕樂園に進み、やがて谷中袴塚方面に出で、馬口勞町・金町・田見小路を經て案内を終る。而して東茨城郡中水戸に接した部分は便宜此處で述べる。

水戸城址及其附近

水戸驛　明治二十二年水戸鐵道線開通以來、水戸市の玄關口となり、同三十一年常磐線の全通、翌三十二年太田線の開通等に依つて旅客や貨物の輻湊を見た結果、附近柵町一帶の地は商家旅館軒を並べ、人車の往來織るが如き殷賑の巷と化し、全然面目を一新した。柵町の名は舊水戸城柵門の外にあつた所から附けられた者で、舊幕時代には水藩重臣の邸宅が此町に設けられてあつた。義公が寛永五年六月十日誕生になつた三木氏の邸や、幼年時代に住はれた中御殿並に胞衣塚など皆此附近にあつたのであるが今は殆んど尋ぬるに由もない。十數年前までは驛の前面に峙つ崖の裾を廻つて濠には尙昔乍らに漫々と水を湛へ、天守閣や森の影を倒さに浮べ、岸の柳の風に靡く樣も見られたが、濠は悉く埋立られて人家櫛比の熱鬧地と化して了つた。

新國道　本縣を南北に貫く陸前濱街道は、水戸市の上下兩市を縱貫し、それが水戸驛以東の部分に於て、屈曲と踏切りが多く、交通上支障が甚しいので、昭和六年以來國費を以て路線改修の工事を起し、舊城二の丸と三の丸との間の空濠を取擴げ、那珂川へは新に水府橋を架け、其處から那珂郡川田村枝川に向つて一直線に新道を開き、水郡南線の上に跨線橋を架け、水戸驛前から枝川迄約二粁餘の自動車交通上最も安全な新國道が出來上つた。但これに依つて舊二の丸の規模は、其の西側の部分に於て著しく破壞せられ、城郭の面影を留めざるに到つたのは遺憾である。

水戸市職業紹介所　驛前の柵町通附近には市の社會的施設が幾つか見られる。**簡易食堂・市營葬儀取扱所・職業紹介所**　等がそれで、就中この紹介所は大正十年の開設、廳舍は同十一年の建築で、階下を事務室に、階上を無料宿泊所に當てゝ居る。昭和九年中の取扱成績は求人數三、六五

○、求職數二、七二九、就職數一、一一九で、宿泊數は男一、〇一六人、女八九人であつた。なは同年中簡易食堂の入堂人員は五六、二八三人で、前年に比し八、一八九人の増加、葬儀取扱件數は二三三件で前年に比し七一件の増加を示して居る。

水戸市役所　驛前の柵町通を西に進むと間も無く市役所の前に出る。現廳舍は大正七年の建築で工費三萬六千圓をを投じて成つたもので、其後常設消防部や水道課等の建物が增築された。此邊は舊水戸城三の丸の南門たりし銀杏見付の址で、現に門前の廣場に殘る數本の銀杏樹は、貴重な昔の遺物で古くは門前から南へ通つた路を銀杏坂と稱したのである。現在停車場前から斜に郵便局側に通ずる坂路を銀杏坂と呼ばれるが、これは鐵道開通後に新設せられた道である。尙市役所と通路を隔てた小山田邸の黑門は、元大手橋内にあつたのを拂下げて現地に移したものといはれ、市役所の横の通路を北に進むと三の丸小學校の正門に突當る。左に折れ堀に沿うて行くと老木に蔽はれた小高い堤上に近年迄

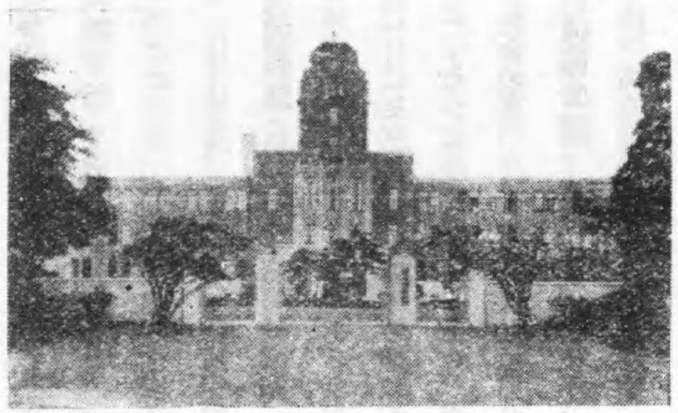
鐘樓　があつて大鐘が懸つて居たが、此鐘は義公時代の鑄造にかゝり、朱舜水の銘を刻した名鐘で、今は縣社東照宮に納まつて居る。この土堤は舊三の丸南町見付枡形の遺址で、愛國婦人會茨城縣支部・信用組合聯合會・水戸商工會議所・水戸警察署等の建築物のある一郭を、曲尺手に圍んで僅に古の面影を留めて居る。これから北に續くのが舊三の丸の堺を劃する土手と濠である。

茨城會館　工費二十四萬圓を投じ、昭和十年四月完成した鐵筋混凝土造最新式公會堂である。階上廣間には講演、照明、映畫、演藝その他の設備よく整ひ、各種の會合に盛に利用されて居る。尙階下には貴賓室、縣教育會事務所、同圖書室、會議室公衆食堂等が設けられて居る。

茨城縣廳　昭和四年工費百二十萬圓を投じて新に建築されたもので、鐵骨鐵筋混凝土造總建坪約三千坪、市内有數の大建築である。同年秋特別大演習に際し、大本營並に　行在所に定められ、前後八日に亙り　聖上陛下の御駐輦を忝うした光榮を有する。廳舍の北に接して縣農會會館、日本赤十字水戸支部等の建物があり、更に通路を隔てゝ北にある混凝土塀の一郭は水戸刑務所である。縣廳舍の裏門を東に出れば弘道館公園に入る。

弘道館公園　舊弘道館の構内で、老梅幾百本となく園内に滿ち、花時最も美觀を呈する。天保の當時一萬餘株を植えたものが明治元年の兵燹其他で今は大半を失つた。

鹿島神社　は園の南方にあり、今縣社である、天保九年藩主烈公の創建に係り公親ら長二尺餘の太



茨城縣廳

刀を鍛へて奉納し、且つ其鞘に題して、

大神の猛くさかしき心もて
蝦夷が千島も切り開かなん

と書れた。該社創立の由緒は弘道館記にある。

孔子廟 孔子の木主を安置し、建築は支那の大成殿を模し、四面墻壁を設け、正面に戟門を建つ、此廟を建てた由緒も弘道館記にある。當時春秋二季に釋奠の禮を行つたと聞くが、一時は全く廢れたのを近年縣教育會の手によつて毎年擧行のことになつた。

八卦堂 銅瓦葺の八角堂で、弘道館記碑を其中に藏す、周圍約一九・四米、高約八・一八米、壁板の外面に各其方位に相當せる八卦を刻するので八卦堂と名づく。

弘道館記碑 八卦堂の中にある。石は領内久慈郡眞弓山より採掘したもので、高約四・五五米、幅約一・九一米、厚さ約五五糎、臺石之に適ひ、全部大理石(寒水石ともいふ)を以て造る、記は烈公の撰並に書であるが、原稿は之を藩の學者に諮り、忌憚なき批評添削の結果に成つた萬世不朽の名文とである。明治廿三年十月廿八日、昭憲皇太后水戸行啓の折、これを御覽ぜられ、此一篇が志氣振興の原動となつて天下を風靡し、維新の大業を成なすに至つたことを、深く御感歎遊ばされたといふことである。

種梅碑 鹿島神社の西、八卦堂の南にある。此園に梅樹を植立てた時の記念碑で、烈公の撰文を刻してある。

要石 鹿島神社の東北、孔子廟の南にある。高二米程の平石に烈公の左の歌を刻してある。

行末もふみなたかへそあきつ島大和の道そ要なりける

學生警鐘 孔子廟と相對し、小舍を築いて鐘を懸く、館の生徒に東天紅を報し、且つ非常警報に用ひたもので、鐘は徑三九・四糎、裏面には烈公親書の

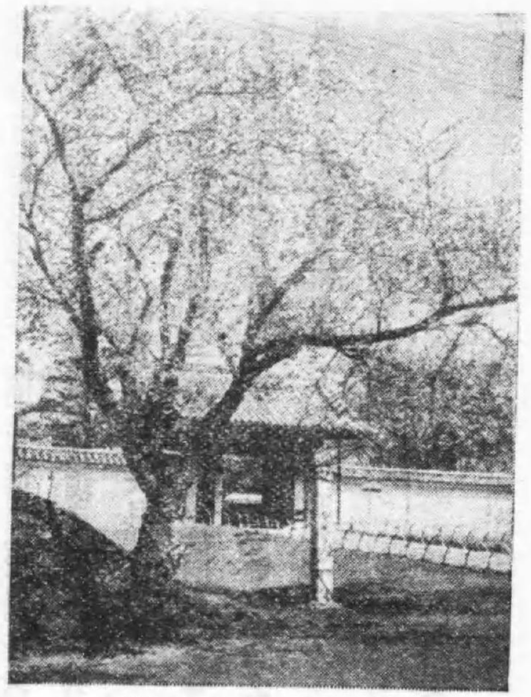
物まなぶ人の爲にとさやかにも曉つくる鐘の聲かな

の和歌を刻してある。

南殿の櫻 弘道館正面の左側にあつた櫻は、紫宸殿左近の櫻の分身である。こは烈公夫人貞芳院（有栖川宮韶仁親王御妹登美宮吉子女王）が水戸降嫁の際、天子より戴いて齎らし、小石川後樂園に栽ゑられたのを、弘道館建つに及んで此に移植されたもので、年を經て枯死し、其傍の若木はその苗孽の成長したものである。又櫻と相對する松は烈公の手植である。

弘道館 公園の中にあるが、館として今存するものは、其一部に過ぎないので、他は皆明治元年の兵燹に罹つて烏有に歸した。弘道館は藩主烈公が、文武の教育を藩臣に普及徹底せしむる爲に、設けたもので、其主義は水戸學の實現にあるはいふ迄もない。弘道館のことを詳しく研究するには名越時孝著『弘道館』がある。館は天保九年の創設で、今の玄關の左を正廳とし、其右には大番直所、物頭番頭直所があり、全敷地方四町、東は府城に接し、構造は素朴堅牢を主とし、正廳の北に文館を、南に武館を置き、あらゆる學科と實習とを修め、毎歳文武の優劣を試驗し、一藩の士氣爲に大に振ひ、列藩其風に倣つたが、今は燒失して本館一棟と正門とを殘すのみ、正門の門扉には今猶兵火當時の彈痕を留めて居る。構内の大部分は現今弘道館公園となり、一方に三の丸尋常高等小學校を建

設してある。弘道館記を左に、



弘道館

弘道館記

弘道者何。人能弘道也。道者何。天地之大經。而生民不可須臾離者也。弘道之館。何爲而設也。恭惟。上古神聖立極垂統。天地位焉。萬物育焉。其所以照臨六合統御宇内者。未嘗不由斯道也。實祚以之無窮。國體以之尊嚴。蒼生以之安寧。蠻夷戒狄以之率服。而聖子神孫尚不肯自足。獎取於人以爲善。乃若西土唐虞三代之治教。資以贊皇猷。於是斯道愈大愈明。而無復尚焉。中世以降。異端邪說。誣民惑世。俗儒曲學。舍此從彼。皇化陵夷。禍亂相踵。大道之不明於世也蓋亦久矣。我東照宮撥亂反正。尊王攘夷。允武允文。以開太平之基。吾祖

威公實受封於東土。夙慕日本武尊之爲人。尊神道繕武備。義公繼述。嘗發感於夷齊。更崇儒教。明倫正名。以藩屏於國家。爾來百數十年。世承遺緒。沐浴恩澤。以至今日。則苟爲臣子者。豈可弗思所以推弘斯道發揚先德乎。此則館之所以爲設也。抑夫祀建御雷神者何。以其亮天功於草味。留威靈於玆土。欲原其始報其本。使民知斯道之所繇來也。其營孔子廟者何。以唐虞三代之道折衷於此。欲欽其德資其敎。使人知斯道之所以益大且明不偶然也。嗚呼我國中士民。夙夜匪懈出入斯館。奉神州之道。資西土之敎。忠孝无二文武不岐。學問事業不殊其効。敬神崇儒。無有偏黨。集衆思宣群力。以報國家無窮之恩。則豈徒祖宗之志弗墜。神皇在天之靈亦將降鑑焉。設斯館以統其治敎者誰。權中納言從三位源朝臣齊昭也。

天保九年歲次戊戌春三月

齊昭撰文並書及篆額

弘道館の正門を出ると、空濠に迫手橋が架してある。橋を渡ると舊水戸城の二の丸であるが、玆で少し水戸城のことを概括して置きたい。

水戸城址 水戸市の中央にあつて、始め馬場城と稱し東西に長く、南北に短い、老松古杉鬱然天を摩し、北には那珂川を帶び、南に仙湖を控え、地盤は岡阜に屬し、東端深隍を隔て、下市を俯瞰し西は數條の空濠を以て支へ、實に天然の上に人工を加へた金城湯池であつた。郭内を三分して本丸東二の丸、西二の丸といふ、後には三の丸も出來た。

本丸 は中央で、東西約三三〇米、南北約一一五米、今縣立水戸中學校のある所で、普通「本城」と呼ばれる。中古大掾氏の築く所と傳へ、江戸氏時代以前は此郭のみであつたらしい。

東二の丸 本丸の東にあつて、地勢本丸より約一五米低い、東西約二一五米、南北約一一五米、今中學校の運動場になつて居る。これは淨光寺郭ともいひ、文祿中佐竹氏が增築したものと傳ふ、水戸城の最東端である。淨光寺の名は江戸氏時代より此に一向宗の淨光寺があつたのを他に移して城を築いたに依るといふ。

二の丸 本丸の西にあり、東西約三四五米、南北約二九〇米、明應年中江戸氏之を築き、宿城と呼び、又天王郭とも稱したが、文祿に至り佐竹氏之を修築して中城と稱した、其後德川氏の領に移つ天守閣並に藩主の邸宅を此に營んだのであつたが、維新となり、明治四年火あり、天守閣のみを殘して層屋樓櫓凡て烏有に歸し、今は郭内に師範學校、縣立圖書館、教育參考館、武德殿などが建設

されてある。

三の丸 は外郭ともいふべきもので、西二の丸の西空濠を隔てゝあるのがそれである。これは比較的新らしく出來た方で、東西約三六四米、南北約二三七米、濠の大臣巨族の邸宅は多くこの郭内にあつた。今弘道館、三の丸小學校、市役所、茨城會館、縣廳及刑務所などのある所が此郭である。

外濠 は今田見小路の西端に其跡を留めて居る地の起點から、南は幸町の空濠跡に達する一線と、今一つは更に西に進み、八幡町八幡宮裏手から、水戸の高臺を南北に開鑿して神崎に至る一線とである。これ等は最も新らしく德川時代の開鑿であるが、今は大部分埋められて市街となつた。

按ずるに、水戸城は江戸氏時代迄は、東方に重きを置き、佐竹氏も最初は之に倣ひ淨光寺門を正門として本城を固めたが、それでは規模の小さいのと、西方の弱點とに鑑み、西二の丸に中城を置き正門（追手）をその西に新設し、德川氏になつて更に規模を擴張し、二大塹濠を西方に開鑿して一大城郭を形成したものである。

水戸城沿革 往時大掾氏の族馬場資幹此地の地頭であつたが、その館を馬場館と稱した。資幹は後將軍頼朝の命により、建久四年大掾の本宗を繼いでから壯年の間府中（今の石岡）に出て國務を執り、職を讓つて後馬場に老を送る例となつた。九世の裔滿幹に至り、馬場館を修築して堅固な城としたが、應永の亂に鎌倉公方に反抗しだ爲、其所を奪はれ、やがて、其三十三年河和田城主江戸通房の爲に、襲はれて城陷り、石岡城に蹙まつた。以後江戸氏代々此に居り、天正十八年通房の八世の孫重通に至つて佐竹義宣の爲に亡され、義宣本城に移つたが、關ヶ原の役敗を西軍に通したので、慶長七年五月出羽秋田に移され、武田信吉此に封ぜられたが、翌八年病死したので、德川頼宣封ぜられ、更に同十四年家康の十一子頼房を此に封して、二十五萬石（後三十五萬石）を與へ、累世居城したるも、明治維新となり、版籍を奉還するに至つた。水戸德川家の累代は頼房（威公）光圀（義公）綱條（肅公）宗堯（成公）宗翰（良公）治保（文公）治紀（武公）齊修（哀公）齊昭（烈公）慶篤（順公）昭武（節公）篤敬（定公）圀順（現代）である。

明治天皇行在所記念碑 追手橋を渡ると、其突當りの所に槍の穗尖型の銅碑が建つて居る。これは明治二十三年十月　明治天皇茨城縣師範學校を行在所として機動演習を臨はせ給うたのを永久に記念せんが爲め、大正十年に建てたものである。

師範學校 初め上市鐵砲町北端にあつたのを、明治二十年水戸城二の丸へ新築して移つたので、校

内に　明治天皇行在所に當てさせられた室あり、最近　明治天皇御聖蹟として指定せられた。

縣立圖書館　師範學校の北、老樹林の間にあり、昔し彰考館のあつた所で、其裏手は眺望に富む。圖書三萬餘部、創立は明治三十六年二月、明治四十年巡回文庫制を設け、大正十年より海岸夏季文庫を開設などして利用し居る。

春殘史館中、一夜惡狂風、花於筆頭在、何求造化功（常山）

教育參考館・武德殿　教育參考館は圖書館に隣接してある。大正四年十一月御即位の大禮を記念せん爲め、教育的に建築した小博物館で、大正六年十一月十日大禮御擧行の記念日に開館式を擧げた。圖書館の東にある武德殿は昭和四年の建築である。

中學校及銅像　師範學校北側の道路を東に進むと、縣立水戸中學校の正門に入る。其處は水戸城の舊本丸で、四方を見おろし形勝の地である。西南角の高地にある銅像は、此校出身者で、本邦に於ける飛行機最初（京阪飛行墜落慘死）の犧牲者たる武石浩波である、中學校を東に拔けると、一段低い地がある、これ舊水戸城の東二の丸の一部で、今中學校の運動場になつて居る、其東に佐竹氏の築いた追手の門があつたものだ、此附近は近年堀崩されて地勢著しく變つて了つた。

明星池址　城の高地を東に下つた處に明星池があつたが、今は市街發展の爲に全く埋められた。往年江戸通房水戸城を襲ふ時、明星の示現あつて勝利を得たといひ、屢々此邊に來て太白星を拜し、爲に明星池と名づくと。今明星町と呼ばれる所がそれである。

赤十字病院・那珂川　明星町から北、舊城に接續して建つて居るのが赤十字病院で、附近に市の隔離病舍もある、更に北して那珂川に沿ひ西に向ふと、千波湖干拓に依つて生ずる、灌漑水用の減するを補ふ爲め、那珂川から水を引く揚水機がある。又河岸には那珂川驛があり貨物揚卸に便利であるから、此邊材木の集散及び製材業も盛んである。

水府流水泳場　は此處にあり、急流を遡り、又は横切ることゝ、急進行とに於て古來天下無雙と稱せられ、其横身になりて、體を伸縮しつゝ水を蹴り行くさま實に快速を極むるもので、此流儀今も衰へず年々夏季に稽古場を開き組織的に教授して居る。

舊下市及其附近

水戸地方專賣局　一の町から二の町に跨る大建築で、地域約一萬坪工費總額四十萬圓を要し、大正二年に創立された所で、工場の設備よく整ひ、現在職工男女八百五十餘名、製造高年額約一千萬

圓に上り、煙草工場として全國有數の地位を占めて居る。

茨城縣立農事試驗場　市外上大野村細谷地内にある。縣立試驗場は去明治三十三年市外酒門村に創立せられ、主要農作物の研究を行ひ、縣農業界に貢献する所多かつたが、時代の進運に伴ひ擴張の必要に迫られ、昭和四年現地に約二萬圓を投じて鐵筋混凝土最新式廳舍を新築移轉した。現在施行中の主なる事業は、各種農作物の品種改良、栽培法の研究、縣奬勵品種の配布、肥料、土壌、病虫害の研究、實地指導、並に練習生の養成等である。尙現地の外本試驗場に附屬して、石岡郊外に陸稻試驗地並に原種圃、石下町に水稻の原種圃がある。此附近に

神勢館址　がある。これは舊藩時代藩主烈公の經營せられた砲術神發流の傳習稽古をなした所で、館は元治の變に兵火に罹り、今は僅に俗稱五丁矢場として知らるゝ射的場を殘すのみである。

備前堀　舊下市の南側を縫ひ、舊磯濱街道に沿うて流るゝ用水堀を備前堀又は伊奈堀といふ。これは水戸德川氏入國の初め、伊奈備前守忠次の設計で千波湖から涸沼川迄二里餘の間を開鑿し、沿道水田灌漑の用水路としたもので、其最も湖岸に近い橋を義公の時以來消魂(たまげ)橋と呼ばれ、江戸街道の起点であつた。此附近には錢屋稻荷・首無辯天・瓦谷不動・竈神社などの名所がある。

酒門原共同墓地　備前堀を渡つて田圃路を一直線に南に拔けて酒門の臺地に上ると、水戸藩士の墓地がある。此處には望月恒隆・戸田忠敞・小宮山楓軒・安島帶刀・佐野竹之介・吉田令世等諸名士の墓がある。尙本村には元祿十三年義公の創建せられた常照寺(禪宗)があり、尙附近には安藥寺(眞宗)蓮乘寺(日蓮宗)・善重寺(眞宗)などがある。

善重寺　太子堂安置の國寶聖德太子立像があるので名高い。

吉田神社　千波湖址の南岸、崖上高く茂る森嚴な社に鎭座し、日本武尊を祀る。社は延喜式内二十八社の一で、今は縣社に列し、社殿の構造は宏壯、境内の眺望は絕佳である。

藥王院　桓武天皇の勅願によつて草創せられた寺院で、比叡山靑蓮院の末である。舊時は六坊・八寺末十二門徒寺あり、頗る隆盛であつたが、現時はそれ程の舊觀を存しない。

縣立工業學校　吉田神社の西方にあり。明治四十二年の創立で、應用化學科並に機械科を設置する。

吉田古墳　十數年前發掘せられた珍らしい古墳で。工業學校の南方約四〇〇米にある。窟の壁に異畫を刻し、本邦稀有のもので大正十一年史蹟に指定された。

浴德泉　綠岡村大字笠原新田にある。所謂笠原水道の水源地で、昔寛文年中義公其清泉を水戸市下市に引き、市民の飲料水に當てた。文化年中源文公碑を建てゝ浴德泉といふ。後永く下市水道の源泉として全市水道の完成通水迄は、下市一帶は尙其德に浴した譯で、其間殆んど三百年に及ぶ。附近に不動堂や水戸明神の祠などあり、義公が嘗て曲水の宴を催ほされた遺跡も殘り、風光幽邃閑雅にして都人一日の淸遊には好適の地である。

千波湖　吉田・綠岡兩村の臺地と、水戸臺地との間に、細長く東西に連る一帶の低地は、舊千波湖の址で、今は其三分の二は干拓されて水田や埋立地となつたが、舊藩時代にあつては一面滿々と水を湛え、水戸城南側の要害をなして居つた。當時は城の側は一般人の通行を許さず、上市の奈良屋町から下市の轟町へ、湖心を横ぎつて一條の堤を築き、其上に柳を植ゑて柳堤と稱し、此一路を通して上下兩市の聯絡に便じた。堤の北側を內堀と稱したが、今は水戸驛構內や埋立地となり、柳堤は其緣邊に幽かに名殘を留めて居る。百三十町歩に餘る千波湖面は、明治以後は主として江下一千町歩水田の用水源に充てられて居たのであるが、荒れるが儘に放置せられた結果、淤泥堆積し雜草繁茂して水源の用をなさなくなり、江下の田は屢々旱魃の害を被つたので、湖面改良の議が起り、上流約四十一町歩を浚渫して千波湖を復活し、他は干拓して水田とし、江下一千町歩の用水は、別に揚水機を設置して那珂川の水を灌ぐことゝなり、大正十一年以來工を起し、新に堤を縱橫に築いて新湖の周圍並に用惡水路を區劃し、昭和四年に至つて略完成した。堤上なる櫻や楓の若木は、水戸市の青年團員が御大禮記念の事業として、有志の寄附を仰いで苗木千數百本を購ひ、縣係官指導の下に部署を定めて植附の勞に當つたものである。

近寺鐘鳴報夕陽、柳邊停棹惜春光、白櫻點破松林碧、晴雪飄香落野航（安積覺）

舊上市及其附近

縣社東照宮　舊下市から櫛町通を西に引返して、西に銀杏坂を登る途上、左手に石段と華表が見える。これが縣社東照宮で、其創建は元和七年の春、家康を祀る爲め藩主德川頼房の勸請に係る。當年の遷座式を行ふや、天皇の奉幣使大納言三條公廣。宣命使參議西園寺實晴、大僧正天海等之に臨み祭儀莊嚴を極めたといふ。社殿の構造は日光東照宮を模し、金碧燦爛たるもので、現に縣社に列し、國寶になつて居る。社寶則包の刀一口も後陽成天皇から豐臣秀吉に賜へるもので、明治四十四年亦國寶に指定された。正面（南方）の石階を降つて右に向へば奈良屋町となる。此邊には

瓦斯會社、製氷會社などがあり、宇梅香に上れば栗里八景(舊彰考館總裁安藤氏の邸)や、碧於亭(安積澹泊の邸)の址などがある。黒羽根町へ廻れば、

常磐病院・電話交換分局 がある。此病院は規模大きく、外觀もよい。此町には『先春梅』の名木もあつたが、今は枯死した。北に進んで本町通り南町へ出て、右へ曲り東に少し進むと、

郵便局・常總新聞社 なども此先きにあるが、引返して西へ進むと、

常磐銀行・いばらき新聞社 と相並んで新建築が町の美觀を添へて居る。此新聞は販路も廣く日々數萬枚を刷り出すと。更に西へ進めば、

五十銀行・川崎銀行 など目立つ建築や、美都里館、偕樂館などの活動劇場がある。向井町廣小路から左(南)に折れると、

神應寺 がある。神應寺は藤澤山と號す。藤澤遊行上人第十一世普光上人の開基で、もと藤澤小路にあつたのを延寶八年義公此地に移す。背後の墓地には和田平介、山國兵部などの墓がある。平介は居合新田宮流の開祖で、義公に仕へ三百石を食んだが、罪あつて天和三年自刄し、此に葬らる。兵部は喜八郎と稱し、水藩の勤王家で軍學に精しかつた人、後正四位を贈らる。藤澤山の左側、

別雷皇太神 は元普光上人が鎌倉より來つて神應寺を創立する時、曾て雷神の感應により、傍に一社を建て雷神を祀つたものである。其後參詣人頗る多く、緣日の雜閙は界隈無比であつたが、今は昔日程でない。社前を一眞線に南へ進むと左側に、

神崎寺 がある。笠原山淨名院と號し、眞言宗の名刹で、仁和寺の直末である。天和年中の創立に係り、本尊は十二面觀音で、眺望形勝の地にあり、此附近千波湖岸から、神崎岩を産す。明和年間から伐り出したもので、脆質ながら火には軟くも水には强く、多く井筒に用ゐらる。五本松の松亭亭は其東方阜上にある。湖畔の大路を西に進めば、大華表を見るべく、これ、

別格官幣社常磐神社 一の鳥居である。廣い石階を昇れば、神社の正面となる。明治五年の創建で、藩主義公竝に烈公の靈を合祀し、毎歳五月十二日祭典を行ふ。社寶の陣太鼓は直徑四尺七寸五分、胴周一丈五尺五寸、長さ六尺二寸、こは烈公が武を演じた時用ゐたもので、公自筆の銘に『震天動地、起雲發風、三軍踊躍、進思盡忠』と彫りつけてある。社側に、烈公の鑄造せられた大砲『太極』及其砲丸を置き、社後の寶庫には種々の寶物が多い。

鎭靈社 社側西側にあり、嘉永安政以來縣下の士民で國家の爲に戰歿忠死したものゝ靈を祀るも

ので明治十二年の創建である。

彰考館文庫　常磐神社の東隣にあり、大日本史編纂の史料を保管し置く所で、明暦三年義公始めて史局を江戸藩邸に置き、之より明治卅九年十二月迄二百五十年を經て、之を完成し、全部三百九十七卷を各一部水戸家から

天皇皇后兩陛下に献じた所、翌四十年　天皇陛下から金一萬圓　皇后陛下から金三千圓を史館藏書永世保存の補助として、御下賜あり、水戸家では聖旨に感佩し本文庫を建設して

聖慮の忝きに副ひ奉らんことを期したものである。藏書七萬餘冊、大日本史原稿、獨逸兵書の寫本等重要のものが多い。

偕樂園　市の西南端に位し、面積三萬五千坪、天保十一年藩主烈公此地を遊息所と定められ、同十二年五月中旬工事に著手し、翌十三年七月に至り好文亭、樂壽樓及偕樂園まで經營全く成つた。地には梅數千株、芝生には萩、躑躅を植ゑ、園中に一大碑を建てゝ設苑の理由を明にしてある。千波湖に枕み、筑波を眺むべく、老松崖に這ひ、古梅水を背め、珍石奇木亦備はざるはなかつた。廢藩後も水戸家の所有であつたが、之れを官に納めて明治六年に公園となり、後ち水戸市の共有地となつ

偕樂園好文亭

たが、今は縣に移管した。

仙閣超然對筑峯、飛樓懸棟出喬松、山光縹渺連天淡、水色琉璃接地濃　（佐々木重之）

八景碑　東南の崖腹にあり、**偃湖暮雪**　の四大字（烈公筆）を刻す、水戸領内八勝の一である。

吐玉泉　西方の崖路を進むこと二〇〇米許りで、崖下に大理石の井筒あり、清水玉の如く其中から溢れて居る。

御手植松　今上陛下曾て好文亭にお成りの際御手植遊ばされたもので、亭の南内苑にある。

御幸の松　明治二十三年十月　明治天皇、昭憲皇太后と共に水戸行幸遊ばされたので、光榮を記念せん爲め市で植ゑたもの梅園と芝生の境にある。

因に偕樂園は舊弘道館と共に史蹟名勝として國の指定を受け

てゐる。

櫻山　白雲岡ともいふ。園の西方谿を隔てゝ見ゆる美しい丘陵で、櫻樹多く、丘下を小川流れて公園に接續し、公園からの眺望は園美觀の中心ともいふべき所である。東西約一五〇米、南北約三〇〇米。

觀梅客　梅花季節に觀梅客は年々增加し來り、東京方面からは別仕立の觀梅列車で來水するもの殊に多く、其都度鐵道省では公園下に假ホームを設けて便宜を與へて居る。此觀梅デーの賑かさは比年隆盛を極める。

會澤伯民墓　綠岡村大字千波本法寺にある。名は安、正志と號す。天明二年五月生る、天保二年彰考館總裁、十一年弘道館總敎となる。攘夷論者にて『新論』の著あり、我國體を說くこと之れに過ぎたるはない。文久三年七月歿す、後正四位を追贈せらる。

武田耕齋の墓　同村大字見川妙雲寺にある。伊賀守正生と稱す。所謂天狗黨の總帥で筑波の義徒等と敦賀に刑せられる、正四位を追贈された、兩所とも公園から餘り遠くない。

縣立水戸農學校　は公園の北にあつて、明治三十三年の創立農業科養蠶科を設けてある。其前を

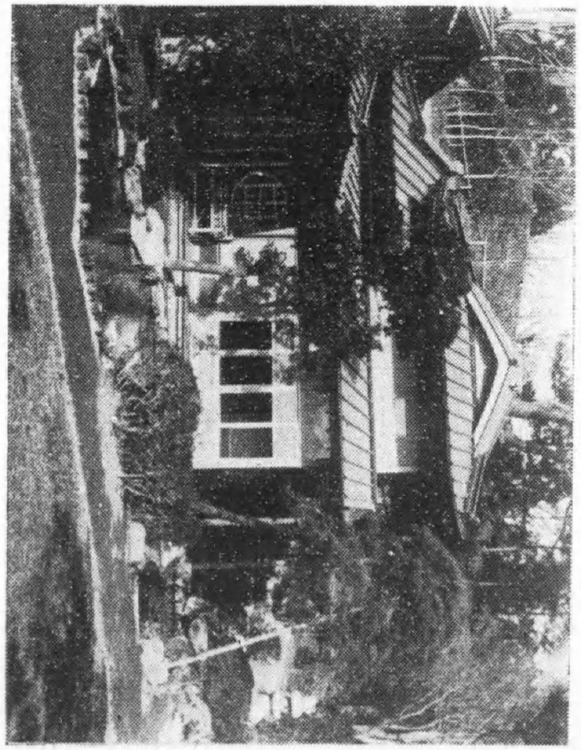
水戸

鐵道省指定旅館

旅館割烹　偕樂溫泉

清香亭

電話一一七二〇番



風光明媚　常磐神社前

冬暖夏涼　偕樂園南崖千波湖畔

（泉　溫　樂　偕）

土木建築請負

組長　藤川拾吉

藤川組

本店　水戸市柵町　電話九五八番

支店　土浦町匂町　電話七〇五番

右東に折れて詩町に出れば左側に

信願寺 がある。眞宗西本願寺に屬し、栗野山德池院と號し、貞永元年親鸞二十四輩二十三番信願房の開基で、もと信願寺町にあつたものを、元和年間此處に移したもの、次ぎは久保町で、其處を北に横切れば新屋敷となり、其西端に、新莊小學校と隣つて

縣立水戸商業學校 がある。明治三十七年の創建である。其西方に大建築の見ゆるのは

水戸高等學校 で、これは本縣行方郡出身の富豪內田信也氏の寄附金で、大正九年に出來たもの校舍・機械器具・運動場等の設備の充實は全國高校中でも有數と稱せられる。更に北に進めば、

步兵第二聯隊 の營舍や、工兵第十四大隊の營舍もある。明治四十二年の新築で、土地は東茨城郡渡里村に屬する。それから東へ廻ると、突兀たる丘陵を見る。古來袴塚の名で知られて居る。これ前方後圓の大古墳で、

那珂國造の古墳 たるや疑ひのない所、最近史蹟として指定された。今は其頂上に

愛宕神社 を建てゝある。大掾氏が水戸城主であつた頃、京都愛宕山から勸請して城內に奉祀したのを佐竹氏の時に此處に移したのであるといふ。其東に、

縣立蠶業試驗場　がある。

曝井　袴塚の北、瀧坂にある(愛宕神社の後方に當る)清泉滾々として涌き出で、曾て涸れたことのないといふ。常陸風土記に『泉出坂中、多流九清、謂之曝井、緣泉別居、村落婦女、夏日會衆、洗布曝乾』とあるのがそれである。

三栗のなかにむかへる曝井の絶えず通はんそこに妻もが　(萬葉集)

今ぞしる思ひ出つゝ曝井のさらにも人は戀しかりけり　(衣笠內大臣)

桂岸寺　はそれから東にある。延寶年間中山備前守の創立で、二十三夜尊は其域內にあり。開運幸福の守護佛として陰曆每月二十三日達近の參詣者雜閙し、水戸界隈第一の盛り場と稱せられて居る。此附近で特に案內したいのは、

常磐原共同墓地　の藤田東湖墓である。舊上市馬口勞町を西へ極まると桂岸寺(三夜樣)の馬場前きが右手にある。之れを入つて、二十三夜堂の裏手から左の方へ分け入れば直ぐわかるが、それでなくば二十三夜堂の前面から左(西)へ曲つて又右(北)へ進めば墓所に出る。兎に角二十三夜堂からは西北に當つて程遠からぬ眺望のよい崖の上に在る。附近には水戸藩の學者、勤王家、烈士などの墓多く、安積澹泊、藤田幽谷、豐田天功、高橋多一郎、金子孫二郎、蓮田市五郎、靑山拙齋、茅根伊豫之介、大關和七郎、黑澤忠三郎、吉成又右衛門、鮎澤伊太夫等の墓がある。其他別に南方に一廓をなして一大

殉難碑　がある。これ水藩元治甲子役の殉難者を改葬したもので、贈從四位榊原新左衛門外一百六名及び鄕村出身の志士贈從五位黑澤覺介外二百四十名の墓である。こは舊藩主德川昭武侯其忠節を追賞して明治初年之を改葬したもので、戰場及其附近に戰死したものゝ遺骸は、其遺族が各之を收めて鄕地へ葬つてある、これから東に數町進んで茨城中學校と常磐小學校の間を北に入ると

祇園寺　がある。禪寺で壽昌山と號す。明國金華山永福寺の僧心越禪師源義公の招聘によつて水戸に來るや、公、天德寺を川和田に移し、新に一寺を其跡に建て禪師を居らしむ。實に元祿五年の事である。寺寶には天下一品の關帝金印を初め多數ある。心越禪師の墓は祇園寺の正面から少く手前の左側にある。義公題して壽昌山開祖心越大和尙塔といふ。祇園寺西方の墓地には水戸藩の重臣、市川、朝比奈、太田原、朝倉氏等代々の墓や、櫻田烈士、森山繁之介の墓などがある。更に東に見ゆる森は、

縣社八幡宮 で、八幡町白旗山の地にあり。祭神は京都石清水八幡宮と同體で、古は久慈郡太田に在つて佐竹氏の鎭守たりしが、文祿年間佐竹義宣水戸城を領するや、これを水戸に移したるも、元祿年間義公之を那珂西(今石塚町大字那珂西)に移し、肅公時代再び之を水戸に移して現在の地に建立し、爾來水戸家の崇敬深く、今も參詣人が多い。境內老樹枝を交へ、就中 **葉附公孫樹** は天然記念物に指定された。此地は那珂川を俯瞰し、絕勝の地である。金町を東に向つて行けば、左側に、

女子師範學校 がある。其裏手は眺望よく、特に崖下に新設せられた運動場は縣下有數のものである。附近の櫻町の崖は、元と **妙雲臺** 名櫻のあつた所で、貞芳院の歌に、

天さかるひなにはあれど櫻花雲の上までさき匂はなん

とあるは此處である。金町を通り越せば、

水戸稅務署・測候所 が左側にある。一ト坂越すと田見小路で、北方の崖の上は一帶に風景よく舜水祠堂のあつた所も此邊であるが今は何も留めない。それから

田見御殿址 も此附近にある。寶曆九年藩主良公、其處に別莊を設けて貴樂亭と名つけ、後、田見御殿と改め、地名を田見小路といふ。明和年間火災に罹つて亭は無い。田見小路の南側には、

縣立水戸高等女學校 がある。これで水戸市は大畧一巡し終つたもので、田見小路を出離るれば出發点の縣廳の前通りへ出る。其右手にある灰色の洋式建築は

水戸地方裁判所 で、其南側から西に向ふ道は、仲町通りで、此通りを行くと

農工銀行・茨城病院 などがあり、更に進めば左に入つて江幡病院あり。裏五軒町には五軒小學校や繭市場もあるが案內は限りがないから、茲で一先づ打切らう。

東茨城郡

概説

沿革　本郡の大部は昔那珂郡に屬し、南に延びた部分だけが本來の茨城郡内であつたが、文祿年中豐太閤が全國に檢地を行つて郡境を正した際、誤つて本來の茨城郡の大部を以て新治郡を立て、其東北部に那珂川以南の地方竝に舊新治郡の東部たる笠間竝に三那珂地方を併せて茨城郡を置き、後明治十一年に西茨城郡を分けて現在の郡域を見るに至つた。水戸が獨立して市となつてから、郡内には他に首腦地無く、郡役所も便宜水戸市内に置かれた。

地勢・戸口　北一帶は那珂川を以て那珂郡と境し、西北の一端は栃木縣芳賀郡に接し、西は西茨城、新治兩郡に、南は行方、鹿島兩郡に境し、東は太平洋に臨む。大體東南は平地多く西北は山がゞつた地貌を呈して居る。總面積約五四四方粁、戸數二萬四千餘、人口十二萬三千餘に及び、三町二十九ヶ村に分れ、面積に於て本縣第四位、人口に於て本縣第六位を占める。

教育　縣立工業學校は郡の地内にあり、小學校尋常九校、併置三十四校、實業補習學校四十一校、

青年訓練所三十四所に上る。郡教育會は事務所を郡農會内に置き、東部(磯濱)中部(綠岡)南部(堅倉)西部(上中妻)北部(石塚)の五部會に別つ。

交通　鐵道は常磐線の本郡中部を貫く外、鹿島參宮線が石岡驛から分岐して小川を經て行方郡に入り、茨城鐵道線が赤塚驛から分れ、上水戸を經石塚を連ねて御前山に到るものがあり、電車線では水戸袴塚から大洗竝海門橋を連ぬる水濱電車と水戸柵町奥の谷間に開通した水戸電鐵があり、自動車に至つては、水戸を中心として八方に通ずるものが皆本郡内を縱横に連絡するから、交通は頗る便利である。

物産　主なるものは北部の薪炭・煙草・茶・楮・石材、西部・南部の蒟・麥類、東部の水産、鮑・魚・秋刀漁・鯛味噌・佃煮・鹽辛・白菜等である。

案内順序　本郡の水戸市に接續した部分は、既に水戸市の部に於て附說したから之を略し、東部方面・南部方面・西部方面・北部方面に分けて本郡を一巡する。

東部方面

水濱電車に乘つて、六反田停留場に下車すると、

稲荷村

六地藏寺 の森が見ゆる。宥寛上人の開基に係る眞言宗の古い寺で、安產を祈る爲婦人の參詣者多く、古文書、寶物も多い中に、雪舟(或は雪村ともいふ)筆の十二幅殊に珍らしい。境内墓地には栗田寛等の墓がある。

鄕社稲荷神社 大字大串にあつて、寶永二年藩主肅公の創建である。以來年々水戸市に出社して祭典を行ふの慣例が今も行はれて居る。

下大野村

涸沼橋 涸沼川に架せる長橋で、磯濱町との境をなし、其水洋々として流れ緩に筑波山を眺むべく絶景の地である。橋下には水濱電車の平戸停留場があり、こゝから涸沼方面へモーターボートで連絡する。橋を渡れば磯濱である。

名產白菜 茨城結球白菜は此村の名產で、明治三十五年頃より土地の人小川萬太郎といふ篤農家の工夫發明した栽培法により優良の白菜を產するに至つた。

磯濱町

大洗

磯濱は東海岸の町で、人口一萬一千八百餘、漁業最も盛んで

海水浴場 は舊築港堤から南へ廻り大貫海岸へ續き、電車開通後は、浴客盛んに入込む樣になつた。

大洗磯前神社 は延喜の制名神大社に列し、國幣中社で齋衡三年の創立である。大巳貴・少彦名の二神を祀る。大洗の高い崖頭に聳建ち社前の眺望最もよい。崖下の海岸には奇岩怪石亂立し、努濤之に激して頗る壯觀を呈する。

磯で名所は大洗さまよ松が見えますほのほのと

水戸を離れて東へ三里浪の花ちる大洗

神社の背後東光台には、

明治記念館並護國堂 がある。特に前者は昭和四年の開館で、田中光顯伯の發願で明治大帝の御尊像を奉安し、且伯其他の寶藏にかゝる、幾多の御下賜品を陳列し、御盛德を景仰し

奉ると共に、別に一館を設け、建國以降の功臣を首とし承久建武の勤王家、維新前後の尊攘憂國の志士、封建時代の列侯大夫、學術技藝利用厚生の仁人、乃至殉難烈士に及び先賢の遺墨を陳列して一般の觀覽に供し、觀る者をして低徊去るに忍びざらしむるものがある。實に好箇の記念館である。

子の日原 大洗から北の方無線電信所前を通つて砂原の松山道となれば左手に子の日原がある。眺望よき地點で、

萬代を松に契りて今日こそは子の日の原にひかれ來にけれ

といふ碑建つ。源烈公の歌竝書として名高い。更に西北に進めば、

祝町 あり。那珂川と太平洋への岬角上に位置して、其下には長い海門橋がめり、渡れば湊町となる渡らずに左の方、

願入寺 巖船山を見る。親鸞上人の孫本願寺第二世眞如上人の開基にて、本山と最も關係深き名寺であつたが、元治甲子の役兵燹に罹つて烏有に歸す。其附近にある名勝が、

巖船の夕照 水戸八景の一で、烈公書の碑建つ。涸沼川と那珂川との碧潭を老樹の間に隱見し、八

景中隨一の稱がある。

原山並樹

原山竝樹が何恐からう時にや三途の川も越す

といふ磯節で有名な原山は此道で、海門橋から大洗の背後を通り磯濱市街に出る一本の道路をいふ

水産 鮑・鯛・鰹魚・鰯粕・鰹節・鹽辛・鯛味噌等である。

大貫町

海岸 北は大洗岬を控へ、南は鹿島郡波崎迄を一望すべく、夏海村の境には風致よき松林に富み、電車開通以來海水浴客多く、又遠淺で岩礁がないから、地曳網もひける。

大場村

大貫町から西南涸沼川を渡れば大場村である。

茨城白菜採種組合 大字島にある。大正七年郡農會の採種圃を讓り受け、面積一町四段歩、年々七石の種子を產出し、二府一道三十八縣に販賣して居る。

石崎村

平戸橋からモータボートで涸沼川を遡れば涸沼に出る。其右岸は石崎村である。

米洲岬　大字下石崎にある。細長い白砂青松の地が湖中に突出し、宛然丹後の天の橋立を髣髴するので、烈公之を八景の一つに見立て『廣浦秋月』の碑を建つ。

親澤の老松　大字上石崎にある。老幹蟠屈して千年の綠を見せて居る。

子を思ふ涙ひぬまの一つ松浪にゆられて幾代へぬらん（源義公）

石崎城址　大字上石崎にある、涸沼に突出し、東西五〇米、南北二〇〇米、東方には今尚土塁があり、往昔石川幹繼剃髪し禪師房と稱して此に居たと。

水産　涸沼に沿ふので淡水産に富み、就中小魚の佃煮を産する。

南部方面

長岡村

水戸から舊陸前濱街道を南に向へば、三里ばかりで長岡村がある。

石器時代の遺物を發見する有名な土地で、最古から末期アイヌの遺物に至るまで殆んど發見せられざるなく、帝大の人類學教室にも此土地の調査は重要なものとして存してある。

ホウテウ塚　文明十三年江戸但馬守、小幡長門守と戰ふや、北條勢小幡を援ひ、却て委に多數討死した所と傳へらる。

楠公社　大字長岡にある、水藩勤王志士が大義を唱へ、攘夷を謀議せし遺跡で、萬延元年正月方六間高七尺の塚を築き『大日本至忠至誠楠公招魂表』と大書した木標を立て、且小祠を建てゝ楠公を祀つたのに始まる。櫻田事變を起したのは彼等であつた。その後水戸が諸生派の手に歸して以來中絶の姿になつて居たのを、明治九年長岡の人木村富藏の請願によつて同十年に再興された。然るに其後野火の爲に燒失し、大正十五年再建されたのが今の社である。祠前に昭和六年建設の櫻田烈士の記念碑がある。

大戸櫻　大字大戸にあり、目通り三丈三尺五寸、枝下地面を覆ふこと百八十坪關東唯一の名櫻といはれて居る。最近名勝として文部省から指定せられた。

上野合村

圓福寺國寶　大字鳥羽田にある、嘉永年間水戸東照宮別當大照院から遷したもので、大正四年國寶となりし彌陀如來の木像がある。又同境内の不動尊幅は知證大師の自筆で義公の裏書があるといふ。

小栗氏墳墓　同字龍含寺にある、小栗氏は鎌倉時代より此地に住し、天正中地頭たり。南方の小栗と稱するものこれにて、後ち地名烏羽田を姓とす。

畑彌兵衛　大字烏羽田の人、元治甲子の役に殉じ、正五位を追贈せらる。

千貫櫻　大字小幡にあり、今枯て古株を殘すのみ。

春風も心して吹けちるもうしさかぬはつらし花の木の下　（源義公）

小川町

郡の南端にある、霞浦に接して汽船便を有し、人口五千餘。常磐線石岡を基點とする參宮線の驛があり、高濱驛とは乘合自動車の連絡が頻繁である。

稽醫館址　文化元年小川町の醫士本間玄琢運漕廳の舊館を醫學研究所に充てんことを請ふ。藩主文公之を嘉納し稽醫館の名を賜ふ。藏書多く遠近の醫士就て學ぶもの多かつたが、安政五年小川鄕校と改稱し、大に文武を兼修したるも、元治甲子の兵燹に罹り、今は小學校の敷地になつて居る。

香取照女　香取神宮大宮司大中臣氏の後裔香取良恭(小川運漕廳の手代)の女で、學問を好み、親孝行で、父死後法華經を書寫して菩提寺に納め、其冥福を祈る等孝行貞節の狀藩廳に達し、哀公より物を賜はり、鄕人其傳を上梓して國内に公にした。

小川故城址　建久中下河邊政義の築く所、天正十八年佐竹氏の爲に陷る。

川根村

押邊松　大字押邊小沼氏の有で、一幹に十八種の松の種類を接木したもの、高さ三米、東西約一八米、南北約一五米ある。

西部方面

河和田村

水戸驛から、上り列車を赤塚驛に下車すると河和田村となる。

報佛寺　大字河和田にあり、親鸞の弟子唯圓坊の開基で、親鸞の親筆を藏すと。

河和田城址　嘉應年間江戸氏の居城であつたが、江戸氏水戸城を攻落し、これに遷りたるも、天正十八年佐竹氏水戸城を奪取するや、河和田城從つて廢滅となる。城廓塹濠今尙存す。

縣立薫風院　大字河和田字丹下にあり、不良少年を收容し教育する所で、研究施設見るべきものが多い。前院長根本陣平氏の苦心功勞は有名なものである。

妙德寺　赤塚驛から三・三粁、西へ上中妻村大字加倉井に到れば、常陸日蓮宗最初の道場たる妙德寺がある。日蓮聖人が文永二年常陸遊化の際法筵を設け説法したる靈跡であるので、建治二年日高上人及び波木井彌三郎（身延山大檀那の三男）の二人身延より來りて一寺を建立す。これ現今の隱井山高在院妙德寺である。

常陸湯　大字加倉井にある。源義家奥賊征伐の途、此處に來り、滾々と涌き出づる靈泉に沐浴して戰勝を祈り、且つ八幡社を祀る。これ隱井八幡にて、其神像今尙妙德寺に傳はる。後年日蓮此處に來りて靈泉を沸し、沐浴して說法をなした遺蹟といふ。靈泉は其後妙德寺奥の院の中心となりたる、久しく堙滅に歸し居りたるを、大正十一年波木井氏の後裔加倉井邦彦氏之を再興した。

中妻村

有賀神社　內原驛より約二粁大字有賀にある、天正二年九月廿五日大洗磯前神社へ神輿を渡御し、同社よりの献魚を持歸りて祭事を行ふの慣例を造り、以後年々同日を以て之を行ひ今日に及ぶ。今は毎年十月二十五日に變更したるも、渡御途上小兒を負ひたる婦女の參詣するもの夥しく、就中水戸市最も雜閙すといふ。

和光院　大字田島にある。內原驛より約三・三粁、昔江戸氏の菩提寺で血不動尊を以て有名な眞言宗の寺である。

大足城址　大足大城山にある、隍壘猶存し、往昔江戸氏の臣外岡伯耆守の居りし所と傳ふ。

下中妻村

御野立場　內原驛より一・六粁大字杉崎和尙塚にある、堀割延長約五〇米、幅三・三米、高さ二・七米にして、こは明治三十三年十一月十六日、近衛小機動演習を親しく觀はせられんが爲め、明治天皇の行幸あり、御野立遊ばされた所である。

北部方面

渡里村

水戸市を西北に出つれば、渡里村となる。縣道の北に當つて一大廓內にある數棟の建築は、

歩兵第二聯隊　の營舍で、それに對して縣道の南にあるのが練兵場で、附近に射的場もある。此村の北端那珂川に沿うた所に **水戸市上水道** の壯大な裝置が設置せられた。

水戸から三粁弱金澤坂の上には一森長者の古蹟もあれど、坂を下れば飯富村となる。直ちに左に折れて坂を一つ上ると山根村だ。

山根村

日新塾址 大字成澤にあつて、天保の頃より安政にかけ約三十年間に亙り、文藝武術三千餘人の學徒を教養したる鴻儒加倉井砂山の學塾の址である。明治九年火災に罹り、全部燒失したるも、今再建し又砂山文庫の再興中に屬す。齋藤監物、川崎八右衛門、香川敬三等は皆此塾にて養成された人物である。

加倉井砂山墳墓 同大字西南方の丘陵にあつて、碑文は門弟齋藤監物の書きしもの。

飢饉土手 同字加倉井平左衛門氏邸數千坪の周圍を烏帽子形に廻らしたる堤がある。天明年間大飢饉の際同家が庫を開いて附近の窮民を恤みしより、其恩を忘れざらんが爲窮民等が築きしものといふ。

成澤礦泉 西方山岳地帶の中にあり、湯澤山と稱し、老樹多く、泉の水を沸し病を治するを以て古來名高く、浴客常に集まる。内原驛より四粁餘。

成澤を西北に向つて貫けば小松村となる。

小松村

小松寺 幕末の勤王僧松箱上人を出したる寺にて大字上入野の西極にある。眞言宗にて白雲山普明院と號し、平貞能の開基で、彫刻の精巧な觀音像があり、國寶中の珍品と稱さる。又義公筆和歌の寺寶もある。

絶やらぬみのりも千代の小松寺ふりにし跡をとふたむけかな（安藤朴翁）

平重盛墳墓 小松寺上の山腹にある。今一大碑建ち、小松宮殿下の篆額を拜す。墓は平貞能が其主重盛の遺骨を齎らして埋めた所であつて、最近本縣より史蹟として指定された。

興野軛 大字增井の人、助九郎と稱し、春草と號す。加倉井砂山の塾長で、後弘道館の教師となり元治甲子の役、難に殉じ靖國神社に合祀せらる。

西郷村

藤井川發電所 大字下古内の地内藤井川の岸にあつて、今東部電力株式會社に併合す。

清音寺 同字の山奥にある。太古山と號し、禪宗にて佐竹氏の創建で其有名なる山門の仁王像は現

に倫敦博物館の珍なりと聞く。今や堂宇を再建して、漸次舊時の壯觀に復しつゝあると。

鯉淵要人の墓　大字上古内鹿島神社西側にある。櫻田烈士の一人にて靖國神社に合祀せらる。

青山神社　大字上青山にある、五十猛命を祀る。延喜式小社に列し、古史にも其名見ゆ。

春園石　大字春園の山岳地帶より出つる灰褐色の石材で、耐火性に富む。

飯　富　村

水戸市から渡里村で出で、縣道を石塚に向ひ金澤坂を下れば、其處に展開するのが飯富村である。

飯富甘藷　は其東方那珂川流域から産する有名なイモである。

眞佛寺　大字飯富の南端馬ヶ峰にある。宗祖親鸞が百日間滯敎した所で、眞佛上人(大部兵太郎)の開基である。寺寶に親鸞の作つた左の田植歌の眞筆及親鸞關東繪傳などがある。

田植歌

五劫思惟の苗代に　　兆載永劫のしろをして
一念歸命のたねをおろし　　自力難行の草をとり
念々相續の水を流し　　往生の秋になりぬれば
　　南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

このみとるこそうれしけれ

眞佛上人墓　眞佛上人は卽ち大部兵太郎で、此土地の者なるが、親鸞が稻田の草庵に行きて無二の信徒となる。其後文曆元年平太郎紀州熊野權現に詣づるや、靈夢に感じて途親鸞を訪ひ、遂に出家となり、歸りて眞佛寺を開き、弘長元年逝く年六十三、墓は馬ヶ峰の最南端眺望よき所にある。

大井神社　延喜式小社に列す。應永中江戸氏の亂に神社兵燹に罹りしも、永正年間松本刑部之を再建す。貞享中源義公神鏡を鑄て本社に奉納した。大字飯富中央の高臺に在る。

藤内神社　大字藤井にあり、經津主命を祀る。延喜式小社に列す。大永年間社殿神寶燒失したるも元祿に至り源義公之を再建す。

十萬原　大字藤井の西北方にある、源義家が十萬の兵を勒した所なるを以て、十萬原と云ひ傳ふ。今は一部耕地となり、他は殖林地になつて居る。

石　塚　町

飯富村を越え、坂を上れば石塚町大字那珂西となる。

寶憧院　眞言宗にて、大字那珂西にある、那珂川其下を流れ眺望よし。白鳥流二十八祖知堂上人の

開基にて、當流第一の舊跡である。源義公の元服したる寺にて、今其遺髮尙存し、義公筆の和歌もありと。

那珂西城址　大字那珂西にある。那珂川其下を流れ、廓內三に分れ、今猶隍壘あり。南朝の忠臣那珂通辰之に居り、建武延元年中賊軍に抗したが、敗れて一族戰死した。

藥師寺　大字石塚の南方にある大伽藍にて佐久山と號す。妙成上人の開基なるが近古天台宗となり、其藥師如來の木像及胎像竝に日光・月光の兩脇立尊は先年國寶となる。境內に三重塔ありしも明治三十年頃大破、今は朽滅した。

增子金八墓　大字石塚上町稻荷神社の北方なる大島氏の墓中にある。櫻田烈士にて、石塚に落延び、明治十五年病歿す。

寺門靜軒　大字石塚の人、夙に江戸に出て塾を開き又著述をなし『江戸繁昌記』等の名著がある。

煙草收納所　水戸專賣局石塚出張所は大字石塚にある、此地方數ヶ村の栽培する煙草を收納する所である。

圷　村

峨嵋先生墓　大字上圷の村社境內にある。立原翠軒の碑文を刻す。峨嵋は笠間藩士にて、本名生駒周藏、碩學にして天下を周遊し、後圷に塾を開き大に子弟を敎養し、文化元年歿した。

粟野塗　大字粟にて產出する漆器なるが、重に膳・盆の類にて、製法は四百餘年前の發明に係るといふ。彼の能代塗は此の粟野塗から出たもので、昔佐竹氏が水戸から秋田へ移封せられた際持行かれたに起因すといふ。

岩　船　村

圷村から西方の臺地へ上れば、そこは岩船村となる。

惡路王の首　大字高久の鎭守社內にある、坂上田村麿呂東征の折、奧賊の巨魁惡路王の首級を獲て朝廷に獻せんと此處迄持來りしに、腐敗したれば鎭守社に納めたるを、村人これを木乃伊に製して同社の寶物とす、後源義公これを城中に收めて、其模造を同社に納めたといふもの現存する。

黑澤時子墓　大字錫高野にある、同地黑澤莊二郎の女で、和漢の學に通じ忠孝の志厚く、水戸烈公の幕譴を被り、幽閉せらるるや、憂愁措かず、遂に意を決して京都に上り、寃を訴へんとして捕へられ獄に投ぜられたが、後許されて家に還り明治廿三年歿す、歲八十五。明治四十年從五位を追贈

せらる。

われあらぬ後も常磐の神垣に御代の千とせを禱れ家の子（黑澤時子）

北方古墳 大字北方にある。小學校裏の丘陵の崖腹に露出し、大石數枚を以て壘む。

高取鑛山 大字錫高野にある、佐竹氏時代に金銀錫を產したが、明治の末頃から重石を採掘することになり、三菱鑛業に屬して、世界戰亂當時は盛に生產したが、今は停止中だとい。

岩船石 を大字岩船の山中より出つる石材にて、色稍青く石質堅牢に、古來建築に用ゐらる。

大山寺 大字高根にある、眞言宗にて寺寶に乾達婆王尊あり、五百年以前大山因幡守信仰せし以來殊に小兒虫切に靈驗高しとて、遠近より參詣するものが多いふ。

石船神社 大字岩船にあつて、天鳥船神を祀る。延喜式小社の一、今村社となる。古史に『貞觀元年四月二十六日常陸國正六位上石船神授從五位下』とあるは此社で、祠傍に苔むせる自然石の一大古船がある。

澤山村

坏村の縣道を北に向つて過ぐれば、澤山村となる。此處は茶と蠶業の盛んな村である。

太山城址 大字阿波山西方平地に高く突起せる城址で、往古大山氏の居城といふ。

阿波上山神社 少彦名命を祀る、延喜小社の一にて勸請は文武天皇の大寶元年十月で、仁和二年十二月從五位を授けらる。今鄕社である。

大根干瓢 大根を干瓢の如く製したものを產する。或は酸浸しとし、種々簡易料理に利用多く、これは大字上阿野澤の篤農家所寅之介氏の工夫發明に係り、從つて同大字に產するものが良品だといふ。

鮎 此村那珂川の急流に沿ふので、秋季鮎を漁するもの多く、其群をなして淺瀨を上下するところを、多數のカラ勾針で釣る所謂『鮎引ッかけ』といふ漁法を用ひてゐる。

白山 大字赤澤にあつて、海拔一七〇米、山上に白山神社あり、春期登山者が多い。

龍谷院 大字下阿野澤の山腹にある、曹洞宗にて、瑞雲山と號す。長祿三年秀峰宗岱大和尙の創建である。開山の際井を掘りて龍骨を得、今寺寶として保存すと。

赤澤富士 眉山ともいふ大字赤澤にある、海拔二二〇米。

御前山 村の北端那珂川の崖頭に位し、全山鬱蒼として茂り老松石杉枝を交へ、絕壁下を那珂川

流れて景色頗るよい。今は山腹を切り開き、伊勢畑村への交通便利となる。

伊勢畑村

郡の最北の小村にて煙草を産し、山には松茸を生ず、西は栃木縣に境す。

相川溫泉　海上下伊勢畑の境なる山中の溪谷間にある。病浴によく且幽遠脫俗の小天地で、僧空海曾遊の地と傳ふ。

香川敬三　大字伊勢畑の人、初め鯉沼庵と稱し夙に勤王の志を懷き、幕末の志士として東奔西走大に王事に力め、戊辰の役官軍の參謀として殊勳あり、後皇后宮太夫となり、伯爵を授けられ從一位勳一等を賜はり今は故人となつた。

蓮田東藏　大字下伊勢畑の人、香川伯の實兄にて、安政四年米國使節の横暴を憤り、江戸に上りて之を刺さうとしたが捕へられ、獄中に死す、年二十二、文久三年其罪を赦され、明治四十四年特旨を以て從五位を追贈せられた。

連山和尙　大字上伊勢畑字沼の上の人、寛永十一年の生れで、下阿野澤龍谷院に入り僧となり、後日立大雄院の住職となり、又水戸祇園寺にも居たといふ。義公と往復したる名僧であるが、晩年下野國富山村大中禪寺に寂す。元祿年間に建てた碑が其境内にあると。

井殿山　大字下伊勢畑にあり、海拔一七三米。

香川伯遺髮碑　大字下伊勢畑にある。慶應三年鷲尾侍從等と勤王の義兵を高野山に擧ぐるや、自ら長髮を切つて『黑髮のかゝる亂れの世にしあれば死しての後の片身とも見よ』といふ一首の和歌と遺髮とを同郷の人富田某（岩船村の人）に托して郷地に送つたが、富田は憚りて之を家の棟木に隱匿し置きしを、四十年の後これを發見し伊勢畑鎭守の附近に埋め、碑を建てたものである。

西茨城郡

概説

沿革　本郡地域の大部分は往古の新治郡に屬し、中世以後笠間郡・中郡等の俗稱が起つて新治郡の名を失ひ、文祿以後茨城・那珂兩郡の地と合せて茨城郡と立てられ、明治十一年之を兩分して今の郡名となつた。郡の中樞をなす笠間町は、舊牧野氏八萬石の城下で現に警察署・縣立農學校等が置かれ、且近年稻荷神社を以て關東の名邑となつた。

地勢・戸口　大體三角形をなし、西北は山脈相連つて栃木縣芳賀郡との間を隔て、其間に金山峠・佛頂山などがあり、西南亦板敷山・難臺山・愛宕山等の一連を以て新治郡に境し、西方は一路眞壁郡に通じ、東方一帶は東茨城郡に接する、此處に朝房山（海拔二〇一米餘）が常陸平野を見下して居る面積約三八七方粁、戸數一萬三千餘、人口七萬五千四百餘で、四町十ヶ村に分つ。

教育　郡内には縣立笠間農學校、私立笠間女藝學校、同笠間家政女學校などの外、友部に加藤氏

經營の國民高等學校があり、小學校には併置校一五校、尋常校九校、實業補習學校二四校、青年訓練所一四所あり、郡教育會は事務所を笠間尋常高等小學校に置き、東南部（宍戸）中央部（笠間）西部（東那珂）の三部會に別れて居る。

交通　鐵道は常磐線が東部を縫ひ、水戸線が友部驛から別れて本郡を横貫し、更に岩瀬驛からは筑波線を分つので、笠間其他の各驛の自動車と相俟つて、交通は至極便利である。

物産　米・雜穀・繭・桑苗・薪炭・石材・陶器などある。殊に福原・岩瀬・稻田各地から出る花崗岩は近年著しく需要を增し、笠間燒も一種素朴の特長を以て販路次第に擴張されて來た。

案内順序　先づ岩間驛附近から始まり、次で友部驛・宍戸驛を起點として其附近に及び、笠間に入り順序水戸線を傳うて西に進み、終りに北部各村に及んで郡内を一巡する。

岩間町

岩間町は大正十二年町制を施行した地で、繭、薪炭其他の産出集散が近時激增を見せて居る。

愛宕山　大字泉にある。海拔三〇六米、頂上の愛宕神社は火伏せの神として登山參詣する者多く、又霞浦を眺むべく、風景もよろしい。

藤塚　大字泉にある。古來高貴の人の墓とのみ言はれて居たが、昭和九年此處から「藤原藤房」と刻した銘碑と、「無等良雄位」と刻した石碑とが發見せられ俄然世の注目を惹き、吉野朝の忠臣藤原藤房卿の墳墓の有力な候補と見られ、參拜者頗る多い。最近阪谷男爵撰文の一大記念碑が建てられ、面目を一新した。

玉簾塚　大字岩間下郷上菅谷の山中林にある、高三十糎、周圍約七米、往年宍戸家政の長子家周鎌倉に赴かんとして愛馬「玉簾」此に斃る、土人之れを爰に埋めて玉簾塚といふと。

難臺山城址　大字岩間上郷字館岸山にある、東西一八二米南北七三米、東は山岳に連り、西は難臺山の絶壁で、四方繞らすに空隍を以てす、これ往昔左馬中將安國の居城で、建武中興の時小田氏の族岩間胤知之に居り、元中四年七月小田孝朝の子五郎等小山若犬丸と共に此に據つたが、翌五年五月敵將上杉禪助攻來り城遂に陷ると、山頂は海拔五五三米ある。城址は昭和九年縣史蹟に指定された。

日のかげも逆立つ雲におほはれて常暗となる五月雨の空　（小田五郎辭世）

友部驛

友部は常磐線から、水戸線の分岐する所で、其停車場は可なり混雜する、驛に接續して櫻樹多く、花時夜櫻見物の人雲集し、近來夜櫻の名所となつた。

國民高等學校　友部驛から南へ一粁餘の所にある、加藤完治氏がデンマークの國民高等學校に則り、強き信念と獨自の方式によつて經營せられて居る、附近に縣立種畜場がある。

霞ケ浦航空隊友部分遣隊　昭和九年以來設置陸上機の訓練を行つて居る。

小原城址　友部驛から東北へ約二・七粁、大原村大字小原字館にある、地勢平坦乍ら隍壘の跡は猶ほ存する。傳ふる所では永享元年里見家基久慈郡依上城を拔き、功を以て封を加へられ、弟滿致を此に置くと。

宍戸町

宍戸町宍戸は、小田氏の族宍戸氏の興つた所、後水戸德川家の連枝松平氏の城下となり、元治甲子の役藩主大炊頭に依つて宍戸の名大に世に現はるゝに至つた。

殉難碑　大字太田養福寺境内にある、元治甲子の役、宍戸藩主松平頼德以下藩臣殉難者の碑で、驛より六五五米の所にある（明治五年建碑）

北山不動　大字太田より北に向ひ池邊を迂回して石段を上れば不動尊があり、老樹多く瀑水響き絶好の仙境、驛から二・四粁。

宍戸四郎墓　大字平町の西方臺地にある、驛より八七三米。往古八田知家此地を領し、建保六年三月三日卒し、此處に葬ると傳ふるが、それは恐く誤で、知家の四男宍戸四郎家政の墓であらう。

宍戸城址　大字平町字新城にあり、面積四町五段正保年中秋田俊李私かに之を築き、幕譴を被り破壞さる。宍戸家政の後代々宍戸氏の據つた故城趾は大字宍戸にある。

松平頼德　大炊頭と稱し宍戸藩主であつたが、元治元年水戸正奸二黨の軋轢甚だしいので、水戸藩主順公代理鎭撫使として、下向した所、途中より筑波の義兵（當時は暴徒と稱さる）が追隨して來た爲め、城兵（當時奸黨と稱さる）は之を拒んで入れず、遂に戰端を開くに至つたが、幕府が大兵を發して城兵を援けたので、軍敗れ頼德は降り自盡を命ぜられた、後ち從三位を追贈せらる。

笠間町

笠間町は笠間驛から約一・四粁、舊牧野氏八萬石の城下で、郡の中央に位し、戸數千九百、人口九、七二一、近年胡桃下稻荷神社の參詣人夥しくなり、漸次繁盛の町になつて來た。

産物　陶器、瓦、洋傘柄、製材等である。

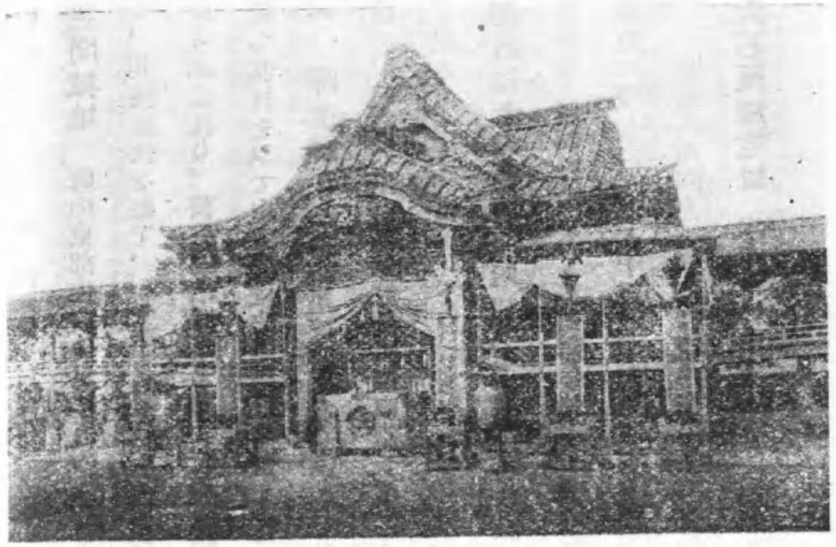
笠間城址　町の東部佐白山上にある（驛より約三・三粁）元久元年從五位下藤原時朝の築いたもので、其後數代を經て、寛永十八年淺野内匠頭長綱之を領し、延享四年牧野備前守貞通、日向國延岡から此に徙り、爾來明治四年まで牧野氏の領であつたが、今は殘壘のみとなつた。蓋し城郭樓櫓を毀ち其材を以て山上に佐志野神社を營んだによる。

蹕遺跡　高等小學校跡に其二階建一棟存す、明治三十三年十一月十五日近衛師團機動演習の爲め、明治天皇の車駕笠間町に臨幸し、此を行在所にし給つた。史蹟に指定せられ、今は公園となつて居る。

加藤櫻老の銅像　昭和九年公園内に建設された。翁は笠間藩出身の鴻儒で水戸の會澤正志、藤田東湖等に學び後出て、長州藩に仕へ子弟の教育に當り幕末國事に奔走して大功があり、明治十七年東京に歿した、年七十四。昭和九年正五位を追贈せられた。

蹈遍八州關左雲、脚痕覇略奈紛々大呼仰天出門去、誰知一士抵千軍（櫻老）

大石良雄宅址　字田町にある。淺野氏笠間を領せし際、大石良雄の祖父良欽まで居住せし所と傳ふ。



笠間稲荷神社

大黒岩　佐白山の中腹笠間城追手門の通路左側にある。花崗岩なるが、高四米、徑四米形大黒天に似て居る。

憐民詞碑　笠間公園（佐白山中腹）にある、藩主牧野貞喜の俳句を刻す、

『ふりむくは泣く兒の親か田植笠』

書は六世の孫貞直の筆で、碑文は故子爵牧野貞寧の撰である、佐白山を中心にして其他名所頗る多い。

稲荷神社　胡桃下稲荷、又紋三郎稲荷ともいふ、社前の花崗岩大鳥居は關東一の稱がある。近年參詣人最も夥しく、笠間の稲荷か、稲荷の笠間かを疑はしむるのである。關東北に於ては

實に成田に次ぐの大盛り場として海内に響いて來た。社の後園の美觀、及び社殿の彫刻等見るべきもの少くない、大祭は**年越し**と**初午**である。

佐志能神社　佐白山上にある、舊城天主閣の趾である、延喜式内小社に列する有名の社で、現在の社殿は藩主牧野貞寧子が、笠間城の建物を毅ち其餘材を以て造營せられたものである。

南山内村

岩谷寺　大字來栖にあつて、醫王山と號す、眞言宗の古寺で、笠間驛から西南約二・五粁ばかりの所にある。平城天皇の勅願寺で、大同四年空海の弟子秀悅阿闍利の開基に係り、本尊藥師は空海の作といはれ、前立の醫王如來、不動、毘沙門、十二神將は運慶の作と傳ふ、今いづれも國寶に指定さる、古は美しい大殿堂を有したが、文政十一年と、明治十六年との兩度の火災に罹り、國寶以外一物も留めず烏有に歸した。現寺は近年の再建で、他に見るべきものはない。

北山内村

大日堂　大字箱田にある笠間出身の畫家木村武山氏獨力の設營で堂宇は現代美術の粹と見られ中に大日如來傳を安置する。武山氏は現代第一流の大家たるは人のよく知る所門人に江川武村等がある。

佛頂山楞嚴寺　大字片庭にある、本尊は大日如來で、花園院と號す、仁明天皇の嘉祥年間、千歳といふものゝ開基に係り、後ち元久年間藤原時朝笠間城を築きし際、新に佛頂山麓に地を相し、寺院を移し、僧大拙を以て再建開山とし、且つ寺領百三十五石を寄附したが、永和年間大功德和尚の時、佛頂山（海拔四三〇、九米）の半腹を開き、大日如來の像を安置すべき七間四面の殿堂を建立した。然るに寛永八年の失火に全部烏有に歸し、僅に山上の彌勒堂のみ殘り、古文書、寶物多く烏有に歸し、僅に殘つた山門、彫刻千手觀音立像、及彫刻彌勒菩薩立像はいづれも國寶となつた。

瀧野不動　大字箱田字瀧の和田にある、本尊不動明王は丈け三米餘、自然石を以て彫る、境内は頗る風景に富む。

片庭の蟬　大字片庭七不思議の一つに奇蟬がある、往昔は楞嚴寺境内の大杉に鳴いて居たのを、大杉枯れて後は大内八幡宮の大椎（三本あり）に移つて年々鳴く、形極めて小さく虻位で、しかも其鳴聲は猛烈に大きいので名高い。群居する樣だが何人も樹にあるを見たことがないといふ。年々土用の前十日程午前二回、午后二回と鳴く、一蟬が音頭を取れば全蟬皆鳴き、十五六分間繼續するが、土用に入ると鳴かなくなる。そして他の樹へは決して移らない、毎年同一樹木に棲んで居ると。

笠間氏墳墓　大字片庭楞嚴寺境内にあり、時朝以下歴世ものにて十七基並ぶ。

西山内村

稲田停車場　大字稲田にある、笠間の西隣驛で、花崗石材の運送盛んである。

稲田神社　大字稲田にあつて驛より西六五五米の所にあり、延喜式内の大社で、祭神は奇稲田姫命、上口新治國造が出雲國から分祀したもので有名な縣社である。

西念寺　元久年間稲田九郎頼重、笠間左衛門尉時朝等、親鸞上人を越後より稲田に請じ、頼重は其弟子となり、頼重房敎養と名づく、かくて吹雪谷の勝地に草庵を結び、元仁元年始めて眞宗を此の地に開いた。これが今の西念寺の創始である。大字稲田にあつて、停車場より約八七〇米、寺寶として重大なものは『御筆止の名號』で、之は親鸞が五十二歳の時此處に眞宗の聖典全部を選纂し了り、滿足せりとて紺紙金泥の六字名號を揮毫したものである。『御滿足御眞影』は矢張り其時佛師に命じ壽像を彫刻せしめたのもの、**御骨堂**は親鸞の分骨を埋めた所、**見返橋**は親鸞が歸西の首途を惜しみし記念橋で、寺の西方田圃道にあり、西念寺は眞宗隨一の發祥地として、遠近の信徒參拜するもの引きも切らぬ有樣である。

玉日廟所　大字稲田にある、四層の方石で高約二米、驛より約三〇〇米、親鸞上人正室玉日姫の墳墓である。玉日姫は關白九條兼實の女で弘長三年九月十三日歿す、年七十八。

花崗岩　稲田驛を去る三〇〇米の山腹より産する。年産額四、七七〇切（一切は一立方尺）此價格六七一、四〇〇圓、採掘從事人員一千人を越え、近年上海方面へも輸出するやうになつた。

北　那　珂　村

五大力塔　大字地龜にある、天慶三年將門征討の時、日乘上人藤原秀郷の請により、檜を以て五個の靈像を彫刻し、堂宇を建てゝ之を安置し、大檀を築いて官軍の全勝を祈念した所だと傳ふ、羽黒驛より三、二七三粁。

鏡ヶ池　羽黒驛より約三・三粁大字山口にある。有名な櫻川の水源であつて、池塘に十數株の老櫻あり、更に松檜の年ふりて周圍を繞れるあり、池水曾て增減なきも奇、閑寂な一仙境である。

花崗岩　大字山口、池龜の山脈は全部花崗岩で、明治三十五年より採掘に著手し、軌道によつて羽黒驛に搬出す、年産額三十萬切、價格は六萬圓である。

中里瓦　大字中里より産す、瓦製造家十數戸、年産二十五六萬、價格五萬圓、近年需要が多い。

富谷觀音　大字富谷の山腹にある。岩瀬驛より約二粁、天平七年　聖武天皇の勅願に依つて、行基菩薩の開基に係る有名な寺で、本堂には行基自作の十一面觀音を安置し、左右に慈覺大師の不動尊、運慶作の毘沙門天が立つ。其三重塔は天平當時の古建築として珍重せられ、保護建造物になつて居る、山腹景勝の地を占め、眺望に富む。

小山寺　塔婆（三重塔）は國寶に指定されてゐる。

東　那　珂　村

櫻川　大字磯部にある、羽黒驛から約一・一粁、名花の古跡として東國第一に謳はるゝ所で、一千年前の貫之の歌によつても有名である。

『いつよりも春べになれば櫻川波の花こそ間なく寄るらめ』

水源は北那珂村山口の鏡ヶ池で、西流して磯部に至り、櫻樹兩岸に並び、長堤十里花時の美觀無雙と稱せられ、諸山中の『なほ青柳の糸櫻』は今もあり、名勝として國の指定を受けてゐる。川は南流して眞壁郡に入り、筑波郡に入つて水無川を合せ、土浦の南を流れて霞ヶ浦に入る。

稲村神社　大字磯部にある、祠前櫻川の碑は天保十四年に建てたもので紀貫之の歌を刻す。又明

櫻の川櫻

治三十四年知事柏田盛文此に巡視し、櫻川風景保存資金若干を供し、櫻樹數百本を神社境内に植う。

主玉神社　大字加茂部にある、和銅四年の草創にて應永二十一年修繕す、建仁四年三月七日土御門帝綸旨を賜はり今尚存すと。又　後醍醐天皇宸翰も社寶として現存す。

中郡城址　大字松田にある、元中郡氏の居城であつたが、延元興國の際春日顯時兵を派して之を陷れ、次て春日顯國等之を守つたらしく、北畠親房卿小田から關城に移るに及び、關・大寶・眞壁・伊佐諸城と兵を聯ねて賊と戰ひ、興國四年冬關大寶兩城の陷落につれて陷つた。吉野

朝忠戰の史蹟である。

月山寺　羽黑驛より八七三米、本尊藥師如來は行基作、此寺は　桓武天皇延曆年間、法相祖師德益大師の開基である。慶長十九年關東と大阪の和睦の際、當住職惠賢法師は家康の內命を受け、慈眼大師と共に大に周旋する所あり。元和元年德川秀忠大阪出發の時は兩僧陣中に隨ひ戰勝を祈禱したが、凱旋後の拜領物今尚此堂內に存す。

僧惠賢墓　月山寺にある。塔石三層、高三・七米、惠賢は友部の人、天海僧正の弟子となり、關ケ原の軍に從ひ、歸鄉して本寺に入る。元和二年八月寂す。

岩瀨町

岩瀨停車場　大字岩瀨にある、近年筑波鐵道の基点となつたので一層昇降者の數を增し、且つ石材の搬出も盛んなので、岩瀨に町制を布いた。富谷觀音へ約二粁、雨引觀音へ約六粁、加波山へ約十粁ある。

御駐蹕記念碑　岩瀨驛より西方約二・七粁にある。明治三十三年近衛機動演習御統裁の爲め、明治天皇座の宮の丘地に御駐蹕あらせらる。村民此榮譽を記念せん爲め此土地を公園とし、其記念碑

を建つ。大正七年十一月陸軍特別大演習の際にも　大正天皇御駐蹕あらせられた聖跡である。

坂戸の城址　大字西飯岡の西北に聳える山地で、岩瀬驛から約四粁、城は　天武天皇の後裔小宅高國の城址と傳へらる。關東平野を一眸に集め富士の高嶺も望むべく絶景の地である。

妙法寺　岩瀬驛より約六粁、むかし疫病を救濟すべく、鎌倉から迎へられた舜慶上人といふがあつて石棺を造つて自ら其中に入り、念佛を唱へながら死んだ。遺言によつて後年其棺を開きし所木乃伊になつて居た。現に其木乃伊は同寺に安置されてゐる。

飯岡城址　大字西飯岡字伊勢臺にある、北隅高く深溪西北を繞る、東南稍低く、麓に深隍あり、今水田となる、往昔宇都宮氏之を領し、後小田氏之に居り、永祿七年宇都宮氏の臣小宅氏之を複したが、字都宮氏の歿落と共に城廢墟となる。

礦山　驛より四粁西北隅大泉の山地に石灰岩露出し、これにて石灰を製造する工場がある、鐘乳石石筍の珍らしいのが時々發掘されると。又附近から良好の砥石が出る。

犬田神社　大字犬田にある、社後にある神木の欅は廻り八・五米、源義家奥州征伐の途參拜せられ、其時献納の陣幕等存すといふ。地方に有名な古社である。境内には神ながらの老樹林あり、小學校で此に林間學校を設けて夏時の教育に利用すと。

鴨鳥五所神社　大字大泉にある、大同年間の勸請で、建仁二年結城朝晃當社に戰勝を祈ると傳へらる。明治四十年結城の行在所に於て、本社殿の寫眞天覽に入る。寶物としては古刀一口、神木の榊は目通一・二米、枝下五・四米、杉一本目通約八米、枝下九米餘あり、參拜者常に多い。

耕地整理組合　大字大泉外五字の區域で施行したが、大正三年一月工事著手、六年一月完成、完成後の增反別一段八畝二十歩、總經費四萬二百圓餘。

七　會　村

郡の極北にあつて山岳地方である。

八瓶山　高三四五米、弘仁中弘法大師密法を弘めん爲め、大宇德藏の山中に入り法を修む。山頂に八峰ありて、八葉の蓮華に似たり。此歳旱天續き、村民雨乞をなす。大師即ち自ら八大瓶を設けて雨を祈る。修法未だ終らざるに白雲起り八瓶を覆ふと見る間に雷雨立ちところに至り、萬物蘇生したので以後此山を八瓶山、又は布引山といふと。後伽藍を建てしも兵燹に罹り、佛像丈け存して今德藏寺に安置す。毎年陰曆三月二十一日參詣者雜閙す。笠間驛より一四粁、山容秀麗で眺望も絶

伴である。

塩子金礦址　大字鹽子岩谷にある。佐竹時代に金を堀り又錫を採つた所といふ。

佛國寺　大字鹽子の山奥にある、眞言宗で、往年其本堂は山腹巖石の懸崖に建てられ輪奐の美を極め、參詣登山者多かつたが、數十年前野火の爲めに燒失した。其際駈け著けた村人の一人は猛火を犯して本尊の觀音像を抱き、數丈の絶壁から飛落ち慘死したが、佛像は其爲め無事なるを得た。

大池田村

朝房山　は大字池野邊にあり、東茨城郡山根村に接續して、郡の北東境に峙つて居るから、東南方は平野を展望すべく、又平野よりよく見えて、愛嬌ある山となつて居る。海拔二〇一・一米。

森貞次郎　大字大橋の人、筑波の義徒で元子甲子の難に殉じ大正十三年從五位を追贈された。

那珂郡

概説

沿革　往古那珂郡は那珂川兩岸一帶の地を占め、久慈郡は久慈川の兩岸に亙つて置かれたのであつたが、中世庄園の濫立と共に郡域錯亂し、文祿檢地の際現在の如く定まつた。即ち本郡は全體として北に移動し、兩川の間に夾まることになつたのである。郡内の首腦地は大體三ある。中央の菅谷村は水郡南線の一驛で、且太田線の分岐點に當り、交通上の要衝を占め、湊町は那珂川口にあつて古來商業の繁盛な地であり、大宮町は北部の要地に位し、物資の集散地として著名である。

地勢・戸口　東は太平洋に臨み、南は那珂川を隔てゝ東茨城郡に隣りし、西は栃木縣、北は久慈郡に接する。西北部は多く山地で、縣境の尺丈山・鷲子山は八溝山の連嶺で、海拔前者は五一三米後者は四〇三米に達する。那珂川は源を栃木縣那須郡に發し、河線約一六〇粁、舟楫の便約五〇粁に亙る、本郡の面積は約五一三方粁、戸數二萬三千八百餘、人口約十二萬八千餘で、廣さに於て本

縣第六、人口に於て本縣第三の大郡で、四町二十九ヶ村に區劃れる。

教育 小學校は尋校八、併置校三八、青年學校三四あり、其他諸學校の主なるものは縣立湊商業學校・組合立小瀬農學校等である、郡教育會は事務所を菅谷校に置き湊・菅谷・大宮・小瀬の四部會を設けてある。

交通 鐵道は常磐線が本郡の東邊勝田・佐和・石神各驛を過ぎ、勝田から分れた湊鐵道線は湊・平磯を傳へて阿字ヶ浦に達し、水郡南線は青柳・菅谷・大宮・山方等を連ね、本郡の中原を縱貫した後久慈川に沿うて大子に進み、菅谷から分れた太田線は額田を經て太田に入る。且郡内には國道の外縣道縱横に通じ、各路線共大抵乘合自動車の運轉があるから、交通は奥地の小部分を除いては極めて便利である。

物産 生業は農業と漁業を主とし、物産は北部地方は煙草・炭・紙等、中部地方は米・麥・蒟・茶特に菅谷附近から杉・桐等の苗木を産し、海岸地方は海産物の製造販賣が盛である。

案内順序 先づ湊鐵道に沿うて東部を、次に常磐線に及び、更に水郡南線に沿うて中部西部を案内し郡内を一巡する。

湊鐵道線

百色山 湊鐵道線は常磐線勝田驛から分れ同村三反田地内を通る。其那珂川沿岸に異種類の列植してある。ここは百色山と呼び、天保年中源齊昭(烈公)が江戸小石川藥苑から數多の藥用草木を移し植ゑられた處である。もと反別五反六畝餘歩、今は僅かに其の一部分を存するのみである。

湊町

湊町は那珂川の川口にあり、人口約一萬五千餘、蓋し東海の一大良港であつて漁港計畫の實現に伴ひ益々殷賑を加へるであらう。永産物及びその製造物に富み、中にも鰹節・鹽辛・鯛味噌等最も著はれ、柴田氏の『お頭味噌』宮崎氏の刻昆布の如き已に廣く世に知られてゐる。又大川健助氏は昆虫蒐集家として有名である。

湊公園 地勢高燥、太平洋に面し、湊市街を瞰下し、南方那珂川を隔てて岩船山の蒼翠に對し風光絶佳の地である、元祿中、水戸藩主源光圀(義公)ここに「賓賓閣」を置いて別館とされてから、累代の藩主の遊憩處であつた。『ここを一に御殿山と稱するのはこの爲である。又ここに文武館といつて藩士の文武講習所もあつた。然るに今から約七十年前、元治甲子の年藩に内訌のあつた際、この

文武館も貪賓閣も兵燹に罹つて烏有に歸したので、貪賓閣再興の議がある。園内には、大川健介翁紀功碑が建ててある。

放眼貪賓樓上望、心灰惰木兩全忘、杯看蒼海窄天地、不若逍遙何有鄉（常　山）

秋もけふなかのみとの浦風に雲もあとなくはるる夜の月（源義公）

因にいふ、元治元年甲子、市川三左衛門・朝比奈彌太郎等執政として專權の振舞多く、隨て一藩の紛擾を釀したので、支藩宍戸侯松平頼德、藩主源慶篤に代つて鎭撫の爲に水戸に至り、武田耕雲齋等之に屬して亦等しく進む。然るに市川等砲火を以て之を邀へその入城を拒む。松平侯等之を湊に避け徐に入城の策を講ぜんとし、進んで祝町に達した。時に市川勢已に御殿山に陣し、兩軍水を挾んで相對し砲戰日夜絶えない。是より先、筑波山に據つて義旗を翻した藤田小四郎等の勢、是に至つて武田等の勢と合し、攻戰數時、遂に湊を攻落して之を保ち、市川等水戸に走つた幾くもなくして松平侯、市川等の讒訴構陷する所となつて、幕府から自裁を命ぜられ、武田及び藤田等共の志の仲びざるに憤激し、京師に赴いて朝裁を請はんとし、途を大宮・大子に取り信濃を經て越前に出た。然るに此に至つて勢屈し刀窮まり、遂に金澤藩に投じて斬られた。之を元治甲子の變といふのである。

反射爐址　源烈公夙に意を海防に注ぎ、天保六年地を城西神崎に卜し、黄銅を以て銃砲を鑄造されたことがある。後鐵材を以て巨砲を鑄造することを案じ、南部の人島惣左衛門等を聘して工事を擔當せしめられ、安政元年工を吾妻臺に起し四年全部竣工、嘉永中浦賀の警あつて、防海の議が驟に起るに臨、み齊昭其鑄造せし所の大砲七十四門を幕府に獻ぜられた。蓋し反射爐とは火力を熾烈して鐵を鎔し以て砲を製する所以である。維新後これを廢し、一部は縣立湊商業學校校地となり、一部は耕圃となつてゐる。近年ここに反射爐遺址碑を建てた。當時砲心は水力を以て鑿開したのであるから鑽錐場を柳澤（今中野村に屬する）に設けたといふが、これも今はその形跡の見るべきものはない。

砲臺址　宇和田といふ處にある、弘化中、源烈公が東海防備の爲に設けたもので、口徑六寸乃至八寸の大砲を据ゑ、警備頗る嚴重であつたと傳へてある。

水門歸帆　天保十三年源烈公親しく封内の八景を選まれた時、此處もその一に充てられたのである舊砲臺の近傍で、そこに公の親ら『水門歸帆』と題した碑が建ててある。近くは白砂青松の大洗を

望み、遠くは鹿島灘を隔てて銚子岬に對し、更に眼を轉ずると、煙波萬里の間に布帆風を孕み巨船浪を蹴るの狀爽絶快絶頗る景趣に富んでゐる。

姥の懐 湊海岸から平磯町海岸に通ずる間に、數町が程、斷崖絶壁の下に奇岩怪石の爭ひ立つてゐる處これ即ち姥の懐である。此の邊一帶干潮時は歩して小貝を拾ふに適し、夏時は磯間の海水自らに温まつて、自然の温浴場をなすといふ。

學校 尋常高等小學校一、尋常小學校一、縣立商業學校一。

社寺 縣社樫原神社は 神武天皇を奉祀し、水戸藩主の累代厚く祈願され一所、社殿は甲子の兵火に罹つて烏有に歸したのであつたが、其後再建して今日に及んでゐる。天滿宮は菅原道眞公を祭神としてある、神體は源義公の彫刻に係れる菅公の木像といふ。毎年陰曆八月三日、四日の兩日大祭典を行ふ。これが所謂八朔祭である。寺院には華藏院(眞言宗)淨光寺(一向宗)等がある。

交通 當町を終點とする水濱電車、當町を通過する湊鐵道の外縣道には南、海門橋を經て磯濱町方面へ、西那珂川に沿つて水戸方面へ、東北平磯町を經て磯崎・村松若しくは菅谷方面へ通ずるのがある。

其の他 縣立水産試驗場・測候所・配電所・警察署・町役場・漁業組合事務所等がある。

大川健介翁 翁は心を漁業の改良に盡し、又力を築港の事業に致せるなど、その功績偉大なるものあるを以て、町民皆之を德とし、大正五年相謀つて紀功碑を公園に建てた。

平磯町

那珂湊の東北約二粁餘のところに位する一市街で、東南は平砂遠く波濤を迎へ西北は丘陵を負つてゐる、故に夏は涼しく冬は暖かに、特に海岸の遠淺な所から、夏時は浴客四方より來集し、頗る活氣を呈する、漁業も亦盛な地である。

無線電信 町の北方高原の地に遞信省電氣試驗所平磯出張所がある、大正四年一月一日の創立で、無線式電信電話に關する研究をなすのが目的である。

觀濤所 無線電信研究所附近斷崖の上に觀濤所がある。立つて太洋に面すると鯨波躍つて天に朝し虎浪吼えて巖を嚙み、其の爽快言話に絶する。又水天髣髴の間巨船の煙を吐いて走るが如き、或は紺碧なる沖の波間に漁舟の浮沈するが如き、常北の群峰を雲煙の間に認める如き、其の眺望極めて奇、藩主源烈公この景を賞し天保中碑を建て題して觀濤所といふ。

酒列磯前神社　大巳貴命・少彦名命を祀る、齊衡三年(皇紀一五一六)大洗磯前に天降り給ひしを此にも勸請し奉つたもので、延喜式内の名神大社に列し、今は國幣中社である。古木鬱蒼として社殿を蔽ひ、境内頗る神さびてゐる。

阿字ケ浦　湊鐵道線の終點で、近年海水浴場が開かれ、風景のよい事、水の清い事、プール其他の設備のよい事から、夏季浴客雲集し殷賑を極めて居る。

常磐線——勝田驛

光明寺　勝田驛西方約一粁、那珂郡川田村大字堀口に、眞言宗に屬する密藏院龍虎山光明寺がある。本尊は十一面觀世音菩薩で、聖德太子の彫刻に係る立像一尺の木像である。境内の櫻其の名高く、花期枝を曳く者甚だ多いが、又近頃梅林の計畫中である。

金砂神社　堀口に在り、往昔よりの神域に久慈郡金砂神社を勸請したのが元龜三年。大杉・大栂・大藤等を以て名高い。

經塚　勝田驛から湊街道を西に辿る約二粁、川田村市毛に無二亦寺があつて、その庭の南隅に永祿三年(皇紀二二二〇)に築いたと傳へられる古塚がある。百六年後の寛文五年、當時の地主古澤某なる者が之を發くと、其の中から眞鍮製の經筒が現はれたので、爾來こゝを經塚と呼んでゐる。後藩主源肅公父義公の遺志を繼いで、そこに寺を建て一乘山無二亦寺と稱し、經筒を納められた。

石神驛

大神宮　石神驛から約三粁(此の間自動車の便がある)村松村大字村松に鄕社大神宮がある。元祿九年(皇紀二三五六)源義公伊勢内宮から御分靈を奉遷されたのである。爾來藩主累代毎年正月十五日を以て參拜し、又國家若しくは一藩に大事ある際には奉告祈願等をされた。

大滿虛空藏菩薩　村松山日高寺に安置せる木尊が即ちこの菩薩であつて、日本三大滿のその一である。寺は大同二年(皇紀一四六七)弘法大師の開基で、平城天皇の祈願所である。陰曆三月十三日が緣日で、此の日十三歲の男女參詣して一代の開運を祈る。俗に之を十三詣りといふ。明治三十三年觀音堂に擬り、本堂及び三重塔等鳥有に歸したので、十數年來再建の計畫をなし、既に本堂の建築を完成した。

村松晴嵐　白砂茫漠、松樹蒼鬱、天晴れ風和げる日、身は嵐氣にひたりながら眸を汪洋たる海上に放つて、白砂青松相映する間を逍遙自適する、あゝ何といふ爽快なことであらう。水戸八景の隨一

と稱へられるのも無理はない。源烈公親ら『村松晴嵐』と題した碑が立てゝある。

ながめやる一村松の木の間よりたくひなみ間によれる舟かな（宗祇）

阿漕浦 大神宮を西に距ること四四〇米、同宮の神池である。周圍三粁、風光明媚を以て稱へられてゐる。

眞崎浦 一に正木浦とも書く。周圍約八粁、虚空藏の御手洗としてあつた。然るに之を干拓して耕地となすべく、明治四十五年直立聯成式船用蒸氣機關を設置して排水の用に供へ以て工事を起し、爾來百三十町餘を干拓した後中絶の姿であつたが、近年其工事を繼續して、昭和十年美田約三百町歩の完成を見た次第である。

上宮寺 石神驛を距る西北へ約四粁、神崎村大字本米崎に檜原山正法院上宮寺といふのがある。眞宗本願寺派に屬し、開基は親鸞聖人自作の木像等珍襲の什寶傳へてある聖德太子一代繪卷は、今より六百年前の製作に係り、詞書は京都本願寺三世覺如上人の作、繪畫は世尊寺定成朝臣の筆で、今は國寶に列してゐる。其他親鸞上人自作の木像等珍襲の什寶が少からずあるといふ。

青柳夜雨 那珂郡柳河村青柳にあつて、青柳驛から西へ約一粁、これも水戸八景の一で、那珂川に瀬した隴畝の間に『青柳夜雨』と題した碑が建てゝある。蕭條たる雨の夜、杖を曳いて閑寂の趣を味ふのも一興であらう。

東征船 青柳驛から西北約一・五粁、青柳字東征船といふ舊跡がある。傳へいふ、日本武尊東征の際那珂國青柳の湖に御船を着け給うたが、偶々御船の埋まつたことのあるより、その處を此くは名づけ來つたものであると。嘗て源義公の命により發掘を試みた者がある。獨木船であるとの認はついたが、その折驟かの激雷なので思ひ止まつたとのことである。毎年五月十五日そこに『東征船場』と記した旗を建てゝ祭事を行ふ慣例になつてゐる。附近の森に東征神社といふ一の祠を立てゝある又當時御船を繫ぎ給うたといふ、所謂船繫松なる古松樹が、田間の塚の上に存してゐるのも珍らしい。

菊地可氏 菊池可氏は青柳の人、其の祖某氏國事に貢献せし廉を以て藩主義公から那珂川に於ける鮭鱒漁業『網代元』の特權を與へられ、爾來繼紹殆ど三百年に至る。又鮭魚人工孵化事業は、明治

九年政府始めて氏の漁場で施行されたものである。後に氏之を繼承し、獨力を以て公共の爲に專心之が經營に當り、以て其の繁殖を圖ること五十餘年、其の間那珂川に放流した鮭兒無慮六百萬尾に達する。當漁場に於ける該事業は、實に本邦鮭魚人工孵化法實施の濫觴である。氏は又官で推されて縣會議員となり、縣政界にも少からぬ貢獻をなした。

素鷲神社 青柳の西約一粁、同村大字上河内の鎭守である。永祿天正の間、水戸城主江戸氏初めて山城八坂神社の祭神素盞嗚尊を城内に勸請した。後德川氏が城主となるに及んで、今の金町に遷座し、更に天王町に奉遷し、天保十五年に至り今の地に遷座することになつたのである。爾來每年八月水戸市に神幸祭の行事が行はれる。

上菅谷驛

上菅谷 上菅谷は菅谷村の小字であつて、こゝには警察署がある。不動院は眞言宗の一大伽藍である。當驛は太田線の分岐點で、近年著しく發展して來た。

根本正氏 前代議士根本正氏は下菅谷驛から西南約三粁、五臺村東木ノ倉の出身である。少壯米國に遊び、苦學十年、バチエラー・オヴ・フイロソフイーの學位を得、歸朝後幾ばくもなくして代議士に擧げられ、第一議會以來引續き其の職にあつて奮鬪せられた。未成年者禁煙法及び未成年者禁酒法の如きは專ら氏の力によつて成立したものである。

額田驛

額田古墳 額田東鄉及び南鄉の高燥な地に古墳が累々として存在してゐる。從來鄉人屢々之を發掘して、精巧な土器・鎧・劍・石棺等を發見した。額田驛から約一粁。

常陸鴻巢驛

藤田東湖祖先の墓 常陸鴻巢驛を南へ距る約一粁、那珂郡芳野村大字飯田にあつて、藤田家一族の墳墓である。因にいふ、今同地に藤田を姓とする者は存して居ない。

瓜連驛

常福寺 那珂郡瓜連驛から約三町、淨土宗關東十八檀林の一で七堂伽藍が完備してゐる。本尊は阿彌陀如來、後村上天皇の正平十三年了譽上人の開基に係る。什寶に『拾遺古德傳』と稱する九軸の繪卷物がある。土佐將監の筆で、之に世尊寺行成卿の詞書がある。其他絹本著色法然上人像一幅いづれも先年國寶に指定された。

楠木正家城址　延元元年楠正成、其の族正家をして兵を率ゐて常陸を徇へしめた。正家即ち來つて瓜連城に據り、眞佐竹貞義と戰ひ屢々之を破る。後貞義の子師篤の襲撃にあつて城遂に陷り、正家逃れて陸奥に走り源顯家に仕つた。この城址は常福寺のある所、今尚土壘壕濠の跡が存してゐる。

誕生寺　瓜連驛から二粁餘、同郡上野村大字上岩瀬に誕生寺といふのがある。開基は了譽上人、上人は久慈郡岩瀬城主白石志摩守義滿の子で、曆應四年正月廿五日此の地に誕生した。而めて五歳父を失ひ、瓜連常福寺開基了實上人に就いて出家し、後寺を此に創めて誕生寺といふ。上人の墳墓はこの寺内にある。

靜　驛

靜神社　靜驛を西南に距る約一粁、峯巒屹立して檜杉天を掩ひたる處、數百級の石磴を登ると、社殿門廡最も完備して莊嚴を極め、襄容をして自ら畏敬の念を起さしめる。これが即ち縣社靜神社で常陸第二の宮(第一は鹿島神宮)と稱せられ、那珂郡三十三村の鎭守であつた。祭神は建葉槌命、一名天羽槌雄命、命は太古倭文を織る業を以天照大神に仕へ奉り、又武甕槌神・經津主神の一行に加はつて共々に葦原中國を平げ給うたのである。

蕃藤監物　靜神社の祠官、名は一德、通稱監物、文里と號した人である。藤田東湖に學んで文武に秀で、又忠誠國を憂ふる士であつた。天保以降幕府の綱紀漸く弛び、内憂外患日に切迫し國論の沸騰した時、梅田雲濱等と畫策する所あつた。後水戸賜勅の事の起るに及んで、金子孫二郎・高橋多一郎等と私に藩を脱して江戸に出で、井伊大老を櫻田に要擊した。所謂櫻田十七士の一人である。明治三十五年從四位を追贈された。

小場江堰　靜驛から約四粁、大場村大字小場地内に於て那珂川に設けてある。萬治元年(皇紀二三一八)永田茂衛門が藩祖源威公の命に依つて經營した所のものである。近年縣營を以て小場江水利改良事業を計畫し、戸多外五ヶ村九百二十町歩に亙る工事が完成された。

常陸大宮驛

大宮町　那珂郡西北部に於ける貨物の集散地で人口三千七百餘、警察署並に水戸地方事賣局出張所等がある。

時雍館　大宮から約六粁程西南、野口村に時雍館がある、藩主源烈公弘化元年學校を此地に建てて醫學の研究所となし、降つて安政元年、時雍館と命名して、皇漢學・武藝及び醫學を研究する所と

なした。元治元年藩内騒擾の際兵火の爲に燒失したのであるが、明治二年藩主昭武之を舊に復した。六年野口小學校創立につき當館を以て之に充てたが、後小學校を他へ移轉するに及んで、館亦廢し其の址今は隠畝となり、僅に昔時の面影を忍ぶに過ぎない。されども前面には東茨城郡澤山村地内の御前山、青松鬱茂蒼翠を凝らし、而もその絶壁は麓を流れる那珂川に迫つて、山影を碧潭に涵し而して白帆そのほとりを上下する、勝景さながら嵐山に似たりと稱へられてゐる。

野口の社寺　佐伯神社は忍日命・道臣命・建日命の三神を合祀せるもので、大共元年（皇紀一四六六）讃岐の僧玄海の創建に係る。壽命寺は信照山蓮臺院と稱し、眞宗本願寺派に屬する、貞應元年（皇紀一八八一）創立、開基は親鸞上人である。

玉川村驛

明法房墳墓　玉川驛を距る西南一粁、玉川村大字東野地内にある。明法房とは平宗盛の子清家のことである、夙に武門を遁れて修道に志し、京都聖護院宮覺仁法親王の弟子となつて清圓と係し後辨圓と改めた。親鸞上人錫を本國稻田に留められた時、その弟子となつて名を明法房性信と賜はり嘉祿二年當地に一宇を建立し、樽原山法德院法專寺と號した。親鸞上人姿自作の木像、同上人自筆の六字名號及び明法房姿自作の木像等が現に存してゐる。明法房の墓は當寺の境内にあつて、臨東二十四輩第十九番の靈跡である。

岩崎江堰　玉川驛から北約一粁、大賀村大字岩崎地内に於て久慈川に設けてある、慶安二年水戸藩祖源威公の命に依り永田茂衛門之を經營したのである。用水路延長二〇粁、大賀村外一町五ヶ村六百五十餘町歩の水田に灌漑する、明治三十三年六月永田氏の功德を旌表せんが爲に記念碑を建立した。

山方驛

三浦杉　那珂郡瓜郷村大字小田野、村社吉田神社の社頭前五間程のところに、石階を夾んで二株の杉樹が立つてゐる、三浦杉といつて、各周圍約一〇米、高一九〇米、枝下二五米餘といふ大木で、最近天然記念物の指定を本縣より受けた。こゝへは玉川驛からでも山方驛からでも約一三粁。

久慈郡

概說

沿革　本郡の境域は往古久慈川の兩岸を占め、海岸通は多賀郡助川迄本郡に屬し、而して里川の上流地方は多賀郡に、久慈川上流の保内地方は陸奥白河郡に屬して居たのである。中世以來佐竹氏此地に興り、多賀並那珂の大部を併せて勢を振ひ、天正の末終に常陸を統一したが、慶長七年秋田に移され、爾來德川家の領に歸して幕末に及んだ。郡域が現在の樣になつたのは文祿檢地以後のことである。大子を中心とする所謂保内地方の本郡に入つたのは、永く佐竹氏の所領であつた爲といふ。從つて本郡は古くから政治的に特殊の地位を占めて來た太田町と、奥地産業上の中心をなす大子町と、二個の首腦地を有する。

地勢・戸口　那珂郡の北にあつて、東は多賀郡に接し、一端僅に太平洋に臨み、北は福島縣、西は栃木縣に堺して居る。郡内の大部は山岳重疊し、眞弓(二四二米)、高鈴(六二四米)、西金砂(四二四米)、男體(六六四米)、高笹(九二二米、八溝ノ一、〇二二米)等の高峯峻嶺相望み、南偏の久慈川下流域に良田美地が開けて居る。河川の主なるものは久慈川と里川とで、里川は源を郡の北端小里村の山間に發して南流し、久慈川は福島縣東白川郡から本郡に入り、保内地方を貫いて南下し、漸く山峽を離れて久慈・那珂二郡の堺線をなし、後東折して淺川・山田川・里川等を容れ、久慈濱で東海に注ぐ。延長凡一二〇粁に達する。以上の如く山地に富むから、面積約八一〇方粁で本縣第一の大郡であるけれども、戸數約二萬三千、人口約十二萬餘で、第五位に下つて居る。三町三十一個村に區劃せられる。

教育　小學校は尋常校二〇、併置校三四、青年學校三六あり。諸學校の主なるものは縣立太田中學校、同太田高等女學校、同大子農學校、町立大子女子技藝學校等である。郡教育會は事務所を太田小學校に置き、太田・坂本・賀美・天下野・大子・金郷の六部會を設けて居る。

交通　鐵道常磐線は本郡東南端を素通りし、太田線は僅に河合・太田二驛を連ぬるのみ。水郡南線の保内地方を縱貫するのと、常北電鐵線の太田・大甕間を連ぬるのが見るに足るもので、本郡が山地の多い結果、地績の廣い割合に鐵道線に惠まれて居らぬ。近時自動車の發達著しく、太田を中心

として東は多賀郡助川、北は小里、西北は天下野、西は那珂郡大宮、西南は同郡瓜連、南は水戸等に毎日數回の運轉が行はれて、大に交通を助けて居る。

物産 産業は農を主とし、東海岸の一部のみ僅かに漁業を營む。物産の主なるものは、煙草・蒟蒻粉・木材・炭・楮・紙・茶・米穀・寒水石・斑石・海産物・里川鮎等である。

案内順序 最も名所舊蹟に富む太田附近から、東久慈町方面に進み、引返して棚倉街道を小里に出更に天下野經由の大子街道、久慈川筋經由の大子街道を案内し、最後に大子附近を尋ねて一巡を終る。

太田町及其附近

太田町 縣下北部に於ける物資の一大集散地で、人口約九千四百、官衙學校には警察署・税務署・縣立中學校・同高等女學校・小學校・進德幼稚園等があり、工場の主なものには竹内製紙場、石材工場等がある。銀行・會社も少からずあつて、商業は可なりに活況を呈してゐる。鐵路一條水戸市に通じ道路亦四通して交通が頗る便利である。

孝子喜代太郎墓 喜代太郎は寛政年中の人、今其の墓太田驛を西北に距る數町梅照院の境内にあつて、高野世龍撰文の碑が立てゝある。

太田城址 太田城は佐竹氏の居場であつた。天正十八年義重其子義宣と兵を發して江戸氏を水戸城に攻めて之を陷れ、翌十九年義宣水戸に移り義重此に退隱した。慶長七年德川家康其の封を收めて秋田に移すに及んで、此の城は廢滅に歸したのである。現時此に中學校、小學校を設けてある。

太田落雁 同町榮町の東裏にあつて、水戸八景の一である。今尚水戸藩主源烈公の『太田落雁』と題した碑が立つてゐる。秋穫の候黄田穫々眼界數里に亙り、眞に絶賑の地である。太田驛から約一粁餘。

若宮八幡宮 同町の鎮守で鄕社である。祭神は　仁德天皇、もと佐竹氏の祈願所として應永元年鎌倉鶴岡から勸請したものである。

立川興 故立川興は嘉永五年を以て生る。明治元年藩命を奉じて奸徒討伐の事に從ひ、上總の東金下總の八日市場に轉戰して功を立てた。十四年縣會議員となり、それより縣常置委員、縣會副議長等を經、廿三年衆議員議員となる。又小山線、太田線二鐵道の發起人であり、太田銀行頭取及び農工銀行監査役等をも務めた。家もと望族、而して氏性篤實にして才識に富み、夙に政治及び實業の

方面に多大の貢献をなした。三十九年病歿、享年五十五。

山寺晩鐘 水戸八景の一で、太田驛から西へ數町、佐竹村楢木にある。高燥にして展望の宏濶な松林の内に、源烈公の『山寺晩鐘』と題した碑が立つてゐる。

佐竹寺 太田町から那珂郡瓜連町に達する街道を西南へ約四粁、佐竹村大字天神林にある。花山天皇の祈願所で、元密上人の創立にかゝる。本尊は十一面觀世音菩薩の木像、佐竹氏累世篤く歸依して堂舍の改造をなした。明治三十九年堂宇は國寶に指定された。

稻村神社 同村同大字にある鄕社で、延喜式常陸二十八社の一である。久自國造の祖饒速日命を奉祀してある。

梵天山古墳 稻村神社から西南約二粁、河合驛から西へ一・五粁、幸久村大字島にある。前方後圓なるもの七八箇、其の中最も大なるは久自國造船瀨足尼の墓で、他は皆其重臣一族の墓であらうとのことである。

枕石寺 河合驛から西數町、もと同郡磐田村大字大門に在つたのを此に移したのである。親鸞上人巡錫の途次二三の弟子と大門に來り、日野、日野左衛門頼秋の家に一宿を乞はれたが、頼秋應じない。因て門前に出で石を枕にして露臥された。此夜頼秋悔悟して弟子となり、入西房道圓と稱し家を捨てゝ寺となし、之を枕石寺と號したと傳へられてゐる。

西山莊 太田町を距る西約一・五粁、老檜古杉鬱々蒼々として天を摩し、地上苔滑かにして塵を留めず、自ら仙鄕をなせる所、柴門茅屋の古色蒼然たるを見る。是即ち名君源義公蒐裘の遺蹟で所謂西山莊である。庭前に心字池、觀月臺、公の御手植の松及び公の木像を奉置せる寶庫等がある。内に入ると書齊・燕室等素朴幽雅浸ろに公の至德を偲ばしめる。當年の事蹟は桃橋邊隴畝の間に現存せる源頼寛撰『常州西山碑』に詳かに記してある。桃源橋とは太田町から此の山莊への途中、源氏川に架してあるのをいふのである。公當時此の鄕を武陵桃源に擬して、桃樹を橋邊一帶の路傍に列植されたので、隨て橋名も之に因んだのである。

十載西山麓、難藏夜壑舟、桃源橋下水、流盡幾春秋（安積覺）

山崎信義墓 磐田村馬場の人、年二十、攘夷論を唱へて同志の士と共に屢々幕府に建言する所あつたが遂に容れられない。因て文久元年五月、同志十三人と一擧高輪東禪寺を襲つて英人數名を殪し、己も屠腹して死んだ。墓は其の鄕馬場にある。明治四十四年特旨を以て正五位を贈られた。

旌櫻寺　太田町の東北約二粁餘、譽田村瑞龍にある。境内の一老櫻、三幹に分れ、幹圍各三米、花中に複瓣があつて其の狀旌の如くである。これ寺の名ある所以である

ものゝふの國の風とやおさまれる世にもわすれぬ花の白旗（安藤朴翁）

瑞龍山墳墓　旌櫻寺から數町、國見山の南麓に接し、里川の清流を眼下に眺め、樹木蓊鬱、溪谷幽邃の所、これ水戸藩侯累代の墓地である。墓制恣く一定し、碑は龜首鴟趺、墳は馬鬣封を用ひ、石を疊んで築成し、規模両だ宏壯である。光圀の賓師朱舜水の墓も此域内にあつて、碑面には明徵君子朱子墓と題してある。

那珂通辰墓　太田町を距る西北二・五粁、譽田村増井の正宗寺域内にある。通稱彦五郎、本國那珂西の城主で、延元元年源顯家に從ひ、足利尊氏を京師に擊つて功を立て、朝廷から菊桐の紋章を賜はる。後歸つて瓜連城主楠正家に應援し、金砂城佐竹師篤と戰ふ。義篤瓜連城を攻めて之を陷るに及び、正家は陸奥に走り、通辰等一族四十三人増井の正宗寺の後方獨松峰に於て自刄した。明治四十年特旨を以て正五位を追贈せられた。

佐々宗淳墓　宗淳通稱介三郎、十竹齋は其の號、源義公に仕へて彰考館編修となり、後總裁に進む。又命を奉じて下野那須國造碑を修治し、其の後義公湊川楠公の墓を修むるに際し、宗淳また命に依つて其の事を擔當した。宗淳强記博洽議論風生、而して磊落慷慨毅然として奪ふべからざるの風があつた。元祿十一年に歿し享年五十九、正宗寺塋域内に其墓がある。

日野左衞門墓　譽田村大門もと枕石寺の境内にある。別項枕石寺の條參看の事。

長幡部神社　太田町東一粁餘、機初村大字幡にあつて式内常陸二十八社の一、長幡部の遠祖多弓命を祀り、今、鄕社に列してゐる。

太田町から久慈町・大甕驛間

太田町から久慈町及び常磐線大甕驛に至る行程東へ凡そ十二粁、この間に常北電車及び乘合自動車の便がある。

眞弓山　太田町から約八粁、世矢村にある高峯で、寒水石の産地である。山上に眞弓神社といつて大己貴・少彦名二神を祀つた祠がある。八幡太郎義家奥州征討の際、弓を祇じて戰勝を祈つたと言ひ傳へてある。因にいふ、寒水石は之を太田町に搬出し、石材工場に於て加工することになつてゐる。

中山信名　坂本村石名坂の人、通稱平四郎、雅號柳洲、幼少水戸石川久徵に就いて地理を學び、後江戸に出でゝ塙保己一の門に入る。保己一和學講談所の教授となつた時其の局僚となされ、名山石室の秘書を捜り出した功勞實に沒すべからざるものがある。天保七年、五十歳で病歿、江戸下谷の常泰寺に其の墓がある。著す所二十餘種、新編常陸國誌・關城書考・常陸編年・常陸志料等その主なるものである。

久慈町　大甕驛から約二粁、人口約八、四〇〇。漁業が盛であり、又海岸は風景絶佳、浴場としても適してゐる。小學校は前校長渡邊氏以來經營其の宜しきを得、模範的小學校として夙に名聲を博してゐる。

太田町――小里村間（棚倉街道）

太田・小里間約二十八粁、東西峰講或は迫り或は離れる間を、里川を右に上左にして行くのであつて、乘合自動車の便がある。

薩都神社　太田町の北四粁、佐都村里野宮にある鄕社で、天神立速日命を祀り、式内常陸二十八社の一である。

茅根堰　同村にある。明暦二年里川を堰閼し之を造り、不動澤水路に依つて片山根、小澤二鄕凡そ舊二十有七村に疏通し、頗る灌漑の便を得た。明治二十五年に至り不動澤水路を廢し、新に洞門を設けて之に代へた。洞門長さ凡そ四五米、火藥を以て堅鑛を爆破し、而して始めて之を掘鑿したのである。

斑石　河内村大字町屋から産出する、紅葉斑・笹斑などいつて美しい斑紋のある石である。裝飾用又は碑の材料として用ひらる、産額未詳。

發電所　同村西河内地内に東部電力株式會社の『町屋發電所』がある、里川の水力を利用するのである。明治三十九年創設出力は二五〇キロワットである。尙上流に同會社の經營に係る發電所が三箇所ある。卽ち、中里村東河内の『中里發電所』は同年の創設で出力八〇〇キロワット。同村下深荻の『里川發電所』は大正十二年創設、出力七〇〇キロワット。賀美村上深荻の『賀美發電所』は大正八年の創設で出力五四〇キロワットである。

玉簾の瀧　中里村東河内玉簾寺の境内にあつて、太田町から約十二粁、源を高鈴山に發し、山流六粁、此に至つて驟崖にかゝり、高さ一七・五米、幅五米、之を望めば水晶の簾を垂れたるが如く、眞

に其の名に背かない。流末は西に注いで里川に入る。寺は天和二年(皇紀二三四二)の創立で、本尊は觀世音菩薩である。

飛泉倒斷崖、亂沫散微絲、白布懸空曝、玉簾穿岳垂、雷聲轟地軸、雲額拂山眉、
千歳徐凝後、爲吾洗惡詩(常山)

加毗禮山 中里村大字入四間字御岩山の頂にある。これは常陸風土記に、立速日男神松樹の八俣の上に鎭座し、祟甚しく人民苦しむので、片岡大連、神に請うて高山の淨境に遷座の御許しを得、此處に鎭り給うたとある加毗禮山で、今尙風土記所載傳說の面影を留めて居る。

豐田天功祖先墳墓 豐田天功は賀美村上深荻の人、少壯出でゝ水戸藩に仕へ、遂に彰考館編修總裁に進まれた、其の祖先の墳墓は同地にある。

大菅鑛泉 大菅は賀美村に屬して里川に瀕し、鑛泉が涌出する。溫浴場を設けた旅舍がある。神經痛・リウマチス・痔疾・婦人病等に特效があるといふ。

横川鑛泉 賀美村大字折橋に屬し、街道から北へ約數町、溫浴場がある。特效ほゞ大菅鑛泉に似てゐる。

天龍院牧場 折橋の宿から横川を經て北へ約八粁、舊藩主德川家の經營する牧場で、種馬數頭、外に飼育中のもの常に三十頭を下らずといふ。

太田町——大子町間(天下野村經由)

太田町を距る西北約四十六粁で大子町に達する。其の間生瀨まで約三十粁は自動車の便がある。

國立煙草試驗場 山田村にある、我國唯一の國立試驗場で目下は尙創業時代に屬し、主として本縣に適する水府葉、達磨葉を中心として栽培法並交配による新種造成の研究を行つて居るが、行く〳〵は設備を充完して煙草に關する各般の試驗を行ひ、我國に於ける煙草の最高權威たらんとするものである。

木村謙次墓 謙次諱は謙、字は子虛、醉古と號し、謙次は其通稱である。天下野村に生れ幼少水戸に出でゝ經史を立原翠軒に學び、幾ばくもなく京師に上り吉益某に就いて醫術を究めて歸る。寛政五年北夷わが松前に來つて互市を求めると聞き、乃ち間行して松前に至り事情を偵察し、其の聞見する所を記して幕府に獻じた。十年幕府近藤守重に命じて蝦夷地方を檢察せしむるに際し、謙次隨つて行き、惠土呂府島に『大日本惠土呂府』と書した大木標を建てゝ歸り、且その地方の地理人

情等を筆記して之を藩主に呈し、月俸を賞賜された。明治四十年特旨を以て正五位を追贈された。墓は同村字萬城内にある。

月居峠 袋田村にあつて、往昔袋田城のあつた所。景色幽美殊に紅葉の節最も美觀を呈する。この峠の麓を貫いて約二町の隧道が出來てゐる。

袋田の瀧 月居山の半腹にあつて、高さ一三〇米、幅約七三米、四段の層をなすを以て、一に四段の瀧とも稱する。殷々雷聲をなし、飛沫雪を漲らして頗る壯觀である。

いつの世に包みおきけむ袋田の布引出す瀧の白糸（源義公）

白糸を紅葉のひまに打はへて錦おるてふ袋田の瀧（源武公）

といふもの眞によく其の景致を盡してゐる。

太田町―大子町間（山方經由）

太田・大子間の通路で那珂郡山方以北は水郡線による。

藥谷堰 久米村大字藥谷にあつて、山田川に設けてある。久米・幸久・佐竹諸村の灌漑川水はこゝから疏通するのである。同大字に累代永田勘衛門と稱する者がある。その祖茂衛門なる者始めて藩主源威公に仕へ、治水の功があつたので圓水といふ號を賜はつた。此の堰も圓水の經營になつたものである。子孫藥谷に居住し、近年までは堰守を世襲したのである。

藥師如來 金郷村下利員に藥師堂がある。本尊木造藥師如來坐像は宇治平等院日野藥師堂のと同作で關東々北地方未曾有のもの、而して彫刻術の最も發達した仁安年間の製作に係り、極めて善美を盡してあつて、國寶中最優等品の一であるとのこと。明治四十四年國寶に指定された。

辰ノ口堰 世喜村大字辰ノ口にあつて、横約九米餘、久慈川を導いて渠に入れ之を郡中の田に注ぐ渠水花房に至つて分れて二派となり。一は栗原に至り、一は下河合に至る水利被る所凡そ四ヶ村に亘り總長約五・一五粁に達する。これ亦永田圓水の經營に係る。永田氏修作せし所の坡塘溝渠凡そ四十餘ヶ所、而して此の堰及び那珂郡岩崎堰小場堰が其の最も著名なものである。

赤土煙草 赤土は金砂村の大字の名である。こゝを中心として殆ど全村に亘つて品質の極めて優良な煙草を産出する。藩政時代には藩の御用煙草であつたが爲に、世に水府煙草と稱して珍重され、今は宮内省御料品として毎年百二十貫目を納入する。而してこの納入の分の爲に別に倉庫を設け、又納入の際には關係者一同潔齋し、神前に於て清祓式を行ふのである。年産額甚だ多く、其の價格

全村で二十二萬圓、赤土だけでも七萬圓に達する。

金砂城址 金砂村の金砂山上にあつて、太田町から約二〇粁、嘗て佐竹秀義の據つた處である。治承中源頼朝の將土肥實平等來り攻めて秀義を破り、火を放ちて城柵を焚燬した。後延元中佐竹義篤此に據つて楠木正家及び那珂通辰の兵と戰ひ大に官軍を破る。佐竹氏子孫相繼いで此に居つたが、移封に及んで城遂に廢滅した。城址附近に西金砂神社があつて、大己貴命を祀る。大同元年近江の日吉神社を勸請せるものである。

中島藤右衛門 諸富野村の人、蒟蒻粉を創製して公益を圖つた功勞は實に沒すべからざるものがある。往年藍授褒章を賜つた。

會澤正志祖先墳墓 會澤正志の祖先は諸富野村の人。今其の墳墓は大字諸澤にある。但し其の一族は此の地に現存してゐない。

大子町及其の附近

大子町は人口六・六〇〇、郡の西北にあつて、該地方に於ける物資の集散地である。水郡南線中の名邑で、町内には縣立農學校・警察署等がある。

近津神社 大子町から北八粁、宮川村下野宮にあつて鄕社に列し、級長津彦命を祀つてある。東西兩側に老檜の天を摩するあつて境内自ら幽閑なるに、前には八溝川の清流を控へ、後には八溝山脈の峯巒を負ひて、頗る風致に富んでゐる。鉾杉は天然記念物として、最近縣から指定された。

八溝山 黑澤村にあつて海拔一〇二二米。茨城・栃木・福島三縣に跨り山嶺から一瞥すると近巒遙峯翠を凝して、大小高低風姿一ならず、其勝景筆紙に盡されない。山中に奇草珍花多く夏花立・高つゝじ・二十六峰等名勝の地がある。山上には鄕社八溝嶺神社があり、大己貴・事代主二神を祀つてある。日本武尊東征の砌此の地に至り之を奉祀されたと傳へて居る。

多賀郡

概說

沿革 本郡地域の變遷については、前に久慈郡の條に擧げた事以外特に述べる程の事は無い。首膜地は南にあつては日立・助川兩町の新興地と、北にあつては松原町である。一は鑛山及製作所を有し、他は物資集散の一中心をなす。

地勢・戸口 縣の東北隅にあつて東一帶は海に面し、南と西は眞弓・高鈴・竪割等の所謂多賀山脈を負うて久慈郡に接し、北は福島縣の石城郡に界して居る。河川は僅々大北川一條あるのみで、源を高岡村の山谷に發し、奔流二十餘粁にして磯原で海に入る。面積約五五六方粁で縣下二位、戸數二萬五千五百餘、人口十二萬六千八百を有して縣下四位を占め、之を九町十一ヶ村に區劃する。

教育 小學校は尋常校一一、併置校二五を有し、青年學校三二あり、其他の學校には縣立日立中學校、町立松原實科高等女學校、組合立東海高等女學校(助川)、等がある。郡教育會は事務所を日立

第五小學校に置き、助川・日立・樽形・松原・磯原・大津の六部會がある。

交通 狹長な郡を縱貫して常磐線鐵道が敷設せられてあるから、山寄の數ヶ村を除いては交通は至つて便利である。

物産 鑛業の盛んな本郡の主要物産は、日立鑛山の金・銅、諸炭鑛の石炭、日立製作所の電氣機械等で、其他魚類・鹽辛・紙・煙草・砥石等がある。

案内順序 常磐線鐵道に沿うて、順次南から北に進めば、自然に本郡は一巡することになる。

大甕驛

甕の原 大甕驛の東南、久慈郡久慈町と多賀郡坂上村大字水木の間に一帶の松林がある。これが甕の原で、延元元年北畠顯家が長驅上洛の途次。常陸の守護佐竹貞義の軍に扼せられて難戰苦鬪、偶〻那珂西城主那珂通辰の來り援くるにあひ、遂に佐竹勢を破つた古戰場と傳へる。

泉神社 大甕驛から約七〇〇米、坂上村大字水木に鎭座。式内の神社で、天速玉姫命を祀つてある創立の年月は詳でない。

泉ケ森 泉神社の境内、老杉古松の蔭に池がある。清冽な水が底から湧出し、溢れては泉川となる

炎暑の候此に笻を曳くものが頗る多い。奈良朝の昔已に避暑遊憩の地であつたことが風土記に見えてゐる。

冽々寒泉深樹下、炎天六月颯如秋、豈徒驅逐一時熱、洗盡乾坤萬古愁（藤田東湖）

水木海岸 遠淺でもあり、磯もあつて海水浴場として好適地である。大甕驛から約一・三粁。

下孫驛

河原子 水木に隣し、下孫驛から東へ約一粁餘。自動車の便がある。古來景勝を以て知られ、又海水浴場として、其の名が遠邇に著はれてゐる。海中に岩脈があつて、水面に出てはゐないけれども自然の堤防をなしてゐるから、危難の虞がないのである。

黒澤五郎 當町に慷慨の士黒澤五郎といふ者があつた。文久元年英人の暴狀を聞き、江戸高輪の旅館を襲ひ、後二年正月坂下門の變に死んだ。時に年十九。明治三十五年十一月朝廷其の忠誠を嘉して從五位を贈り給うた。

長山四郎兵衛 下孫の里正、劍法に長ず。幕末國事多難の際、藤田東湖と親交を結び、克く大局に著眼し、鄕に在つて同志の軍資を調達し、大に義氣を鼓舞するに努めた。元治元年水藩内訌の時國老山野邊氏に從ひ、其助川の居城を守り、奸徒の襲擊に會ひ、激戰數次遂に金澤の戰に斃れた。時に年五十八、元治元年八月であつた。昭和三年十一月十日　今上陛下大禮を行はせらるゝに方り正五位を贈らせられた。

大窪の風穴 下孫驛から西へ十數町、國分村大字大久保の羽黒澤にある。洞口一・二米、深さは幾許あるか分らない。入らうとすると中から風が生ずる。故に風穴と稱するのである。

鹿島神社 同大字にある鄕社で、武甕槌命を奉祀してある。大寶元年の創立。田村麻呂將軍蝦夷征討の際、戰勝を當社に祈願せられ、大同元年神殿を寄進し以て報賽の典を擧げられたといふ。後世太田城主佐竹義重之を城北の鎭守として崇敬し、又毎年九月二十九日を以つて流鏑馬の神事を執行された。この神事は今尙存してゐる。水戸藩主も歷世篤く崇敬された。

暇修館址 同大字常光寺の境内にある。天保十五年藩主源烈公庶民をして農桑の餘暇文武を修めしめんが爲に設けしもの、今尙其の一部を存し、近頃まで本村役場に充用してゐた。

大窪詩佛 同大字の人、名は行、字は天民、通稱柳太郎、詩佛・詩聖堂等皆其の號である。江戸に住し、草書を善くし、墨竹を描き又詩を以て名海内に著る。當時市川寛齋・柏木如亭・菊池五山と江

戸の四詩家と稱せられ、又頼山陽・谷文晁等當時知名の文人墨客と相往來した。天保八年二月歿した。年七十一。墓は同地の中城にある。

照山修理 同村大字金澤の里正、寛永十八年藩が檢地を行つた際、修理に命じて檢吏に隨行せしめた。修理其の量地の甚だ苛酷で民に不便なのを慨き、之と抗爭したが聽かれない。因て書を郡宰に致して利害を論陳したが亦却けられ、尚屈せず再三上書死を決して論爭した爲、不逞の罪に問はれ其の弟及び次子と共に獄に下され、七月二十六日皆村界塙山で刑せられた。修理時に年五十九。是より檢地の法稍寛なるを得、幾ばくもなく郡宰檢史等譴を得て自盡を命ぜられた。修理等の三塚刑場趾に儼存し、今尚樵牧者も之を汚さず、照山氏は子孫繁衍して一鄕に重きをなしてゐる。

諏訪の梅林 下孫驛から約十數町、鮎川村大字諏訪にある。天保三年水戸藩主源烈公の植ゑたもので凡そ數百株。鮎川、林を繞り、曙山、川を隔てゝ聳え、花時の風致頗る賞すべく、秋は河鹿の聲閣閣亦愛すべきである。この河鹿は源烈公が日光から移されたものである。

諏訪の水穴 屏風嶽の麓にある石灰岩の浩水洞で、神仙洞とも呼ばれる。內部は廣狹一樣ならず又深くその奥を極めることに出來ないといふ。

鮎川浴場 下孫驛からでも助川驛からでも約二粁。近く會瀨の渚を控へ、海波樓下を洗ひ、鮎川其南を流る。所謂『燒石の湯』とはこゝである。近時鮎川プールが設けられ、一層興趣を添へた。

助川驛

會瀨浴場 鮎川浴場に隣接してゐる。東端突出して岬をなし、磯石の點々たるあたりは安全な浴場である。

助川浴場 助川驛の附近である。土地高燥崖下は白砂靑松を以て渚に連り、海底は遠淺で海水浴場としては誠に好適地である。

高鈴山 多賀山脈の一峰で、標高六百米突。助川驛の西北に屹立し、南は眞弓山、北は立割山に連亘してゐる。

日立鑛山 助川驛を距る西北四粁の處にあつて、大雄院址に事務所及び製煉所を設置してある。助川驛は當鑛山に於ける一切の貨物を呑吐する咽喉部で、こゝから製煉所に至る間には專用電氣鐵道が敷いてある。其の幹線三哩有餘。採鑛所は事務所から阪を上る五粁。海拔約三三〇米。高鈴神峯の二高峯が之を擁してゐる。當鑛山一帶の地は所謂阿武隈高原の南端にあたる秩父古生層に局し、鑛

床は角閃片岩中に層狀をなしてゐる含金銀銅、硫化鐵鑛等で、笹目以下七大鑛體を以て其の主要なるものとする。而して其の面積八百五十九萬九坪（內採掘百三十二萬九千五百餘坪、試掘七百二十六萬五百餘坪）を有するといふ。動力は日立電力株式會社より四千五百キロワットの供給を受けてゐる。最近の調査によると年產額は、

昭和五年度

金	二、四七六、八〇八瓦	價格	三、一九四、一五五圓
銀	二五、二〇三、一二四瓦		六二七、五一八圓
銅	八、五四六、〇五回瓩		五、一七八、九〇九圓

其の販路、金は造幣局へ、銀は市場へ販出し、銅は主として英佛伊の三國へ輸出し、內地にあつては東京大阪へ販出する。副產物として精製丹礬・硫酸ニッケル・白金・パラジウム・アスファルト・ブロック等を製出する。抑〻當礦山は約四五百年前の發見に係るといふ。爾來幾多の變遷を經、明治三十八年に至つて久原房之助氏之を讓り受けて日立礦山と稱し、大正元年更に久原礦業株式會社を組織し、本社を大阪に置き昭和三年社名を日本產業株式會社と改め本社東京に置いて當礦山を經營してゐるのである。

日立製作所　明治四十二年日立鑛山の附屬として設けられ、最初は自家用電氣機械に關する工場であつたが、同四十四年鑛山から分離して一般の需要に應ずる工場となり、日本鑛業株式會社の管轄に移され、次で大正七年日立製作所日立工場と改稱し、同十三年共電線工場を助川宿裏に分離移轉し、更に昭和五年助川驛附近に日立海岸工場を新設した。本所は電氣機械製作の國產化を目指し日本人のみの技術と資本とを以て創始經營せられたもので、この大方針は著々實現の運に向ひ、その製品たる電氣機械器具・蒸氣タービン・蒸氣汽罐・エレベーター及電線等の販路は內地豪鮮滿は申すに反ばず、今や支那・ブイリツピン・布哇・露西亞・印度・ブラジル・メキシコ等の諸外國に進出して日本製品の爲萬丈の氣を吐いて居る。

大雄院　現今日立鑛山事務所のあるあたりは、もと大雄院と稱した寺院の址である。寺は文明二年（一二三〇）南極壽星禪師の開基に係り、もと天童山大雄院といひ曹洞派の大伽藍であつた。然るに明治十六年燒失。四十一年其の末寺であつた現在の耕養寺に合併して今の山號に改め、殘存せる明力鎭守堂及び四佛智見塔を現境內に移したのである。

蠶養神社 川尻驛から二、四〇豐浦町に鎭座、稚產靈神・宇氣母智命・事代主命を祀る。孝靈帝の五年（皇紀三五八）始めて奉祀し、本朝蠶養神社の祖として古來養蠶家の崇敬篤き社である。

川尻海岸 漁業地として商業地として又海水浴場として著名な處。物產は鰹節・鹽辛・鮑・沃度等共も世に聞えてゐる。

栢横樹（きいご） 川尻驛から約二粁、櫛形村大字伊師にあつて、明治三十年頃までは鬱蒼たる林をなしてゐたが、其の後伐採されて今は僅に十九株を存するのみである。材質滑澤で香氣があるので貴だ珍重される。其の最大なるものは周圍四・二米高さ約一八・二米ある。大正十一年史蹟名勝天然記念物保存法により、其の指定林となつた。

川尻川發電所 櫛形村大字友部にある。東部電力株式會社の經營に屬し、出力六〇〇キロワット。大正十年の建設に係る。

高原發電所 黑前村大字高原にあつて大正十一年前項同會社の建設に係り、出力は一五〇キロワットである。

黑前神社 崇神帝の御代に黑坂命蝦夷征討の事終つて、多賀郡角枯山に到りたまうたが、偶〻疾を獲てこゝで薨去された。因て山名を黑前と改めたと傳へてある。神社は卽ち命を奉祀した鄕社である。後源義家安倍一族征討の際此の山に登り。割石の側に八幡の祠を建て、因て更に山名を堅破と號したといふ。今は此の名稱に從つてゐる。

高萩驛

八幡宮 松原町大字安良川に鎭座してある鄕社で、寛和元年（皇紀一六四五）勅によつて山城男山から勸請し奉つたものである。祭神は譽田別命、神功皇后等にまします。昔は多賀郡三十三鄕の總社であつた。

玫瑰（はま） 同町大字高萩字肥前山といふ國有林に自生してゐる。前世紀の殘植物で、香料ともなり染料ともなる。今、史蹟名勝天然記念物保存法によつて指定され高萩小林區署嚴に之が保存の責に當つてゐる。

安良川の爺杉 も近年天然記念物として指定された名木である。

大日本炭鑛・松原炭鑛 高萩驛から約六粁松原町大字秋山にある。大日本は大正六年の創立、秋

山は大正八年の創立である。

花貫川第一發電所　松原町大字秋山にあつて、出力六〇〇キロワット。大正七年東部電力株式會社の建設に係る。

松原發電所　前項發電所と同地にあつて同會社の經營に屬する。出力三〇〇キロワットである。

長久保赤水　松岡町赤濱の人。名は玄珠、通稱源吾兵衞。水藩の儒者名越克敏に就て學び、最も天文地理を好み、遂に諸州を遊歷して日本輿地全圖を著す。後彰考館編修となり、尋いで侍讀となり、晩年命を受けて地理志稿を修む。享和元年（皇紀二四六一）歿した。年八十五。著す所、東奥紀行・天文管窺法・大清廣輿圖・唐土沿革圖・佛儒辨等がある。明治天皇御即位式の折、帝座に備へ奉つた地球儀は實に赤水の考案に成つたものであるといふ。明治四十四年朝廷其の功德を嘉し從四位を追贈し給つた。

鈴木玄淳　松岡町下手綱に住し、醫を以て業とした人であるが、和漢の學に通じ、詩文歌俳に妙を得、和漢年代歌・唐詩平仄考の著があり、又百姓日用訓を著して農家一般の智識を普及せしめた。天明四年病んで歿した。享年八十二。

僧日辨墓　松岡町赤濱の妙法寺境内にある。日辨は日蓮上人の弟子である。嘗て巡錫して此の地に來つて當寺を開き、更に進んで奥州に至つたが、偶々他宗の輩に惡まれ、遂に殺害された。因て弟子等その骸を負ひ來つて當寺の域内に葬つたといふ。

大能牧場　高岡村下大能にあつて、舊水戸德川家の經營に係る。種馬數頭何れもアラビヤ種であるといふ。高萩驛を距ること約一六粁。

花貫川第二發電所　高岡村中戸川にある。大正九年東部電力業式會社の建設に係り、出力七一一キロワットである。

南中郷驛

茨城無煙炭鑛第二第三鑛・東光炭鑛・茨城採炭千代田鑛業所　此等の炭鑛は何れも南中郷驛から六粁の所に在る。無煙第二鑛は南中郷村石岡に屬し、明治四十四年創立、同第三鑛は同村日棚に屬し、大正五年創立、東光炭鑛は同所にあつて大正七年創立、茨城採炭・千代田鑛業所は松岡町上手綱に屬し、大正八年創立、郡内最大の炭鑛である。

磯原驛

天妃山 磯原町の海岸(磯原驛附近)に突兀として屹立した山で、古松鬱蒼、西南に大北川下流を控へ、東は滄海漫々、上に祠があつて、天妃神が祀られてある。此の山、景趣の絶勝なるを以て古來其の名が知られてゐる。

野口勝一 磯原の人、北巖と號す。性篤實にして學を好み、經史に通じ、詩文に巧に、又書を能くし、世人其の德を敬仰して已まなかつた。少壯職を小學校に奉じ、後推されて縣會議員となり、次いで議長に進んだ。又屢〻衆議院議員に擧げられ傍ら東京野史臺にあつて、維新史料の編纂に從事したが、今は故人となつた。

飛田周山 磯原町飛田正氏の長男。明治十年一月生る。始め久保田米僊に學び、三十年竹內栖鳳に師事し、三十三年日本美術院に入り、傍ら橋本雅邦に學んだ。三十八年文部省編纂教科書の挿畫揮毫を囑託されて今日に及んでゐる。文展第一回に『維摩』其の後同會で『天女の卷』『幽居の秋』『神泉』『傳說の淵』等を出品して何時も天來の神技に天下を驚倒し、一躍して特選員として推薦された爾來其の妙技は玉成せられたる人格と共に益〻世の敬重を受けてゐる。

茨城採炭鑛・山口無煙炭炭鑛・茨城無煙炭鑛・大日本炭鑛 と以上何れも磯原驛から四粁乃至七粁の處にある。採炭は磯原町重內にあつて、明治卅四年創立、山口は同大塚にあつて、明治四十一年創立、茨城無煙炭第一炭鑛は華川村芳目にあつて、明治卅九年創立、大日本は本村唐蟲に位し大正五年の創立である。

車城址 華川村大字車の一丘陵の上にあつて、車氏累世の城趾である。慶長中佐竹氏が水戸から秋田へ封を移されるとき、城主大隅守の子丹波守猛虎之を慨して水戸城を復せんと圖つたが、事遂に成らずして死し、城亦廢滅に歸したのである。

佐波波地祇神社 磯原驛から四粁餘、華川村大字上小津田に鎭座し、式內の神社で、社格は鄕社天日方奇日方命を祀る。田村麻呂將軍の蝦夷征討、源頼義の陸奥出征、皆其の途次當社に戰勝を祈願された。

關本驛

湯網鑛泉 關南村にあつて、關本驛から約四粁、車の便がある。土地高燥で四面山を以て圍まれてゐるから、疾を養ふに適してゐる。諸病ことに腦神經系統のものに卓效があるといふ。

佐波波地祇祇社 大津町に鎭座せる鄕社で、天日方奇日方命・大巳貴命・事代主命・大物主命等を祀

つてある。地、海中に突出して風景に富んでゐる。大津町は關本驛から二粁。自動車の便がある。

五浦　大津町の東北六〇〇米許の背面にある。美術家岡倉覺三氏此の地に移住し、次で下村觀山、横山大觀・木村武山・菱田春草等の畫伯、美術の研究、修養の理想地として來り住し、日本美術院を建設した。地の名之より大に顯はれるに至つた。灣内の奇岩怪石潮の干滿によつて其の風趣を異にし頗る奇觀を呈する。又崖下の洞窟は、海波一たび浸入するときは、其の音鼓鐘鼓を拍つが如くに響くのである。故に此を鐘鼓洞と呼んでゐる。

西丸亮　通稱帶刀、松陰は其の號、磯原の士野口北溟の第二子、出でて大津町の西丸氏を冒したつである。幕末東上して雄藩の志士と交り、屢〻死地に入つて維新の業を翼贊した。明治元年官軍奥羽を伐つや、氏其の一隊に長として戰功を立て、翌二年五稜廓に轉戰して又勳功を擧げた。同年北海道天應開拓事務官を拜命し、長官東久世氏に隷して經營五年、遂に職を辭して歸鄉した明治四十年特旨を以て從五位に叙せられた。蓋し異數である。大正二年歿す。享年九十三。

鐵傳七　大津町の人。鮑の製法に新機軸を出だし、之を明鮑と稱し、支那に輸出する。氏嘗て縣會議員となり、次いで議長に進み、一時本縣政界の重鎭であつた。

大津淳一郎　鈴山と號す。身を小學校教員に起し、遂に政界に投じて嘗て國會開設請願委員となり、又推されて數々縣會議員となつた。後縣に出仕して兵事課長を勤務したが、幾ばくもなくして之を辭し、衆議院議員に擧げられ、當選前後十三回、代議士として國政の爲に盡瘁され、其の間大隈内閣の際文部省參政官に任ぜられたことがある。後貴族院議員に勅選せられたが近年物故した。

關山鑛泉　關本驛を距る一粁關本中にあつて、神經系統及婦人病に特効があるといはれる。

平潟港　關本驛から二粁。港内狹くはあるけれども水深きが故に碇船に便利であつて、石巻港から浦賀港に至る東海航路の一良繫船所である。されど常磐線開通以來は、船舶の寄港は稀で、今は專ら近海漁船の避難所たるに過ぎない。

勿來關　もと關本村に屬してあつたが、明治維新後福島縣石城郡窪田村に入つたのである。陸前濱街道の左側に入ること數町の高嶺の上にある。そこに石の祠が二つあつて、一を關東の宮、一を奥州の宮といふ、所謂關の明神である。又源義家の歌を刻んだ碑も立つてある。

吹く風をなこその關と思へども途もせに散る山櫻かな

數株の山櫻今なほ古の面影を偲ばしめる。

鹿島郡

概說

沿革　大化五年下總の海上國造の部内標野以南一里、常陸の那珂國造の部内寒田以北五里の地を割て本郡を立て、爾來郡域に殆んど變化が無い。平安朝の末大掾氏の族成幹本郡を領し、鹿島に城いで鹿島氏を稱し、子孫郡内に蕃延したが、天正十九年佐竹氏に滅ぼされ、佐竹氏秋田に移封の後は里見氏・土井氏等の所領となり、明治の初新治縣に、後茨城縣に屬して今日に及んで居る。郡の首腦地は鉾田町を主とし、鹿島町を副とする。前者は交通商業の中心地であり、後者は常陸最古の神殿の所在文化發祥の地である。

地勢・戸口　縣の東南海岸に横はり、南北に細長く、東は太平洋に臨み、北部一帶は東茨城郡に包まれ、西は北浦を隔て、行方郡に境し、南端の一角波崎町は利根河口を夾んで千葉縣の銚子港と相對する。全郡山無く、北部及中部は高原地帶で鹿田原・石踏原・逢野原・内子原・神戸原等の原野であつたが、近年開墾せられて多くは耕地殖林地となり、南部は廣漠たる砂原である。總面積約四六九方粁、戸數約一萬六千、人口八九・四〇〇、三町十九ヶ村に區劃する。

教育　小學校は尋常校一二、併置校二四、青年學校三〇あり、中等學校には縣立鉾田中學校・同鹿島農學校・組合立鉾田實科高等女學校等がある。郡教育會は事務所を鉾田小學校に置き、大谷・鉾田・大同・鹿島・輕野・波崎の六部會に分れて居る。

交通　鹿島參宮鐵道は常磐線石岡驛を起點とし、本郡の鉾田迄開通を見たが、郡内の交通は未だ鐵道の恩恵を受くるに至らず、主として乘合自動車による。乘合自動車線は、水戸及磯濱と鉾田間に數線あり、鉾田・鹿島間、更に鹿島から息栖を經て南端波崎に至る迄、自動車の運轉があり、本郡を縱貫して居る。但しそれは北浦及利根川の側で、外洋に面した側は頗る不便である。又大船汽と延方との間に北浦を跨いで神宮橋が架けられてあるから、行方方面との交通が頗る便利となつた。此他乘合發動機船が頻繁に北浦・利根川の水路を往復して、千葉縣方面との交通に便して居る。

物産　鹿島浦の鰯、北浦の鰕其他の淡水魚、農産物には米・麥・大豆等、其他特産には波崎縮竝に籐細工がある。

案内順序 先づ夏海村から始めて北部を一巡し、鉾田から順次南に進んで尖端波崎に終る。

夏海村

神明宮 大字成田にあり、大日靈尊を祀り、倉彌根命、經津主命、市杵島姫命の三神を併祀す、今郷社にて、昔地頭成田親綱の創建する所といふ。境内老杉古木多く、古より航海の目標として貴重視せられたといふ。

大谷村

嚴島神社 大字子生にある、市杵島姫命を祀る。往古火災に罹り、舊記皆燒失して詳かでないが、古來有名の社で、靈驗著しと稱し參詣人頗る多い。社殿は六米餘の低地にあり、境内幽邃にして繞らすに清泉を以てし、社殿恰も龍宮の如く、風光明媚最も夏季の納涼地に適する、全く仙境である

楠木神社 大字上太田にある、境内百七十二坪、明治十二年村人和田勘惠氏私に創設せしものなるが、同十六年公稱を許さる。

鹿島神社 大字造谷にあり、和銅三年の創立で、日本武尊東征の際戰捷を祈りし所と言ひ傳ふ。

諏訪村

縱山 縱山より鹿島街道は二分して、右鉾田行となり、左鹿島街道の本道となる。

瀧濱の瀧 鹿島郡には概して瀑布なく、ひとり大字瀧濱の瀑を最大のものとす。高さ七米、幅〇・五米、甚だ奇觀を呈する。瀧濱は鹿島灘沿岸唯一の海水浴場として近年大に世に知られるに至つた。

德宿村

舟木開墾地 大字舟木は元と廣漠たる舟木原なりしも、明治十三年舟木眞氏拜借して開墾し、現に一大字を成して居る。

舟木眞 下館藩士にて弘化四年七月生る、開拓農學校英語教授であつたが、屢々海外に渡航し、牧畜、開墾の必要を感じ、明治十三年此村に來りて開墾に從事し、巨額の資を投じ、不生産的の曲野を開いて、遂に今日の大字舟木を創設するに至つた。村長となり、縣會議員ともなり、後東京小石川繁盛寺住職となり法眞と號し、大正五年二月寂す。區民碑を建てゝ其功績を傳へて居る。

德宿鑛泉 大字德宿の兵部山にある、該山林の麓より湧出する水を沸すのであるが、諸病に效ありとし、浴客常に斷へない。

安房城址 大字安房字三階にある、現今土壘及古井を存してゐる。西北は絶崖にて三層をなす。往

昔德宿幹詮之に居り、後安房を氏とすと。

巴　村

無量壽寺　大字鳥栖の高臺眺望よき所にある。親鸞の徒弟順信房の開基に係り、二十四輩の内第三番で、光明山と號し、本堂に見眞大師の阿彌陀如來尊を安置す。此寺の創立は大同元年僧琤阿によつてせられたが、承久年間親鸞當寺に留まること三年、法弟順信房をして法を嗣がしめた寶物少なからず。紙本着色拾遺古德傳（殘闕）一卷は國寶に指定された。親鸞の靈跡として、眞宗信徒の巡拜するもの多く、大正十一年には九條武子姫、大谷光演師も參拜せられたといふ。

主石神社　大字大和田にあつて、大山祇命を祀る。嘉祥三年（一五一〇）六月官社に列し、貞觀三年（一五二一）月二十九三日從五位上を授けらる、今村社である。

郡方役所址　大字紅葉にある、享和中水戸藩の創設せる役所のあつた所で、領内南方十一組地方の政治を行つた所、小宮山楓軒以下詰め居りしも、天保元年に廢せられた。

用次城址　大字紅葉字大乘にある。高約一五米、東西一一〇米、南北七三米、今壘隍を存す。往昔鹿島助幹之に居り、後德川賴房別館を此に設く。

僧順宜　鳥栖無量壽寺の住職なるが、性豪邁、往生忘信の正覺を研究する傍ら、萬國地圖の研究に興味を有し、從つて蘭學を修め、西洋の風俗を探ぐるを樂みとした。夙に小笠原島開拓に志し、天保九年江戸に上り同志を求め、高野長英、渡邊崋山等と交はりしも議合はず、一旦歸鄉して富豪大内五右衛門に圖り、資を得て將に出發せんとするや、不幸其心意を疑はれ、獄に投ぜられしも、後許されたといふ。

沼　前　村

沼前村は郡の北端涸沼に沿うて居り、從つて淡水産に富む。

海老澤城址　大字海老澤にある。高一八米餘、東西南の三面は土壘を繞らし、北方を追手とす、面積九百坪、往昔海老澤彈正之に居ると。

宮崎城址　大字宮崎にある、東西約一四〇米、南北約七〇米、周圍に隍壘を繞らし、本城の北は懸崖で、涸沼を俯瞰する。總面積一萬餘坪、昔鹿島家幹之を築くと。

川崎八右工門　大字海老澤の人にて加倉井砂山の門に學び、後巨萬の富を致し、北海道を拓殖し川崎銀行を創立し、卒先して海防費を献金し、公共に盡した。明治四十年一月病歿す。

長谷川莊七　大字駒場の人、人となり沈毅英邁、夙に勤王の大志あり、文久元年藤田小四郎に從ひ、義兵を野州大平山に擧げ、轉じて筑波山に屯し、小荷駄奉行となつて奮鬪せしが、後元治甲子湊の戰爭となるや、飯田軍藏と共に先鋒として、湊の御殿山を襲ひ、敵彈に中りて斃る、年三十八明治に至り靖國神社に合祀せらる。

勘十郎堀址　東北は海老澤に起り、西南は巴村紅葉に至る約七粁餘の間に、運河の開鑿を試みた跡がある。幅約九米、即ち涸沼と巴川とを通じ、水戸から江戸までの水路全通を圖つたもので、水戸藩主肅公が處士松並勘十郎の計畫を採用したのであつたが、士民の反抗を買ひ、寶永六年勘十郎放逐せられて此堀割工事亦中絶したといふ。

鉾田町

鉾田は本郡中樞の町にて、警察署・縣立中學校・組合立實科高等女學校等がある。戶數六百餘、人口三千五百餘。

鉾田城址　平城で土壘が有す。東西約二二〇米、南北五五米、文祿年中佐竹義宣酒匂豐前守を置いた所。

三光院　阿彌陀如來を安置す、嘉祥三年明詮和尙の開基で、慶長十五年尙連宮特に興寫を許されたと。明治二十年燒失―後再築した。

新宮村

畑田城址　大字畑田にあり、高一五米、東西約三三〇米、南北約二二〇米、本城は方九〇米土壘を繞らす。往昔德宿幹秀此地を領す。天正十九年佐竹氏の爲に滅された。

西光院　畑田城の城外にある大寺院である。阿彌陀如來を安置し、無量山と號す。承和三年(一四九六)、東範阿闍梨の開基に係る。後寄息法師中興の祖となり、應永元年(一二〇五四)再修して今日に至る

尙詮爪髮塔　僧尙詮は畑田の人、俗姓佐藤、母は石崎氏、寶曆十二年江戸に出て東叡山壽昌尙純の法弟となる。安永五年法親王に奉事す。天明四年叡山に登り得度し、文化二年大城に杖つくを許され、四年紫衣を賜はり、五年親王の師保となり、六年大僧正となる。十四年五月逝く。壽六十八叡山本院に葬る。遺命により明年正月二十六日其爪髮塔を、鄕里の西光院境內に建つ。

上島村

華藏院　天台宗で大字汲上、字下宿にあり、阿彌陀如來を安置す。安和二年(一六二九)慈泉和尙の

開基で應永元年全く燒失し、院主叡繁の努力で再興したが、天明八年再火災に逢うて舊觀全くなし。

梶山城址 大字梶山にある、往時中居時家の居た所で、應永中城主中居幹繼、上杉彈秀の亂に當して滅び、城廢れた。

白鳥村

中井城址 大字中居字城の内にある。高さ約一二米、二廓ありて東西に並列す、東を本城とし、西を外城といふ、東西約一四五米、南北約六〇米隍壘を繞らし、往昔鹿島時幹之を領し、天正十九年に至り城主秀幹佐竹義宣に滅された。

門井掬水 大字札の人、鎬木清方の高弟にて美人畫の名家、帝展にも入選し、其名著る。

福泉寺 大字大藏にある。臨濟宗にて國寶木造釋迦如來立像を安置す。大掾平忠幹が僧惠光を請じて建つる所で、正中二年北條高時之を再興す。寺寶に維摩居士の像あり、唐僧無準禪師の讃語及び源義公の添翰を藏す。

札城址 大字札にあり、高一五米、方九〇米、壘を存す。往昔大掾清幹の子札繁幹の居城であつたが、天正十九年中居城と一緒に滅んだ。

大同村

長者宅址 大字角折にある、俗に文太長者の屋敷跡と稱する。文太は鹿島神宮の僕であつたが、後此處に住し鹽を燒き、巨萬の富を累ねた。二女容色非凡、京に上り高貴の姫となると傳ふ。

心あらん人に見せはやつのおれの鹽やのけふり波のよるへを（文正草子）

玫瑰自生南限地帶 大小志崎に在る。天然記念物として國の指定を受けた珍らしい地帶である。

立原城址 大字和にあり、中世鹿島久幹の居つた所、久幹は成幹の五子で立原五郎と稱した。天正十九年の亂に遁れて吉田郡(今東茨城郡)粟崎に隱れたといふ。

慈眼寺 大字濱津賀にあつて、神戸〇と號す、神宮寺三大末寺の一にて、觀世音を安置す。

中野村

廣憧院 日月山と號し大字林にある、行基菩薩作の地藏尊を安置す。寺寶の心經一卷は弘法大師の眞筆と言ひ傳ふる。

中村城址 大字中村にある、往年林重頼之を領す、正平中定行なる者足利基氏に從つて功ありしと

豐郷村

沼尾神社 大字沼尾にある、鹿島神宮の攝社で、神武天皇時代の創立といふ。天保十四年源烈公書の額を掲げてある。

坂戸神社 大字山之上にある、創立は沼尾神社と同時で、風土記に坂戸社とあるは此社である。

沼尾城址 大字沼尾にある。往時林重幹之に居る。

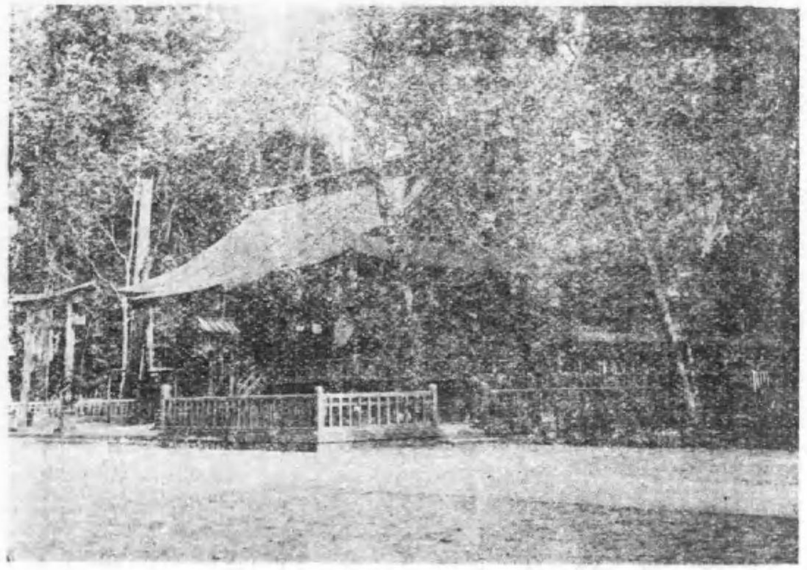
沼尾池址 沼尾神社の後にある。風土記に此沼の蓮根を食せば、病效ある旨記しあれど、今は水涸れて水田となつた。

沼の尾の池の玉水神代より絶えぬや深き誓なるらん（藤原光俊）

塚原卜傳墓 大字須賀にある。卜傳は鹿島神宮祠官吉部覚賢の二男で延德元年に生れ、塚原新左エ門の嗣となる。武藝に長じ鹿島新當流の開祖で、天下を周遊して將軍足利義輝の賓師となる。弟子を教ゆるや莊重持敬を主とし、其人にあらざれば其術を傳へず。沈毅端正、武人の典型であつたが元龜二年三月十一日歿した。年八十三、法名寶劍高珍といふ。

鹿島町及豐津村

鹿島神宮 字御笠山にある。官幣大社で、武甕槌命を祀る。其創建は神武天皇の元年なりといふ。



鹿島神宮

境内三萬千八百坪餘ある。造營の年期は大寶元年に於て二十年と制定せられしも、弘仁三年以來幾分改正せられた。貞觀三年の修繕には材木五萬、工夫十六萬九千餘人、料稻十八萬餘束と舊記に見えて居る。社殿は北に向つて建つ。大祭は創建以來年々三月九日を以て春季祭を行ひ俗に『鹿島の祭頭』とて勇壯なる古式の祭である。九月一日・二日・三日に亙る御神幸祭は所謂提灯祭で是れも賑である。又流鏑馬祭は五月三十日に行ふ。天慶年中より始まるといふ。神ながらの老木天を覆ひ、神々しいこと限りない。拜殿・幣殿・石ノ間・本殿・攝社奥宮及寶物刀劍等を國寶に指定された。

御笠山 神宮の周圍を繞れる山林の總稱で、山中躑躅多く、古昔大神の冠れる兜を納めて置いた所であるといふ。御笠神社を祀る。又櫻樹多きは、維新前佐久良東雄が、王政復古を祈つて献木したるものによるといふ。

うつり行く神の宮居のしるしとやこゝをみかさとかねていひけん（例傳記）

要石 奥の宮に向ひ右に入り、約一七〇米の所にある第一の名所で、地を拔くこと〇・七米、周り一米ばかり、頂上圓く、花崗石に似て居る。此石堀るに從つて大さを加へ極まるなしと傳へらる。

奥の宮 神宮前より約一一〇米の右側にあり、大神の荒魂を齋き祀る。本殿と共に國寶である。

御手洗池 奥の宮より左折して坂を下り、約二二〇米の所にある。四邊古木森々たる幽境にて、清水湧出して地中に入る。これに入れば大人小人共に水深を同うすと傳へらる。

經塚 神宮より約一二〇米、馬場の左側森林中にある。親鸞上人の築かれたものといふ。

鏡石 神宮の裡手にある。形圓鏡の樣で、或は曰ふ天隕石ならんと。

御神木 同所にあつて長幹天を摩し枝葉空を覆うて居る。神宮最古の老杉と傳ふ。

アイロコイロの宮 大船津神宮橋畔から約七八〇米、縣道に沿つて右側の田畝中にあり、龍神を祀るアイロコイロとは津の東西の義だといふ。

神宮橋

神宮橋 北浦を横きつて、豊津村大船津と對岸の延方との間に跨る。鐵筋混凝土橋、長さ約一粁。

鎌足神社 アイロコイロ宮より約一一〇米、西街道の左側にあり、藤原鎌足誕生の地にて、字も藤原といふ。

根本寺 藥師瑠璃光如來を安置す、瑞龍山と號し、推古天皇の御宇に聖德太子勅を奉じて建立したる古刹である。開山は高麗の人東灌大僧正で、勅願、勅願及び多數の寶物を藏す。明治維新前常山和尚此寺に住したが、諸國遍歷の後再び來りて、當山の復興を圖り、近年勅願塔を建

立し、自ら書して之を刻せしむ。和尙書を能くし、亦畫に巧で、猟介にして俗に媚びず、其名一世に高かつた。

鹿島文庫 延寳三年の創立で、和書一千部及び柿本人磨の木像を納めてあつたが、享保十六年大風の爲めに倒壞し、寳庫に移したと傳ふる。

護國院 眞言宗で、聖武天皇の建立である。不動明王を安置し、御寳輪、天國の寳劍を始め寳物多い。

順譽大僧正墓 神宮境内にある。文明年中神宮寺中興の祖にて道德最も高く、在職十餘年にして寂す。側藍の坤隅に葬り、參詣者四時絶へず、後五輪塔を建てた。

波野村

高天原 鹿島の要石より約一粁、波野村大字神向寺にあり。砂原にして矮松點在し風景が佳い。大神の古戰場なりといひ傳ふ。

鬼塚 同所附近にあり、高一一米、長五五米、土人いふ賊の將軍を葬りし所なりと。神宮神官祭は此塚上に於て行ふを例とする。

末無川 鬼塚の約一二〇米の所にあり、大神の劍を洗ひたまひし靈跡なりとひ、此川供流となりて末がない。鹿島七不思議の一。

鹿島神宮一の鳥居 大字明石にある。これは海岸の方からの一の鳥居である。

高松村

栗生城址 大字栗生にある。香城山と稱す。高約二〇米で、三廓あり、內城は東西約二二〇米、南北約一一〇米、外城は東西約二二〇米、南北約二二〇米、往時鹿島幹實之に居た。

神宮寺址 鹿島山金連院神宮寺は、初め本村大字鉢形の神宮澤にあつたのを、後鹿島神宮の境內與馬場に移し、更に又新町の後に移した。眞言宗で、天平勝寳元年(一四〇九)僧滿願の開基、實に本朝神宮寺建立の創始といはれる。滿願卽ち大般若經全部六百卷を書寫し、又佛像を畫いて寺に納めた。大同二年藤原寳貞勅を奉じて鹿島神宮境內に移し、嘉保元年四月雷火に燒亡せしが、後源頼朝之を再建す。建長七年笠間城主長門守藤原時朝、征夷大將軍宗尊親王の命を承け使を大唐潮州の禪溪院に遣はし、一大經藏五千八百七十三卷を請贖し之を獻納したといふ。文明年中順譽大僧正法柄を執り敎化頗る隆であつた。寛文七年鹿島大宮司則敦、神佛混淆世敎に害ありとなし、大般若經を

焼き、寺領を減じ、佛徒を排斥し、延寶五年遂に寺を境外に移すに至つた。明治三年廢徒の爲に焼かれ廢寺となる。

鹿島義幹墓　大字鉢形高天原の南にある、鹿島神宮大宮司鹿島氏祖先の墳墓で、毎年祭事をなすといふ。

雲察法子墓　大字國末にある、戝後新發田の人にして、學を好み、雲洞和尚に師事し、白河の森巖寺に住したが、白河侯に從つて姫路に移り、後江戸深川に隱れた。數災續出し遂に鹿島の國末に住す。讀誦を廢して專ら佛を稱し、日に六萬聲二十餘年一日の如く、天明四年九月五日寂す。壽八十一。

僧顯了　大字國末の人、俗姓橋氏、文化三年江戸大金寺に住し、十三年瓜連の常福寺に轉じ、文政三年小石川傳通院に轉じ、六年增上寺に榮轉し、大僧正に任じ寶譽の號を賜はる、天保二年三月寂す、壽六十八。

息栖村

筒井浮妙墓　大字筒井の極樂寺にある、淨妙は此地に生れ、三井寺の僧兵となり、治承の役高倉宮を助けて宇治橋に戰ひ、事破るゝに及び歸つて此に居り、此塚に入定したといふ。

息栖神社　大字息栖字登内にあり、岐神を祀る。神功皇后攝政三年の創立といひ傳ふ。明治六年鄕社となり、十年縣社に列した。境内には老杉多く、鬱々として社殿を圍む。

鹿島潟息栖の森の杜鵑船をとめてぞ初音聞きつる（藤原時朝）

居切堀　大字居切に在る、所謂居切の堀割で、明治初年の開通に係り、東は海より西は北浦へ通ずべく鹿島郡の地を兩斷す。こは浪逆浦沿岸年々洪水の患あり、この川を開鑿して其排水を圖りしものなるも、實際は其用を爲さない。

忍潮井　息栖神社前の水中に立てる鳥居の左右に奇石があつて、一を男瓶といひ徑六尺、一を女瓶といひ徑五尺ばかり、潮の干滿によつて或は隱れ、或は露出したと傳ふるが、今は埋れて見えぬ。

中井敬之介　洋學に通じ幕臣なるが、息栖神官の緣者で此土地に來り開墾事業をなし、明治十五六年頃縣會議員として令名あり、功績が多かつた。

輕野村

輕野橋　大字溝口にある、神池より流出する小川に架けた橋で、歌の名所として知らるゝ。

鹿島なる輕野の橋のよとともに思ひ亂れて戀や渡らん（衣笠内大臣）

神の池　大字溝口にある。周圍約四・三六粁、寛永十八年の飢饉には此池の藻草をとりて食ひしものがあり、鹿島神宮の恩惠によると感じ合つたと。或は此池を業池、御池、除池など〻書き、寒田池ともいふ。

砂山　神の池の南より、若松村の南端迄延長約八粁、所々小松あれども、最南方は全く赭山である

文化村　白栖村との間に亘る土地で、大正十一年東京の人某氏が三百町歩ばかり購入し、文化村を拓く計劃をして居る。神の池に近く、空氣清澄で所謂白砂青松の美しい土地である。

若松村

長照寺　日蓮宗で、惠日山と號す。大字太田新田にある。寛政四年正月太田宗助の創立で、上總國長柄郡國府里村の廢寺を此處に移し、地所十五町歩を寄附したものである。

太田宗助　幕府麾下の士なるが、夙に殖産興業に意あり、矢田部に荒蕪地多きを聞き、開墾の爲め拂下を請ひ、延享元年許されて七百十町歩（此代金百五十兩）を得、農民を募つて二十年間に四十餘戸を集め得て、村を太田新田と曰ふ。實に寳暦十三年六月の事で、每戸十五町歩の土地を給したといふ。

須田因信　上野國山田郡名久木村の人、其先は建久中奥州和田伏見の城主なるが、後世名久木村に移住す。因信に至り江戸に出て商業を營みしも、開拓業に志し、太田新田に來りて之を太田宗助に謀る。議成りて、四ヶ所の土地を買得し、耕地山林三百餘町歩を開く、實に文政三年正月の事で、時に年六十六、殖民の方法宜しきを叶ひ、農民四方より集る。文政九年五月病を以て歿す、年七十二。嗣子英信父の志を繼ぎ精勵努力、天保三年始めて一村をなし須田新田と稱した。

柳川秀一　柳川新田の人にて宗左衛門と稱す。日川沿岸の地荒蕪に屬するを慨き、弘化二年八月官に請うて百五十町歩を拂下げ、役夫三百餘人を募集し、開墾に從事す。爾後殖林に、耕耘に、殖民に、慘憺たる艱苦を經ること十九年、功ならんとして文久元年八月病に罹り歿す、年六十一。嗣子秀勝父の志を繼て怠らず、慶應二年遂に一村を創設して柳川新田といふ。明治二十二年朝廷秀勝に藍綬褒章を賜うて、其功業を表彰せられた。

若松水産學校　大正十年に廢して、後實業補習學校となり、今青年學校となる。

矢田部村